長夢。

緑ノ小石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
長夢。

【Ｎコード】
Ｎ２５９５Ｈ

【作者名】
緑ノ小石

【あらすじ】
うだうだした昼下がりの少女の訪問。少女から渡される「娘にしてほしい」。２６歳にして１０歳の娘を持った男の話。父と娘の生活がここから始まった。

プロローグ

今日も仕事が休みだから昼に起きたんだ。
寝たのも遅かったし、外も雨降ってるから暗くて寝易いし、それに夢の世界はすばらしいからね。
んで、いつまでの現実逃避はいかん！とだらだら起きて、だらだらコーヒー淹れて、ぼけーっとしてたんだ。
そうしたらチャイムが鳴るわけ、玄関の。
居留守を決め込もうか悩んだけど、宅配便かな？とか思いつつインターフォンを見たんだ。
うちのインターフォンはカメラ付だから取り敢えず画面を見たのね。
んでも、誰も映ってないわけ。外のいつもの風景しか映ってなくて、間違えたのかな？って思って家の中に戻ったんだ。
でもまたしばらくすると、ピンポーン！！って鳴るの。
でも画面には映ってなくて、いたずらかと思ったんだ。
無視してるとまた鳴るの、ピンポーン！！って。
いい加減鬱陶しいから玄関のチェーンって言うの？あの棒みたいなやつをつけたまま少しだけ扉を開けたの。
んで、隙間から可愛い小学生ぐらいの女の子。泣きそうな顔でこっちを見るの。しかもびしょ濡れ。
こっちは「？？」ってなってキョドっちゃたんだけど、でもさすがに可哀想だからドアを開けなおしたんだ。今思えば危険だよね、ドアの影に人がいたかもしれない訳だし、でもその時は焦ってたからね。
んで、えーっと・・・って声をかけたらその子、俯いたかと思ったらいきなり泣き出すの。
え？えっ？ってこっちはパニック。
一応周りを見たんだけど誰もいないってか、その子の荷物みたい

なのが玄関先にあるし。キャスター付の大きいのと、スポーツバック。その子も赤いランドセルを背負ってるし。
取り敢えず泣いてちゃわからん。とその子をなだめてたの。
お嬢ちゃんの名前は？とかいくつ？とか聞いたんだけど返事なし。
しかも段々ひどくなって時々嗚咽とか聞こえるの。
外は雨降ってるし若干寒いし、しばらく悩んだけどご近所さんに見られたら大変だから家に上げたの。荷物と一緒に一旦ダイニングへ。その子はテーブルに座らせてと。
ティーパックだけど紅茶を淹れてあげて、びしょ濡れだからタオルを渡したんだけど俯いたままで受け取ってくれなくて、しょうがないから頭だけ拭いてあげたんだけど、びしょ濡れの服は・・・もちろん着替えなんて家にはないから保留。本当は風邪をひかれても困るからシャワーでも入ってもらいたいけど、知らない子を自分の風呂に入れるとかやばいでしょ、通報されたら一発アウト。
んで、もちろんそこから沈黙。いやぁ、長かったよ。一通り親は？とか聞いてみたんだけど俯いてるだけ、返事なし。まぁ泣き止んではいたからいいんだけど。
手持ち無沙汰で色々考えたんだけど、親戚にはこの年代の女の子なんていないし、いくら思い出しても見覚えはないし。迷子？でも荷物からして家出っぽい。だけど、そんな事する感じの子じゃないし、それになんで俺？もしかしてこのマンションを順番に？親が捜してるんじゃないか？もしかすると俺、誘拐犯になる？とか訳わかんない事になってたんだけど。
そうこうしてるとようやく飲み物を口につけてくれて。
時間にすると３０分弱ってとこだけど、体感は2、３時間は経過したね。
落ち着いてきたみたいで、一安心してたとこで、その子に渡されたの、封筒。
ホント普通の封筒に名前が書いてあって、もちろん俺の名前になってるんだけど、裏には見ず知らずの女の人の名前。

怪しさ満点なんだけど、しぶしぶ開けてまずは手紙、ざっと２０枚オーバーしてるし。

この手紙の内容が目を疑ったとかそんなレベルじゃなくて、もう本格的に作り話。

要約すると、

・この子の名前は小夜［さよ］１０歳。小学校５年生。
・手紙の差出人は母親の叔母。
・母親は蒸発し、生死不明。
・叔母は病気を患い入院している。
・叔母が亡くなると小夜ちゃんは孤立無縁になる。
・この子は俺の父親の子らしい。（俺の両親は６年前に他界）
・俺の事は興信所で調べさせてもらった。
・この子が成人するまで俺の養子にして欲しい。
・成人したら離縁しても構わない。
・いくらか生活費はこの子が持ってる。

手紙と一緒に養子縁組の届出と、後見人の弁護士の名刺と、転校手続きの書類３つと、銀行の通帳が入ってて、養子縁組届出は養親を記入するだけ。弁護士は隣の県。転校手続きの書類は証明書とか入ってるけど、提出先は俺の家の近くらしい。通帳はこの子名義で６千万ぐらい（正直焦った）。

つまり、俺の腹違いの妹を養子にして後１０年住まわせて欲しい。ってのが要求で、無茶なお願いを謝る内容が節々にあって、理想は特別養子にしたいけど、養子にするのは遺産とかの関係？で戸籍上からもこの子を守りたいとの事で、施設には絶対に預けたくないら

しい。
つか、興信所で俺の事を調べたってなんだそりゃ。まぁその事も謝ってるからいいんだけど、調べられて困る事はないはずだし。
一通り渡された封筒の中身を確認し終わって、状況が読めてくるまで大分時間がかかったんだけど、その間じっとこっちを不安そうに見てる小夜ちゃんで居た堪れなかったんだけど、ごめんね馬鹿で。
まぁ、普通に拒否の方向で。妹とは言え、いきなり見ず知らずの１６歳も下の女の子と生活出来ないし、１０年間はこの子の保護者をやらないといけないなんてね。
それで話を進めていったんだ。

「えーっと、小夜…ちゃんだね？」
うなずく。よかった本人で。
「叔母さんのとこから一人で来たの？」
肯定。あの荷物を持ってよくきたなぁ、って思ったんだけど後から聞いたら途中までタクシーだったみたい。
「この手紙の内容は知ってる？」
首を縦に振る。やっぱりか・・・。
「えっと、叔母さんと話がしたいんだけど？」
今度は首を横に振る。
「連絡先がわからない？」
今度も否定。そりゃそこから来たんだからね。
「じゃあ、入院先の病院を教えて」
否定。って事は…。
「病院がわからない？」
やっぱり否定。
連絡先はわかるけど、話が出来ない。入院先の病院は知ってるけどって事は…。

「入院してた病院は教えられない？」
チェックメイト。涙を堪えながら首を横に振るんだよね。
つか、否定しちゃったよ。あーあ、最悪の状況じゃない事を祈りつつ、一応最終確認。
「もしかして…亡くなった？」
確認はいらなかったみたいで、俯いて小刻みに震えちゃったんだけど…。
って事はこの手紙は遺言になっちゃた訳で、小夜ちゃんは孤立無縁になったって訳だ。いや、俺が兄って話だから孤立無縁ってわけじゃないのか。
一応、謝って、しばらく間をおいて話を進めたんだ。
「弁護士の人は知ってる人なの？」
否定。
「小夜ちゃんはいいの？いきなり見ず知らずの男の家で生活するなんて」
「……」
はい、無言です。そりゃそうだよ。いくらなんでもそれはおかしい。そう言われたからって「はい、わかりました」なんてならないし、兄とは言えどこの馬の骨ともわからない男と生活とかあり得ない。しかも、俺は本当に兄なのかすら怪しいし。施設は駄目だって書いてあったけど、最悪の状況でも本人の意思を尊重しないとね。
んじゃ、まずは弁護士の所に連絡して、どう申請すればいいか相談してって考えてたら小夜ちゃんがきちんと座りなおして、俯いてた顔を上げてしっかりと真剣な目でこっちを見つめるの。んで、
「小夜と言います。高校生になったら早く一人暮らしをします。迷惑をかけないように頑張ります。邪魔にならないようにします。それまで置いてください。お願いします」

って頭を下げるの。実はさっきのチェックメイトはチェックされたって宣言だったりして。だってそうでしょ？小さな女の子が雨の中、一人で尋ねて来て頼る人はあなたしかいませんって言ってるんだよ。しかも聞けば腹違いの妹だって言うし。まぁ言われてみれば、自分の父親の負の遺産を受け取ったって事で、自分が出来ることがあるんなら手を貸してもいいかなって思うでしょ。

それに小夜ちゃんの、叔母さんが亡くなった悲しさや、見ず知らずの兄だって言われた家を尋ねる時の怖さ、もう戻る家がない寂しさ、これから生きていく心細さを考えれば…。

だからこの時、何も考えないで自然と笑顔になって本心が出たんだと思う。

「取り敢えず、シャワーを浴びておいで。今更だけど風邪を引いたら大変だからさ。あと、せっかく家族が増えたんだからお祝いをしないとね。外に食べに行くから好きなものを考えておいてね。ほらほら、泣かない泣かない。それと一つだけ約束して欲しいんだけど、絶対に我慢はしないで。多少のわがままも聞くつもりだし。俺は君の兄貴で、君は俺の娘だからさ。ほらこの家は小夜ちゃんの物でもあるし、まぁ俺も借りてる家なんだけど、焦ってすぐに出て行かないでいいよ。俺からもよろしくね。二人しか居ない家族だけど楽しい毎日を過ごそう、ね？」

小夜ちゃん顔を上げて驚いた表情で泣いてた。最後には号泣。顔

をクッシャクシャにして嗚咽で声にならないけど、ありがとうって言ってくれたみたい。時間も時間だったからさっさと小夜ちゃんをお風呂に入れて、ちょうど2部屋あるから帰ったら1部屋片付けないとなぁ。取り敢えず今日の俺はソファーで寝ないと。あと、女の子って何が必要なの？明日と明後日仕事休んで一緒に買いに行って、その前に役所に行かないと。あっ、弁護士にも連絡しないと。明日からしばらくは忙しくなるなぁ。学校は一先ず来週ぐらいでいいかな？なんてワクワクしてたのはここだけの内緒の話。ちなみにその夜の小夜ちゃんのリクエストは回転寿司。遠慮するなって言ったのに「廻ってるお寿司を見てるのが楽しい」だって。

色々判断が早計な約束をしたもんだと思うけど、小夜ちゃんの佇まいって言うのか、初めは確かに話が進まなくてイライラした事は否定できないけど、でもやっぱりこの歳で意を決しての目を見ればこの子が悪い子ではないと思うし。結果論だけど、それからも色々あって本気でこの子を守らないといけなかったりしたんだけど、この時の決断は間違ってないと今でも思ってる。

プロローグ（後書き）

生まれて初めて文章を書きました。
誤字脱字があったら教えてください。
乱文は仕様です。
文章力がまったく着いて来ませんが、内容だけでも伝われば万々歳です。
また、どなたかに書き直して頂きたいぐらい文章力は恥ずかしいです。

初日　1

なんか周りがやかましくて目が覚めた。しかもソファーで。ちょうどいいからテーブルに手を伸ばしてタバコに火を着けて一気に煙を吸い込む。ぷはぁ～。まだ目が半分しか開いてないけど頭がちょっとづつ動いてきたかな。さっきから台所がやかましい。しかもそこから声がする。誰か昨日泊めたか？ソファーで寝てたし。もう一度煙を深々と吸い込んで、ぷはぁ～。今度は横から「おはようございます」の声。あれ、この声ってたしか…。

「おっおはようっ！」

本気で焦った、いるのは小夜ちゃんだし。おかげでばっちり目が覚めたけど、ついでに背筋も伸びた。

「おはようございます。起こしてごめんなさい。あと勝手に台所使ってます。えっと、もうすぐ出来ますけど…」

「あっうん、わかった。だけど後5分待って。これ吸ってから」

「はい。出来るだけ急いでください」

「はい」

朝起きて誰か居るなんて事が滅多にない家だから、本当に焦ったわけで。しかも相手が小夜ちゃんで、初日から失態気味って恥ずかしい。まぁなんだ、格好つけちゃいけない相手だからいいんだけどね。んで、台所を見ると小夜ちゃんが目玉焼きを焼いてる。身長が少し足りてない気がしないでもないけど、あのエプロンは自分で持ってきたやつだな。赤い可愛いエプロンをしてる。でもかなり大きめで袖まであるから、あれは割烹着？

でもよかった、一人暮らしが長くてある程度の料理はして来たから一応道具も最低限は揃ってるし今のところは不自由しなくて済むかな。あと何が必要だろう、家に女性が居た記憶なんて母親以来だし、小夜ちゃんと相談しないといけないな。ってか、俺は早速朝ごはんを作ってもらってるのか…。父親ポイント減点1。

タバコを灰皿へもみ消して、顔を洗って、テーブルに座る。もともとテーブルも二人がけを買ってたから丁度よかった。
目の前にはトーストと目玉焼き、ベーコンにちょっとしたサラダとコーヒーも淹れてくれてるみたい。って言ってもコーヒーはめんどくさい時用のインスタントもあるから、インスタントなんだろうけど。ちゃんと自分の分は紅茶を淹れてる。紅茶はティーパックしかないから、今日はちゃんと買ってこないとな、ティーポットも。つか、トーストにマーガリンまで塗ってくれてるとは、なんという教育。
「朝ごはんありがと、そこまでして貰わなくてもよかったのに。だけど色々な物の場所とかよくわかったね」
「思ったより片付いてたから。でもコーヒーのミルクが見つからなくて…」
そう言いながら向かいに座る。しまった、台所よりのそっちに座るべきだったな。コーヒーがこちら側に置いてあったから無意識に座っちゃったけど、これからの定位置になりかねない。イス取りゲーム1回戦は小夜ちゃんの勝ちか。
「それなら探しても無いよ。俺、何も入れないから。それじゃいただきます」
「えっ！？」
早速コーヒーに口をつけた瞬間、甘い…。そうか、昨日はこの子の前でコーヒーは飲んでなかったから。紅茶には砂糖は入れるけど、コーヒーには入れないなんて普通はわからないよね。
「ごめんなさい。すぐに…」
「いいよ、いいよ。たまにはね。でも今まで全部やってたの？」
さすがに用意しすぎでしょ。今までどんな生活をしてたの？この小学生。トーストをかじりながら聞いてみるんだけど、
「まぁ…」
昨日の夜もそうなんだけど、今までの事を話そうとしない。それに妙に大人びた物腰と口調だし、敬語はいらないって言ってるのに

これが慣れてるとかで。ところどころなりきれてない所は小学生らしいっちゃらしいけど、そのうちなんとかなるかなぁ。
「食事の最中であれなんだけど、今日は色々と行くとこがいっぱいあるんだ」
「…はい」
なんでそんな恐縮。昨日の今日で自分らしく、小学生らしく居て欲しいってのは無理だと思うけど、さすがに気を使いすぎのような気がする、コーヒーの件も含めてね。昨日の夜も俺がソファーで寝るからベッドで寝てくれって言ったら、自分がソファーで寝るってしばらく続いたっけ。もうしばらく様子を見るとするか。
「それで、色々な手続きをするんだけど、ついでに買い物も行きたい。小夜ちゃんが必要なものを教えて欲しいから忘れないように後でメモしておいて欲しいんだ。それと家事の分担もね。このままだと小夜ちゃんが全部やっちゃいそうだから」
途中途中頷いてた小夜ちゃんだけど、
「やる。全部やります！」
いやだからね。多分、簡単な料理とかは出来るんだろうけど、他の家事もできるかな？それにやっぱり『家においてもらってる』って思ってるんだろうか。だとしたら余計に、
「ダーメ、分担。小夜ちゃんが例え全部出来るんだとしても、小夜ちゃんの本業は勉強する事。もし近い将来にこの家を出て行くんだとしたら、後に相当響くよ。だから今は勉強する事を一生懸命やるの。ただ、俺だって帰りが遅い日もあるし、週末にまとめて洗濯したりしてるから万全に出来るわけじゃない、親としては失格なのかもしれないけど。だから小夜ちゃんにも手伝ってもらう。これから一緒に生活していくんだから一緒にやっていこう、ね？わかったらよく噛んで食べよう」
なんて、しぶしぶ頷いてはくれたんだけど、トーストを頬張り目玉焼きを口に含みながら言っても説得力が無いか。まぁもともと威厳のあるタイプの人間でもないからいいんだけど。

そんなこんなでお互い食事も終わり、食器を洗わないといけないんだけど、時計を見れば8時30分を廻ったとこ。まずは会社に電話を入れないと。でも何て言えばいいんだろう。いきなり結婚もしてないのに「娘が出来ました」じゃ変な疑いをもたれるから、無難に「妹が来てて」ってでもいいけど、「妹なんていたか？」って事になりかねないからなぁ。取り敢えず体調不良にして、また後で詳しく話をするか。って事で、会社に電話してもまだ課長はいないだろうから、課長の携帯へ。

「おはようございます」

『おはよう。なんだ？寝坊か？体調不良か？一日休むか？』

なんと物分りのいい上司。やっぱりここは正直に話そう。

「すみません、実は色々と野暮用が出来て、明日まで休みを頂きたいです。詳しくは後で話をするので…」

『おう、わかった。体調不良って事にしとくからさっさと済ませろよ。やり残しの仕事はあるか？』

「いえ、多分大丈夫です。もし何か入ったら対応をお願いします。明後日にはすべてやりますので」

『わかった。んじゃ気を付けてな』

「はい。ありがとうございます。それでは」

相変わらずすばらしい上司。これで仕事も出来るんだから言う事ない・・・はずだけど。しかも奥さんは美人だし、息子さんもかっこいいし、特に娘さんは可愛い。でも娘自慢は今日から参戦するけどね。そんな事より、

「だから小夜ちゃん！洗い物はしなくていいってば！」

ったく、今度は聞く耳持ちませんって顔してるし。相当な頑固者だ。こりゃ本格的に分担を決めないと。

そんな感じで初日の朝は終わった訳で、大分先手を取られたな。これから少しは気を引き締めていかないと…。

初日　1（後書き）

寝勒「小夜ちゃんに質問です」
小夜「？」
寝勒「黄身は半熟と完熟どっちが好き？」
小夜「…半熟」
寝勒「俺生卵派。勝った！」
小夜「なんかむかつく」

初日　2

初日の朝食の後、ちょっとしたバタバタはあったものの、適当に身支度をして出かける準備をする。小夜ちゃんは前の家から色々なものを持って来てて、洋服なんかはもちろんの事、割烹着を筆頭に歯ブラシや自分の箸、スリッパや座布団まで持って来てたのはびっくりした。なんかやっぱり不思議な子？

昨日の夜に代理人とやらの弁護士へ連絡を入れたら早速午前中に来て欲しいってさ。きっとせっかちな人なんだね。隣の県とは言えど高速で片道1時間弱だから、まぁ遠くはない。さっさと行ってさっさと済ませて来よう。

さぁ頑張れ！おんぼろマイカーよ！！ってな訳で、何年現役で走っているのかわからない軽自動車でトロトロと走っていく。そろそろ買い換えないとなぁ…。まぁ愛車を見た時の小夜ちゃんの顔は面白かったけどね。驚愕とか唖然って感じでさ。

高速を降りて市街地を走っていく。目的地はどうも大きな駅の駅前らしいので駅に向かって走ってると……

ここどこ？

ねえ？

田んぼがいっぱいだよ？

なんか山道に入っていくよ？

なんで横で冷たい目をしてるの？

うーん、どうしたものか。取り敢えず持ってきた地図と睨めっこしてみる。うーん、ぷぷっ！笑ってしまったとたん、すごい勢いで横から無言で奪われた。んで少しして、

「こっち」

って後ろを指差すの。えっとすごく怖いです小夜さん。そのまま

小夜ちゃんが右やら右やら左やらの指差す方向へ向かっていくと、目の前には目的の駅の看板が。ちょっと！すごいよこの子、すごいよ！

「すごいねぇ、小夜ちゃんって地図が読めるんだ。よくわかるねぇ、左行ったり上に行ったり。俺なんてどっちに向いてるかわかんないもん。いつも地図が3回転ぐらいしちゃうよ、あはははは…。ごめん」

乾いた笑いを向ける男に呆れ顔の子供の図。えっと父親ポイント減点2ぐらい？

それでは気を取り直して、弁護士の事務所へ。住所を頼りに小夜ちゃん様の先導で歩く。いやね、昔から方向感覚が無いとは言われてたから、極力一人で知らない場所へ行かないようにしてたんだよ。だから小夜ちゃんに任せて歩いていると、突然小夜ちゃん停止。おっと、到着ですか。目の前にはすごい高くて綺麗なビル。壁がガラスで出来てます。すごくキラキラしてます。

「これ？」

俺が指を差して確認をすると、首を横に振る。なんだ違うのか。じゃあ今度は右側にあるビルを指差して、

「これ？」

今度は縦に首を振る。って事はもしかして塗装の剥げかけてるこの4階建てのビルですか。まぁなんと言いますか…廃墟ですね。崩れないかな、すごい心配なんだけど。まぁしょうがない。入るとするか。名刺の住所を小夜ちゃんに見せてもらったら3階ってなってる。取り敢えず上がりましょうか。玄関口のテナント案内には一つも札がかかってなかったけど。

「あっ、気をつけてね。色々落ちてるから。踏んじゃうと捻挫して転げ落ちちゃうよ」

一度だけ大きく首を縦に振る。小夜ちゃんも意を決したみたい。小夜ちゃんの手を引きながらゆっくりと階段を上っていく。ちょっと照明さん、明かりが暗いよ！こっちにもっと当てて！！なんて冗

談はさておき。ようやく3階の扉の前へ。…どうみても防火扉でしょこれ。本当に人がいるのか？心配になってきた。まぁここで引き返してもしょうがないから、脇にある小さな扉からくぐると今度は木で出来た扉にすりガラスがはめられた入り口がありました。中に明かりが灯ってるから人はいるみたいだね。一度小夜ちゃんに目配せをしてから扉をノック。ゆっくりと扉を引いて隙間から中を覗き込みながら、

「失礼しまーす。昨晩連絡しました草野ですが…」

恐る恐るになったのはしょうがない。ぼろぼろのカーペットにぼろぼろの本やら色々な物が床に落ちてて埃で真っ白くなってるし。顔を上げてみると一番奥の窓際に人が立ってる。この人が弁護士？

「あぁ、はい。お待ちしておりました。どうぞ中へ」

どうぞ中へと言われても、わかりましたと入れる雰囲気じゃないんですが。また小夜ちゃんと目配せ。さぁ入りましょうか。その前に出来ればまずはマスクをください。

「草野さんと小夜さんですね。どうぞお座りください」

と案内されたのは室内の真ん中にある応接セット。一応このソファーには埃が溜まってないみたいだから掃除はしてあるみたい。取り敢えず案内されるがままにソファーへと座る。そして弁護士は向かいのソファーへ。高そうなスーツを着て、銀色の細長いメガネをしてる。いかにもインテリって感じだね。

「小夜さんの法定代理人となります、堺と申します。誤解のなきよう先に申し上げておきますが、ここは私の事務所ではございませんので悪しからず。では早速ご説明をいたします。草野さんは小夜さんを養子にされるという事でよろしいですね。養子縁組届出を提出されれば戸籍上は草野さんと小夜さんは親子となります。本来は特別養子縁組を行いたいのですが、草野さんが独身者の為、まずは通常の養子縁組を行います。また先々において養子縁組を解消する事も可能です。その際は私にお申し出ください。改めて手続きとご説明をいたします。それでは養子縁組届出の養親の欄にご記入頂いて

いると思いますので全ての記入が終わった事とします。こちらは草野さんと小夜さんの戸籍謄本です。そしてこちらは家庭裁判所の許可証ですのでお持ちください。ともに届出を出される際に一緒に提出をしてください。尚、提出出来るのは養親、養子のいずれかの本籍地または所在地の市町村役場となりますのでご注意ください。ご説明は以上です。なにかご質問はございますか？」

えーっと、早すぎて頭に入りません。息継ぎはどうしてたのですか？法定代理人の依頼はやっぱり小夜ちゃんの叔母さん？特別養子縁組って何？家庭裁判所の許可証って本人が申請するのでは？公文書偽造？あなたの左胸にあるバッチは本物ですか？まずはどれから質問しよう等と考えていると、

「質問はございませんね。お困りな事がございましたら何なりとお申し出下さい。連絡先はご存知ですね？それではよい生活を送ってください。あと、お帰りの際は足元にご注意ください、なにかと老朽化の進んだ建物ですので。ではまたのご連絡をお待ちしております」

ささっどうぞっていつの間にか書類の入った封筒を小夜ちゃんに持たせて矢継早に追い出されたんですが。後ろでは扉を閉めて鍵をかけた音もしてるし。なにこれ。小夜ちゃんもポカーンってしてるし。まぁいつまでもここに居てもしょうがないから戻りましょうか。小夜ちゃんの手を引いてまた防火扉の脇の扉から出て薄暗い階段を降りて外に出る。異次元からただいま。なんだか日差しが眩しいんですが。

「うーんと、帰ろっか。お腹すいたねぇ」

小夜ちゃんからのリアクションなし。そりゃあんな巻くしたてられて追い出されれば放心するよね。

初日　2（後書き）

寝勒「泳ぎは得意ですか？」
堺「はい、前世は河童です」
寝勒「まじで！？キュウリ買ってくる！！」ノシ

小夜「・・・ほんとに行っちゃった」

初日　3

車に着く頃には小夜ちゃんは現実世界に戻ったみたいで、自分でさっさと助手席に乗り込んだ。でも乗ったらすぐに地図を広げて待つのはちょっと失礼じゃない？確かに道を間違えたのは俺だけどさぁ。まぁ間違えなければいいか。取り敢えず走り出そう。帰りはちゃんと高速の入り口まで看板が出てるしね。

「どうしよっか。ちょうどいい時間だから、向こうに戻ってからご飯にして、そのあと市役所に行こうか」

うなずく小夜ちゃん。運転中にうなずかれても確認するのにわき見運転になるんですが…。雰囲気で察しろという事なのかな？

「何が食べたい？嫌いなものはある？」

今度は首を振る。本当かどうかわからないけど、嫌いな食べ物はないって事でいいんだよね。どうしようかなぁ、ほんとこう言う時って困るよね。無難なファミレスでいいか。

後ろから来る全ての車に追い抜かされながらも無事に道に迷うことなく市役所の近くのファミレスへ到着。知ってる道なら迷いません。だから助手席で一生懸命地図を追わなくても大丈夫なんですよ、小夜ちゃん。

ファミレスではちょうどお昼過ぎだったため、案内待ちの先客が４組程。店員さんに確認すると１５～２０分程で案内が出来るそうなので、小夜ちゃんに決めてもらいましょう。

「待てる」

はい、なら名前を書いて待つとする。別に急ぐ旅でもないしね。しばらくぼけーっと立ってると待合のソファーに座って待っていたサラリーマンの１人が席を譲ってくれた。お礼を言って小夜ちゃんに座ってもらう。そしてその前に立つ。さて、今日のこの後の予定はどうしようかな。お昼を食べて市役所に行って、小夜ちゃんの買い物に行こうかな。

「小夜ちゃん。そう言えば今朝にお願いした買い物リストは作ってくれた？」
うつむき加減のままこちらを見ずに首を振る。あれ？作ってくれてないの？
「市役所の後に買い物に行こうと思うんだけど、欲しい物は何？取り敢えずベッドと机を買わないとね。後は細かいものとか何がほしい？」
またしても首を振る。こちらを見上げて、目が合って、そして、
「欲しい物は無いです。机はテーブルがあるし、寝るとこは布団だけでいい。それにまだ片付いてないから」
あっ、しまった。我が家にはリビングダイニングとベッドが置いてある8畳間、そして簡単な書斎にしていた6畳間があって、本当は8畳間を小夜ちゃんの部屋にしたかったんだけど、その部屋はリビングのすぐ隣で襖で仕切るようになってる。そして6畳間は玄関入ってすぐの扉を入ったところだから、女の子だしプライバシーとかの事を考えて6畳間にした。そして昨日の夜に本とかの簡単な荷物は移したんだけど、まだ机とかの大きいものは残したままだった。
「ごめん、忘れてた。だけど机とベッドは買おうよ。今晩片付ければベッドぐらい入るし、机を今日選んでまた明日に配送してもらえばいい事だしね」
それでも首振る。
「本当は部屋も要らない。寝るところだけもらったら十分です」
ったく、この子は。ちなみに昨晩に続きこのやり取りは2度目。部屋はどうする？って聞いたらいらないって言われた。
「あのねぇ、いいかい？君は俺の…」
「2名でお待ちの草野様！」
小夜ちゃんは何事も無かったかの様に立ち上がってそそくさと店員の後ろを着いて行く。やっぱり相当な頑固者だ。後で卑怯作戦を決行して一気に畳み掛けよう。つか、家を出るまではそんなに機嫌

は悪そうじゃなかったのに、家を出た時から徐々に不機嫌へ。何か癪に触るような事があったかな……思い当たる節はいっぱいだ。
「ご注文がお決まりになりましたらそちらのボタンでお呼び下さい」
一礼して店員さんは去っていく。説得を始める前に注文を決めよう。
「小夜ちゃんは何にする？俺はとんかつ定食にするけど」
一通りメニューを眺めて指をさす。昨日の回転寿司でも思ったけど、この子は決断が早い。迷ってる素振りも無しに決める。昨日の回転寿司ではまずは一巡を眺めて、その後は淡々と取り始めた。って言っても４皿でお腹一杯になって、後は流れてくる寿司を見て満足してたみたいだけど。やっぱり不思議な子だなぁなんて思いながら俺は呼び出しボタンを押す。遠くでピンポーンって音が鳴った。店員さんが来るのを待つ間はなぜか無言。いや、今まで一緒にいても無言の時間の方が長いから普通の事か。
「お待たせいたしました、ご注文をどうぞ」
いえいえ、そんなに待っていませんよ。
「えーっと、ざるそばとカルボナーラのパスタセットで」
「えっ？」
驚く小夜ちゃん。確かに小夜ちゃんが指をさしたのはカルボナーラでした。だけどどうせ聞いても遠慮するだけだから勝手にセットにしてやった。心の中でちょっとだけほくそ笑んだのはやっぱり内緒。
「野菜もちゃんと食べなきゃね。大丈夫、食べきれない分は俺が食べるから。飲み物はどうする？」
「……オレンジジュースで」
「後は、ホットコーヒーを。あっ、食後にお願いします」
「はい。ではご注文を繰り返します———」
わかった事がある。まだ俺に慣れてないだけかもしれないが、この子に自由選択権を与えると必要最小限の判断を下す。逆に選択権

を与えず強制をすると、その強制された選択肢において最善を尽くそうとする。初めから頭に無いのか、強制された選択肢を覆そうとしない。ただし、初めに自由選択権を与えた場合、別の選択肢を強制しても初めに下した選択肢は覆そうにも簡単にはいかない。まぁ時と場合によるけど、昨日今日と半日一緒にいて感じた事。そして簡単にはいかない下した選択肢を別の選択肢に覆す時、その選択肢にする妥協点がみられて尚且つ、

「さっきの部屋の話なんだけど、やっぱり小夜ちゃんはあの部屋で、ベッドと机はちゃんと見に行って気に入ったものを買おう。そうじゃないと君が満足な生活を送れてないんじゃないかって俺が不安になるからさ。だからお願い」

「……うん」

この様に第三者を（この場合は第二者になるけど）引き合いに出せばしぶしぶながらも折れてくれる。自分の利害の中にはもちろん相手の気持ちも含まれてて、しかも相手の気持ちの占める割合が相当高い子なので自分より相手を優先する可能性が高い。つまり、意思の異常に強い頑固者の癖に相手を気遣う気持ちが人一倍あるって事なんだけど。やっぱりいい子なんだよな。

そんな事を考えていると早速注文の品が到着。まずはサラダから手をつける小夜ちゃん。満更でもない顔してるくせに。俺が一通り食べ終わった頃、小夜ちゃんもお腹一杯になったのか、パスタが半分ぐらい残ってる。もういいの？って聞いたら申し訳そうな顔をしながら「ごちそうさまでした」。そしてお皿が少し前に出てくる。もちろんこれを見越して少なめの注文をしたから早速頂きます。おっ、ちょっと親子っぽい？

食事が済むと俺のコーヒーと小夜ちゃんのオレンジジュースが届けられる。それと小夜ちゃんの前にはミニイチゴパフェ。やっぱり小夜ちゃんは女の子なんだよね、お腹一杯になってたと思ったのに簡単に空にしてしまった。満足そうに頬が少しだけ緩んでるよ。こんな表情が見られるなんてやっぱり注文してよかったよ。うんうん。

お互いお腹が満足したので、小夜ちゃんのジュースが空になったのを待ってお店を出る。
市営駐車場に止めている車に一度戻って忘れずに家から持ってきた養子縁組届出と午前中に堺さんから貰った書類を持って、市役所へ向かう。なんか緊張し始めてきたな。

しばらく歩くと市役所が見えてきた。役所なんて何年ぶりだろう。今の家に引っ越す時に住所変更をした時以来だから5年前か。そう考えれば俺も歳をとったもんだ。
自動ドアをくぐり2階の受付窓口へ向かうとたくさんの人がいる。こりゃ大繁盛だね。えーっと戸籍の窓口は4番か。番号札を取って待ち人数を確認。「12番目」って表示がしているって事は整理券を取った後だから11番目か。だいぶ待たないといけないな。
「かなり時間がかかりそうだね。どうする？どこかで遊んでくる？」

俺を見上げて首を振る。それじゃちょうど2人分のソファーが空いてるとこがあったので、そこに座って待とうか。
10分経過。俺はもともと待つ事が嫌いじゃなくて、ボケーっとしていられるから問題無いけど、小夜ちゃんは暇じゃないだろうか。隣でソファーに奥深くまで座って、浮いた足をぶらぶらさせてるし。

「暇じゃない？何か飲み物でも買ってこようか？」
一応首を振ってから、「大丈夫」だって。そりゃさっきまでファミレスにいたしね。
結局その後15分してようやく自分の番号が呼び出された。小夜ちゃんに待っててもらって、窓口へ向かいおねがいしますと全ての書類を渡す。窓口のお姉さんが書類を一つ一つチェックしてる間、近年稀に見る緊張が。身分証明となるものはお持ちですか？と聞かれたので免許証を渡す。ではお掛けになってお待ちください、だっ

て。小夜ちゃんの元に戻ると小夜ちゃんの顔も強張ってる。
その後も２０分程待って突然、「草野さーん、草野寝勒さーん！」
あっ、はいはい。最後の窓口へ向かう。
「お待たせしました。まずは免許証をお返しいたします。養子縁組届けを受理いたしましたので本日より小夜さんは草野寝勒さんの養女となります。こちらが証明書となりますので保管をお願いいたします」
「あっ、はい。ありがとうございます」
若干声が上擦ったのはご愛嬌。振り返って不安そうな顔をしている小夜ちゃんに微笑む。ほっとした顔をして肩の力が抜けるのが見て取れた。やっぱり小夜ちゃんも緊張してたんだね。立ち上がってこちらに小走りに駆けてくる。お互い近くまできて市役所を黙って出る。そして市役所の自動ドアをくぐったところで、
「小夜ちゃん。本日よりあなたは草野小夜です。草野寝勒の娘となりました。至らない親ですが今後ともよろしくお願いします」
「よろしくお願いします」

って、二人してお辞儀をする。しばらく頭を下げてどちらからともなく顔を上げる。
「それじゃ行こうか」
そう促して歩き始めた時、真っ先にしないといけない事を思い出した。電話だ。
「ごめん、小夜ちゃん。忘れてた事を思い出した。今晩ちょっと小夜ちゃんを紹介しないといけない人がいるんだけどいいかな？」
小夜ちゃんはちょっとだけきょとんとした表情を浮かべて、うなずく。
「ごめんね、真っ先にしないとうるさい人だから」
そう言いながら携帯を取り出して電話を掛けはじめる。

プップップッ――――トゥル、ガチャ！
『おう、どうした』
「はやっ！仕事中にすいません課長、今いいですか？」
『いいぞ』
「今晩なんですけど、伺っていいですか？紹介したい女の子がいるんですが」
『なにぃっ！！！ほんとかぁっ！！！！！』
いっってぇ！脳みそ揺らされたじゃん。声がでかいよ。耳がキーンってする。
「はい」
『なんだ、今日の野暮用って役所の事じゃねぇだろうな！！えぇ！？』
「はい、今さっき戸籍・・・」
『バカヤロォ！！！！何でもっと早く言わねぇんだ！！！！何時だ！！？』
だから声がでかいって。受話器をかなり離しておいてよかった。
「飯食ってから行くので8時ぐらいですかね」
『よし。飯食わずに5時な』
「いえ、買い物とかあるの…」
『5時だぞ！わかったな！！それじゃ家でな！！！』
ガチャ――――ツーツーツー

…強引すぎでしょ。
「ごめん、今日の買い物中止になっちゃった」
「朝の人？」
「うん、上司。えーっと、今3時だから…中途半端だな。家に帰って片づけをしようか」
小夜ちゃんが頷いたのを確認して歩き出す。まだ耳鳴りがするよ、声がでかいんだって。ってかね、

うちの会社の定時は5時半なんですが、あの人は5時に家にいるつもりなんだろうか……。

初日　3（後書き）

ウェイトレス「お待たせしました、こちらざるそばになります」
寝勒「ざるそばになる前のこれはなんですか？」
ウェイトレス「はい？」
寝勒「輪ゴムかっ！？」

小夜「はずかしい…」

初日　4

車に乗り込んで帰宅中、市役所から家までは結構距離があり車で約1時間。高速に乗ると30分程。ちょっと大きい市に住んでるけど我が家はその郊外にある。
市の中心部は栄えており、大手デパートを筆頭にショップや飲食店がひしめき合って活気付いているが、その反対に東の郊外へ行くと山の手になるので高級住宅街が広がっており、それなりの人が住む地域となる。また市の外れには大学がいくつか建造されているので、1人暮らしの学生が住む街としても機能している。
その山の手の中腹にある高級マンションの一室が自分の借りている家となる。いや、正確には『借りさせられている』と言った方がいいかもしれない、ここら一帯の地主によって。もちろん俺の給料で到底払いきれる金額じゃないが、かなり激安で借りている。その地主の爺さんは昔から何かと面倒を見てくれている人で、初めは遠慮していたが「自分の目の届くところにいろ」という事で半ば強制的に今の家に引っ越すこととなった。当初は家賃も必要ないと言われていたが、さすがにそれでは申し訳が立たないので満額とはいかないまでも、なるべく自分が出せる金額を出そうと提案をした。しかしその提案は一刀両断され、その後の長時間にわたる交渉の結果、雀の涙ほどの家賃なら受け取ってもらえる事となった。この時周りの人から肉親以外に楯突ける『爺さんの鞘無し懐刀』の通り名がついたと笑われた。
ちなみに俺の耳までは聞こえてこないが、爺さんには黒い噂が絶えないらしい。
そして、その爺さんの孫に当たるのが会社の上司で課長になる。普段の生活でも色々と面倒を見てくれる人で、俺の家から坂を10分程歩いて上ったところに住んでいる事もあり、よくご相伴に預かっている。いやよく呼び出されている。しかし、美人で料理がとて

つもなく上手い奥さんの早苗さんや、しっかり者で見た目も半端なくかっこいい息子の太一君、明るく活発で相当可愛い娘の加奈ちゃんが出迎えてくれる家は本当に居心地がいい、課長さえいなければ。

という訳で、帰りの車の中で簡単に課長家の説明する。隣の県から来てるから土地勘もないだろうし、週末は街案内をしてもいいかもしれないね。まずはどこがいいかなぁって考えてながら車を走らせていると家についた。駐車場に止めて、さぁて小夜ちゃんの部屋を片付けるぞっと気合を入れて横見れば天使の寝顔。そういえば今日は朝から気を張ってたのかもしれない。失敗したなぁ、もっと気付いてあげないと。父親ポイント減点5。それにしてもほんとに可愛い寝顔だなぁ。課長に自慢してやりたいよ。絶対に見せてやんないけど。まぁ片付けは明日もあるし、なんとかなるでしょ。このまま時間まで寝かせてあげようかね。

……。

「ん、んー？」

「あっ起きた？」

「んー」

目を半分だけあけてどこを見るでも無しに正面を向いてぼさーってしてる。かと思いきや急に目を見開いて左右を確認する。俺はここにいるよー。

「おはよう。よく寝れた？一度家に戻ってゆっくりさせてあげたいんだけど、ごめんね。もう4時半過ぎたからそろそろ行かなきゃ」

「……ねちゃったぁ。ごめんなさい」

いえいえ、小夜ちゃんの寝顔を見れただけで十分です。でもまだ若干寝ぼけ気味？また瞼が半分ぐらい閉じてるよ。案外寝起きが悪いのかもしれない。小夜ちゃんはしばらく動かなかったが、あくび

をした後、目を擦り頭も起きはじめたようだ。さぁて、寝起きで申し訳ないがそろそろ行こうか。
「大丈夫？」
頷いて返事をくれたので車から降りて課長宅へ向かう。
我が家から課長の家までは一本道を上ったところにある。にしても相変わらず家の周りは豪邸ばっかりだなぁ。どうして金持ちは丘の上に住みたがるんだろう。煙となんとかってやつ？って事は上に住んでる課長は馬鹿だな！…んな事は口が裂けても言えない。

とぼとぼと二人で坂を上るとお目当ての家が見えてきた。あぁ、駐車場に車が止まってるよ。あの人本当に帰ってきたんだ。真面目に働けよ、課長。休んだ俺が言えた義理じゃないけどさ。
門の脇のインターフォンを鳴らす。しばらくすると返事する声。これは早苗さんだな。草野ですと名乗ると
「あっロクちゃん。玄関空いてるわよ」
はーい。とインターフォンに返事をして門をくぐって玄関まで。小夜ちゃんを見ると普通に見つめ返す。あら、緊張とかしてないのね。肝が据わってるなぁ。という事で扉を開けて中に入る。
「ロクちゃんだぁーーーー……？」
「？」
玄関で靴を脱ごうとしてるとこで加奈ちゃんが駆けて来た。けど、俺の後ろに小夜ちゃんを見つけて失速。声のトーンも下がってフェードアウト。
「あぁロクさん、いらっしゃい。って……」
「お邪魔するよ」
２階から階段で降りてくる途中で止まってしまった太一君
「いらしゃい。ごめんね、また急に呼び出しちゃったみたいで」
今度は早苗さんも奥から出てくる。
「いえ、とんでもない。突然お邪魔したいって言い出したのはこっちですから、むしろご迷惑をかけたかと。すみません」

「そんな事いいのに。ところでちょっと…いえ、大分若くない？」
「はい？」
「こんにちわ、はじめまして。小夜って言います」
横から丁寧にお辞儀をして挨拶をする小夜ちゃん。なぜかきょとんとする早苗さん。その横でぽかんとしてる加奈ちゃん。階段の途中でフリーズしてる太一君。あれ？なにこれ。すると奥から
「おーい！ロク！！！早くこっちに来い！！！！」
あぁ、課長が呼んでる。さぁ行きますか。3人とも早く正気に戻ってください。先に行きますよって小夜ちゃんと奥のリビングへ。
「おじゃましまーす」
「おう！」
中に入るとテーブルの上に出前のお寿司が。うに、あわび、大トロ、かに。ってかこれ特上じゃん！しかもサイドメニュー的に、早苗さんの料理も並んでるし。小夜ちゃんを歓迎してくれるのはありがたいけど、ちょっとすごすぎるなぁ。恐縮しちゃうよ。んで、どかんと上座に座ってる課長はランニングに短パンで既にビールを飲んでた。あんた、仕事をさぼって何してんのよ。
俺の後にいた小夜ちゃんがひょこっと脇にでて、
「はじめまして、小夜です」
今度も礼儀正しくお辞儀をする。前々から思ってたけどこう言う時にちゃんと挨拶が出来るなんて、お父さんは鼻が高いよ。んで、課長を見ると、あれ？プルプル震えてる。
「課長どうしました？」
「おい、ロク。おまえなぁ…」
ちょっと、どうしたんですか？声にドスが聞いてますけど。そして課長の右手が手元にあったテレビのリモコンを鷲づかみにしたかと思った瞬間、振りかぶって、
「犯罪じゃねぇか！！！！！」
「いってぇ！！！！！」
俺の額にクリーンヒット。さすが草野球のエースピッチャー、ナ

イスピー。なして！？って言い返そうとするけど残念ながら危険球で退場です、もちろん俺が。

初日　４（後書き）

課長「おい、俺の名前は？」
寝勒「決まってません。今決めます」
課長「強そうなので頼む」
寝勒「ＫＡ☆ＣＨＯでどうですか？」
課長「どたわけがっ！！」
寝勒「いってぇよ！！イチジクいてぇって！！」

小夜「下品。最低…」

初日　5

「せっかちな親父が悪い。言葉足らずなロクさんも悪い。だから両方悪い」
「あー、すまん」「すんませんでした」
中学2年生の少年に言われ、素直に謝る大の大人2人。
2人の叫び声に何事かとようやく現実へ帰ってきた三人が駆けつけて見たのは、肩で息をしている課長と悶絶してる俺と電池を拾ってリモコンに入れ直している小夜ちゃんだった。小夜ちゃん…。
その後お互いが自分の主張で言い合いになり、収拾がつかなくなったところで太一君の登場となる。加奈ちゃんに弱いと周りから思われてる課長だが実のところ、一番弱いのは加奈ちゃんや早苗さんじゃなくて太一君にだったりする。今まで何度も太一君が課長を言いくるめているシーンを見ているのだが、課長は一度も反論したりせず素直に受け入れて謝罪をする。だからと言って父親の威厳みたいなものが失われているわけでもない。多分、引っ込みがつかない時とかにきっかけを作るのが太一君の役目みたいな事なんだと思う。それを家族みんながわかってるからすごく仲がいい。
「さぁ、仕切りなおして小夜ちゃんをお祝いしましょ。ロクちゃんはビールでいいよね。せっかくだから私も今日は飲もうかしら。小夜ちゃんは何にする？オレンジジュースでいい？」
そう言いながら立ち上がってキッチンへ向かう早苗さん。
「あっ、自分で…」
「だーめ。小夜ちゃんは主役なんだから座ってて。加奈、ちょっとこれ運んで」
「はーい」
立ち上がろうとした小夜ちゃんだが、早苗さんに座っていろと言われ居心地悪そうに座る。その代わりその隣に居た加奈ちゃんがキッチンへ。

「にしても、彼女を作れ作れと今まで散々言ってきたが、いきなり娘が出来るなんてなぁ」
瓶ビールを手酌で注ぎ一気にあおる課長。確かに紹介してやるから彼女を作れと言われ続けてきた。この家でも職場でも。
「ええ、しつこかったですからね。耳にタコが出来てますよ」
本当にしつこかった。あまつさえお前が結婚するまでおちおち寝れやしねぇとか言い出す始末。じゃあ寝ないで下さい。と言ったら殴られた事がある。
「さぁ、それじゃあ始めましょうか」
みんなの飲み物を運び終えた早苗さんが座り、みんなで課長を見る。課長は頷いて、

「小夜ちゃん、少しばかり頼りないがこいつは良い奴だ。だけどこいつの良さはすぐにはわからないかもしれない」
小夜ちゃんが首をわずかに横に振った…気がする。
「俺たちはロクが好きだ。だから君もこいつの事を好きになってくれたら嬉しい」
よくも恥ずかしげもなく言えるもんだ。それに3人も頷いてるし。

「それにロクは俺たちの家族だ。だからロクの家族になった小夜ちゃんは俺たちの家族でもある。もちろん俺たちは小夜ちゃんを歓迎する」
みんな笑顔で小夜ちゃんを見つめる。そしてみんなで飲み物を掲げて、
「それじゃ、俺たちの新しい家族に、乾杯！」
「「「「「かんぱーい！」」」」」
やっぱり俺もこの家族が大好きだ。小夜ちゃんもみんなを好きになってくれると嬉しいな。

早速、加奈ちゃんが「小夜ちゃんどれがすきー？あたしイクラ食

べるー。小夜ちゃんはー？」と小夜ちゃんに話しかけてる。そんな加奈ちゃんのアクティブさに戸惑いながらも「エンガワ…」とか、馴染んでるのが微笑ましい。つか、1発目からエンガワチョイスはどうなの！？

「おい、ロク。そいつは俺の中トロだ」

人が娘を見て幸せになってる時に邪魔しないで下さい。

「知りませんよ、そんなの。名前が書いてある訳じゃありませんし。ガリでも食べててください」

「うるせぇっ！」

俺の取り皿から中トロを奪って自分の口の中へ。ほとんど噛まずに飲み込みやがった。

「あっ！なにしてんですか！！返してくださいよ、ちょっと！」

「この中トロは俺のだ。俺が食って何が悪い！」

「ふざけないで下さい！じゃあ課長のそのサーモンは貰って行きます！」

「あってめー！」

課長の取り皿にあったサーモンを頂く。うぉ、油がのってて溶けてった。

「おい！ふざけんな！返せこのヤロウぉ！おいテメェ！！」

「いってぇ！ちょっと！課長が先に食べたんでしょ！」

この人はすぐに手が出る。簡単に引き下がるかよ、なめんな！課長ともみ合いになって…

「親父やめろって！」「うるさい」

太一君に止められる課長。小夜ちゃんに怒られる俺。

「すまん」「ごめん」

2人してショボーンってなる。それを見て盛大に笑う加奈ちゃん。いや、笑いすぎでしょ。

「ところで小夜ちゃんはいくつなの？」

あっありがとうございます。ビールを俺のグラスに注ぎながら早苗さんが小夜ちゃんに問いかける。

「１０歳。５年生です」
「えー、小夜ちゃんあたしより年下ぁ？ぜんぜん見えないー」
うん、確か加奈ちゃんは６年生だったはず。まぁ小夜ちゃんは落ち着いて見えるからね。
「加奈の一つ下なのね。学校はいつから？」
早苗さんに向けていた視線を今度は俺に向けてくる。あぁそういえば話をしてなかったな。
「一応来週からにしようかと思ってます。まだ買い物とか部屋の準備を済ませてないので」
「ロクちゃん駄目じゃない！そういうのは真っ先にやらないと」
いえ、買い物に行こうとした矢先に強引にこの家に呼ばれたんです。まぁ片付ける事自体はお昼まで忘れてたんですがね。
「小夜ちゃん、明日はどこか行くの？用事がないなら一緒に行きましょ」
「いえ、早苗さん。そこまでしてもらわなくても」
「おい、ロク。お前、何を買わなきゃいけないかわかってんのか？どうせ本人に聞けばいいやなんて思ってんだろ？ばーか。そんなん女の事を男がわかるわけがねぇ、女に任せりゃいいんだよ。お前は黙って家の掃除でもしとけ」
確かに、課長の言う通りだ。俺が買い物に行っても何を買っていいかわからないし、俺と一緒だと欲しい物を言葉にしないだろう。なんせ部屋すらいらないと突っぱねた子だし。
「そうですね、それじゃお言葉に甘えさせていただきます」
「あたしも行くー」
「「「　だめ　」」」
３人が同時に加奈ちゃんに突っ込む。えーなんでー？ってふてくされて、
「じゃあ帰ってきてからロクちゃん家に遊びに行く」
「加奈は邪魔になるから行っちゃ駄目だよ」
「なんでー、あたしも掃除するもん」

「じゃあ、まずは自分の部屋を片付けてからだね」
「……あっ、あした約束があったんだ！」
白々しく上を向いて、しまったしまったと呟いてる。それを見て一斉にみんなが笑い出す。やっぱり明るい人たちだなぁ。
「さぁて加奈、小夜ちゃん。そろそろ上に行こうか。何して遊ぶ？」
と、太一君が2人を連れて2階へ。
「お茶はいる？」
「はい、頂きます」
早苗さんが簡単にテーブルを片付けてキッチンへ向かう。
課長と2人だけになり、無言の時間が流れる。課長はビールからウィスキーになって、さっきからちびちびやってる。ちょっとだけ重い空気が漂い始めて、おもむろに課長がこちらを見ないで、
「なぁ、ロク。お前いきなり娘なんて大丈夫なのか？そもそもどうして決めたんだ？」
真顔でグラスを回しながら聞いてくる。理由を聞かれても。初めてドアの向こうに見た小夜ちゃんの泣きそうな顔が浮かんでくる。
「…どうしてなんですかねぇ。多分、乗りと勢いです。雨の中に向かわせられます？あんな子を1人には出来ませんよ。それに親の保険金は手付かずですから……」
「まぁお前が決めたことだ、反対はしねぇよ。ただ、ここには俺たちがいる。なんかあったら頼って来い。むしろ頼られない方が俺たちは寂しいんだからな」
本当にありがたい。引き取る事を決めたときもやっぱりこの家族がいたから心配は少なかったのかもしれない。いざとなったら本気で頼らせてもらおう。
「えぇ、わかりました。きっと小夜ちゃんも課長の事、気に入ってくれてますよ。なんせここは・・・・・・居心地がいいですから」
「そうか・・・」

そこで早苗さんは「おまたせ」とロックアイスとグラスを持ってきた。
「まぁせっかくだ。ちょっとは付き合え」
「ええ、そうですね。たまには」
課長がグラスに注ぐ。ロックアイスがカランっと音を立てて姿勢を落ち着かせ、ゆっくりと馴染んでいく。指で氷をまわし、惰性で廻るのをしばらく眺めた後、グラスを傾け少しだけなめた。
なんだか今夜の酒はちょっとだけ・・・・・温かい。

２つの長さの違う影が夜道を下っていく。気がつけば夜１０時を廻ってしまっていたので、玄関先でみんなに見送られ帰宅の徒へとついた。ほろ酔い気分で、すごく気分がいい。風が気持ちいいなぁ。

「どうだった？」
「…うん」
坂を下りながら少し間が空く。
「加奈ちゃんがね……」
次の言葉を待つ。
「…羨ましがってた。ロクちゃんがお父さんでいいなぁって……」
「そっか」
そんなに慕われていたとは。うん、嬉しいな。
「みんないい人たちだったでしょ？」
隣で頷く。俺はみんなの顔を思い出しながら、
「早苗さんはやさしいし、太一君はしっかりしてるし、加奈ちゃんは元気だし、課長は……」
そこで一旦区切った。小夜ちゃんが不思議そうにこちらを見上げる。額の痛みがぶり返してきたな。ほんの少しだけ痛む額を押さえながら、

「あの人は……やっぱりいらねぇや」
小夜ちゃんが微かに笑う。
「……そう言えば、初めて笑ってくれたね。うん、笑ってる小夜ちゃんが一番いいよ」
小夜ちゃんはちょっと照れくさそうだった。
俺たちが親子になった日、そして小夜ちゃんがはじめて笑ってくれた日。ここからいっぱい、いっぱい、幸せな時間を作っていこう。
空を見上げると雲ひとつ無い綺麗な、本当に綺麗な星空だった……。

初日　5（後書き）

寝勒「加奈ちゃん、数の子は何の子供か？」
加奈「かず！」
寝勒「ぶー、残念タラの子でした」
加奈「そうなんだぁー」
太一「ロクさんそれ違う！タラコ」
寝勒「！？。じゃあ鮭？？？」

小夜「それはイクラ…」

2日目　1

あれ？ここは…ソファー？まぁいいや、手探りでタバコを手に取り火をつける。ぷはぁ～。あぁ、台所がうるさいなぁ。おはようございますってなんだよもう。って！？

「おっおはよう！小夜ちゃん！」

大急ぎで目を開けてみれば台所でレタス片手にした小夜ちゃんが驚いた顔をしてる。そりゃ俺も驚いて大声で朝の挨拶をしたからなぁ。寝起きのグダグダした奴からいきなり生きのいい挨拶が返ってくるとは思いもしなかったんだろうな。もちろん俺も思わないけど。

「大声出してごめん、今起きたよ」

頷いて、レタスを千切る作業に戻る小夜ちゃん。さぁて、これを吸い終わったら顔を洗ってこようかな。

昨日の夜、寝る前にちょっとした言い合いになった。いや、言い合いにはなってなかったけど、それは家事の分担について。朝の起きる時間とかお互いの生活リズムを確認した後、それぞれが何をするか俺が話をした。まぁ今まで俺は1人でやってた事のどれを小夜ちゃんに譲るかって事になるんだけど、基本的に小夜ちゃんが起きる時間が早い。学校までの時間を考えれば8時に家を出れば間に合うのだが、以前から6時に起きる習慣があるそうで、朝ごはんは小夜ちゃんに作ってもらう事にした。そして晩ごはんについて。ある程度は作れるとの事らしいので、交代制にする。ただ、俺が仕事などで遅くなったときは、どこかの日付と入れ替えをする。もちろん洗い物は俺がする。洗濯についても交代制。掃除は平日もちょこちょこお互いがやって、週末で一緒にやる。ゴミは集めるのは小夜ちゃんで、出しに行くのは俺。

まぁ、抜けてる部分もあるかもしれないけど、簡単に決めてみた。んで、どう？って確認を取ると、小夜ちゃんは全否定、小夜ちゃん

は全部やるって言い張る。もうそこからが大変、何を言っても、どんな提案をしても妥協点にならないのか無言のまま首を縦に振らない。さすがに俺も疲れてきて結局小夜ちゃんの案で通ってしまった。ただし、小夜ちゃんが全部をやってるとしんどいし、やりたくない時もあるだろうから、無理してやらずにいつでもサボってくれってお願いはする。この子の頑固は筋金入りだ。

コーヒーの香りがしてきたのでさっさと支度をしてテーブルに座る。

「いっただっきまーす」

熱いコーヒーが喉元を過ぎていく。あぁ生き返るなぁ。パンをかじると小夜ちゃんに聞かれる。

「挨拶、大家さんにはいいんですか？」

「？」

大家さんって誰…。あぁ、地主の爺さんか。あの人はたぶん、

「爺さんなら大丈夫だよ。課長が話をする筈だから。もともと忙しい人で必要なら向こうから連絡があるからね。いい年して元気すぎるんだよあの爺さん。大体いつも日本にいないし。あっこのオムレツおいしい。卵は一緒だよね？」

「うん、牛乳を少し。生クリームがなかったから」

「へぇー、まろやかになるねぇ」

ある程度って言ってたのに本当は料理が上手いんじゃない？

「そういえば、学校なんだけどね」

紅茶を飲む手を休めて、こちらを見る。

「今日、転校届けを出しに行こう。俺、明日から仕事だから1人で家に居ても暇でしょ？だから学校は明日からにしない？」

少し考えて頷く小夜ちゃん。んじゃ、夕方に学校へ行こうか。後で電話を入れよう。

そうこうしてる内に食事も終わり、小夜ちゃんが洗い物をしてる時にインターフォンが鳴った。モニターを見ると早苗さんだ。っと太一君？

「おはよう！」
「おはようございます」
玄関を開けに行き家に招き入れる。
「おはようございます。わざわざすみません。っと太一君までどうしたんですか？」
一旦、リビングのソファーに座ってもらう。ちょっと前まで俺がそこで寝てたけどね。
「ええ、親父が男手ひとつじゃ何かと不便だろうからお前も行って来いって」
「それは非常に有難いんだけど、学校はよかったの？今日もあるんでしょ？」
「はい。そう言われたら、何も皆勤賞を取るだけが人生じゃねぇって伝えろって」
微笑ながらそう答える。それはそうだと思うけど、先読みされてる課長に腹が立つ。あの人は一本取った気でいるんだろうな。ぜ、全然悔しくなんかないんだからねっ！
小夜ちゃんがお茶を入れた様子で、湯のみ3つをリビングのテーブルに置く。おいおい、躾が出来すぎでしょ。2人はありがとうって受けってるけど。って、そう言えば
「あれ？家にお茶ってあったっけ？買った覚えがないけど…」
「持ってきました、急須と。湯飲みはあったのでよかったけど」
なぜ？確か前に何かのときに湯飲みは貰ったような覚えはある。わざわざ家から持ってきたのか…、なぜ？まぁ結果的にはよかったんだけどさ。まぁいいか、お茶を頂こう。
「小夜ちゃん、お茶を入れるの上手ねぇ。おいしいわ、ありがと」
うん、早苗さんの言うとおり、渋くもなく甘すぎるわけでもないし、それに何より香りがいい。お茶って温度管理が難しかった覚えがある。なんとなくお茶は敬遠してたんだけど、ってそれはどの飲み物でも一緒か。こういうのはやらず嫌いって言うのか？
「じゃあ、早速はじめましょうか。まずは小夜ちゃんの部屋を空っ

ぽにしましょ。それから色々買い物に行って、その間にロクちゃんは自分の部屋を片付ける。っでＯＫ？」
「問題ないです。ただ、小夜ちゃんの学校なんですが、今日の夕方に転入届を出しに行こうと思ってます。小夜ちゃんは明日から通えるように」
「あら、明日からにしたの？」
「はい、どうせ俺も明日から仕事ですから、一日家に居ても暇でしょうし」
早苗さんは少し考えた様子だったけど、
「そうね、やる事ないなら家に来てもらってもよかったんだけど、それが良いわね。それじゃ今日中になんとか形にしないと。じゃ始めましょ」
各々が頷き、早速家の片づけが始まった。
まずは小夜ちゃんの部屋にあった机や本棚などを中身を出して、太一君と運ぶ。もともとこの家に引っ越した当時は俺も社会人1年生で、そうたいした荷物もなく、ほぼ裸一貫で移り住んできた。そこから約5年住んでいるが荷物も大して増えたような感じはしないなぁ、本が増えたぐらいだね。引っ越してきた当時もこうやって早苗さんに手伝ってもらったっけ。
当時俺は大学を卒業するにあたり、就職活動を密かにしていた。まぁ一度は大学院に行ってもいいかなぁなんておぼろげに考えていたけど、どうせ1人で生活してるんだから就職して無難に生きていこうなんて思ってたんだ。そして数打ちゃ当たるもんで、何社か内定を取り付け、さぁどれにしようかななんて選んだときに爺さんが俺が就職活動をしている事を耳にする。突然呼び出しをくらい、3時間程説教。その説教の内容もひどいもので、お前は何を勝手にしているんだとか、一言ぐらい声をかけろだの、どこの馬の骨ともわからん会社にお前はやれんだの、訳のわからない内容で言い返すと長くなる人なので黙って怒られていると何故か今の会社に就職する事になっていた。いやまぁ、説教の最中に半分寝てた俺も悪いんだ

けどさ。その時にこの家へ引っ越すことも決まったらしい。んで、就職先の会社は元々爺さんが始めた会社の子会社で子供が、課長の親父さんが取り仕切っていた。当時は課長も成り立てで、俺は右も左も判らないだろうからまずは課長のサポートと言う事で入社する事になる。まーあの課長の人使いの荒さは酷いのなんのって、３年前からは大分よくなったけどさ。

んな回想を織り交ぜながら荷物を運び、運んだ荷物を整理する。意外にも太一君の力があってびっくりした。細い華奢な体つきのどこからその力はやってくるのか。でもまぁ、そのおかげで大きい物はすぐに運び終わり、細々した物を元に戻すだけになった。どうやら俺のほうは早く済みそうだ。

「あらかた終わったわね。まだ１１時ねぇ、ロクちゃんどうする？」

「どうしましょうか。ちょっと早いですがお昼に出ます？」

「そうねぇ、ならその後に買い物へ行きましょ」

と言う事で、近くの洋食屋へ。この洋食屋がまた旨い。全体的にすばらしいのだが、特にハヤシライスにかけては世界でＮＯ．１を謳ってもどこからも文句は出ないだろう。でも実力の割に店構えが控えめすぎて住所を頼りにここまで来ても多分見つからないのではないだろうか。建屋と建屋の細い隙間を入って四方を建物に囲まれ、隠れ家的演出をするのはいいけど、本当に隠れてどうするんだか。まぁでも近くの奥様方の秘密基地になってるから客には困らないんだろうけど。

「小夜ちゃんは何にする？」

一通りメニューを眺め、これって呟きながら指をさす。ハヤシライス。お目が高い。２人も決まったようで、店員さんを呼ぶ。すいませーん。

「おまたせしました」

いえいえ、全然待ってませんよ。

早苗さんと小夜ちゃんがハヤシライス。太一君がインディアンハ

ンバーグ。んで俺は、
「ハンバーグをケチャップで」
「かしこまりました。しばらくお待ちください」
と丁寧にお辞儀をして席を離れていく店員さん。ここのケチャップは絶品で、もちろん既製品などを使わず自家製のケチャップを作っている。実はこの店、ケチャップ愛好家の間で大変有名な店でメニューにはないが、ケチャップを買って帰る人がいる程ケチャッパーの舌を唸らせている。もちろん俺もケチャッパー。けどマヨラーは敵じゃないよ、親戚みたいな物だよ。
しばらくすると注文の品が順々に届けられる。いただきまーす。まずはハヤシライスを食べる小夜ちゃんのリアクションを待つ。一口食べた後、目が開いて「おいしい…」って。よかった、よかった。すると早苗さんが、
「ここのハヤシは醤油がいいからねぇー」
醤油？ハヤシライスに醤油？ん？隣でへぇ～って感心してまた一口、何度か頷いてなんか納得してる。ハヤシライスって醤油を使うの？？ねぇ、誰か教えて。まぁいいや、ハンバーグを頂きましょう。うめぇ！ケチャップうめぇ！！
涙を流すほどの感動に打ちひしがれ、食べ終わった皿に後ろ髪を引かれながらさよならを告げる。ごちそうさま。さらばケチャップよ、また会えるのを楽しみにしているぞ。ケチャップを買って帰ろうか本気で悩んだが、今はその時で無いとお告げを受けたので今回は諦めた。
コーヒーを飲みながらお腹を落ち着ける。小夜ちゃんは紅茶だった。この子は紅茶がすきなのかなぁ。後で聞こっと。
「ところでロクさん、車は買い替えたの？」
太一君が思い出したかのように聞いてきた。そう言えばちょっと前に太一君と出かけた時、車を買い替える的な話をしてたなぁ。
「実はまだなんだ。正直何を買っていいかわからないし、まだ動くからね。でもまぁ小夜ちゃんがいるし本格的に探さないと、とは思

ってるけど」
「早いほうがいいと思うよ。さすがにあそこまで乗ってあげれば車冥利に尽きると思うし、そのうち出先で止まっちゃったら洒落にならないから。もし良かったらいくつか選んでもいい？」
「うん、お願いしようかな」
課長が車好きで、短い周期で車を買い替える人なんだけど、その影響か太一君も車好きになってた。ただ、課長はスポーツタイプを好むのに対し太一君は一般車が好みとその全てを受け継いでいるわけではないらしい。まぁ性格が出てるんだと思うけどさ。課長が選んだ車なら中身を聞かずに却下するけど、太一君が選ぶなら間違いが無いだろう。色々な物をトータル的に考えてくれるだろうからね。

さて、飲み物も無くなった事だし、動き出すとするか。まずは早苗さんと会計戦争を始めるとしよう。まずは先手、さぁ、行きましょうか。の掛け声と共に伝票を無事に入手する。
「いいわよロクちゃん、ここは私が」
ここでの長期戦は避けたいところ。一気に行って勝ちを収めよう。

「いえ、わざわざ手伝いに来てくれてるんですから、これぐらいはさせて下さい。いつも世話になりっぱなしですし、それに昨日もお邪魔したばかりじゃないですか」
さぁ、引き下がってください。
「だーめ。ロクちゃんに色々してあげても足りないんだから。お姉さんの言う事を聞きなさい」
ちっ、食いつくんですか。決定的な何かを…。
「いえいえ、駄目ですって。それじゃ俺の気が済みません。これからも世話になるつもりですからここは出しますって」
さぁ、どうだ、まだ足りないか…
「今更なに言ってるの。いいからそれを頂戴」
やっぱり弱いか、こうなったら奥の手だ。

「いつもは俺ですけど、今日は小夜ちゃんの為なんですからここは払わせてください。こうみえても父親なんですよ。形だけでも格好をつけさせて下さいよ」
　これで打ち止め。返されたら負ける…
「うーん、しょうがないわね。じゃあご馳走様。ロクちゃんも男になったのね」
「いえいえ、まだまだですよ」
　よしっ！取った！！かなりぎりぎりだったけど、なんとか勝ちは収められたな。さすが早苗さん、しぶとかった。次があったら間違いなく負けるな。横を見れば太一君は苦笑いを浮かべてる。とりあえず小夜ちゃんに親指を立てて勝利の合図をしておく。小夜ちゃんは呆れた顔をしてるように見えるけど。

2日目　1（後書き）

寝勒「インディアンってなに？」
太一「カレーですよ」
寝勒「へぇ、アメリカにもカレーがあったんだ」
太一「いえ、そうじゃなくて」
寝勒「あれ？インドもインディアン？」
太一「ええ、そうなんです」
寝勒「あぁ、テレポートできるからか」
太一「いえそれは…」

小夜「…信じてるんだ」

2日目　2

お店を出て、3人は課長の家へと向かう。運転手をかってでたのだが早苗さんが自分で運転するとの事で却下された。その間に自分の部屋を全て片付けておけと指示を受ける。一時の小夜ちゃんとの別れ、俺の事を忘れないでねーっとハンカチを噛み締めてる気持ちで見送る。さぁて、家に帰る前に買い物をして来ようっと。

マンションに着くと、家には戻らずにそのまま駐車場へ。本当は食材を買って来ないといけないけど、小夜ちゃんと一緒じゃないから意味が無い。だから輸入食品&雑貨の店。ここでティーポットと紅茶の葉を買う。とは言え、紅茶には疎いから店員さんにお勧めを聞く。

「最近はフレーバー系がお勧めですよ」

フレーバー系？

「アップルとかストロベリーなんかの香りがついてるものです最近は色々あるんですよ」

へぇ、そんなんあるんですか。

「お好みがわからないのでしたら柑橘系なんかお勧めです」

えぇ、確かにお好みはわかりません。柑橘系が好きかどうかもわかりません。

「なんか、普通のってあります？」

「えぇ、香りや飲み方で変わりますけど、一番メジャーなのがダージリンですかね。アッサムもお勧めですよ。後はアイスティーにするならディンブラとかなんていかがですか？」

???やばい、何言ってるのかわかなくなってきた。

「えーっと、どうやって飲むのが好みかまだわかんないんですよ」

「そうですねぇ、ならニルギリが向いてるかもしれません。蒸らす時間などを変えればミルクティーもいけますよ」

「なら、それをいただけますか？」

「はい、等級はよろしいですか？」
「はい…。よくわかりませんが」
「ＦＴＧＦＯＰです」
「は、はい…」
「分量はいかがされます？」
「５０ｇでもいいですか？」
「はい、大丈夫ですよ」
ってな具合で紅茶葉を購入。次に来るときは勉強してから来よう…。後フレッシュも忘れずに購入。
よし、まずはこれで良しっと。そしたら次は鍵屋さんへ。スペアキーを作ってもらおうとしたけど、
「これは電子キーですね。うちで複製は出来ませんよ」
えっ？出来ないの？…まぁいいや。家にスペアが一本あった筈。管理会社へ連絡して一本作って貰わなきゃ。
後はちょこちょこっと寄って、帰宅。もうそろそろ小夜ちゃん達が帰ってくるかな、っとすると携帯が鳴る。メールの着信だね。相手は早苗さんか。噂をすればなんとやら。ついでに時間を見ると３時前か。
『もうすぐ帰るよ！配送をお願いしたから一緒にお家に着くと思う。』
はーい。んじゃ返信っと。
『わかりました。玄関を開けておきます。』
これでよしっと。んじゃまぁ自分の部屋を片付けようかな。って言っても配置なんかは太一君とやってしまったので、パソコンを繋げて本を並べるだけなんだけどね。ただ、パソコンのつなげ方が・・・。これって同じ色のケーブルを差せばいいんだっけ？よしっ！・・・・・・・・・・・・・・青色はどっちに差せばいいの？なんか２つあるんだけどさぁ・・・・・・。しかも差し口がいっぱい余ってるんだけどいいの？これ。まぁ動けばいんだよ、動けば。動かなかったらまた来てやってもらおうっと。

さぁて、本を棚に並べて・・・。この辺は積んでおけばいいや。よしっ！これで完了っと。するとタイミングよく、
「ただいまー」
と3人が帰ってきた。そして玄関先でごたごた何かしてる。あぁ、配送の人も一緒に着いたか。んじゃ、ちょっと様子を見てこようかな。
「おかえりなさい。どうでした？」
「ええ、無事に買い終わったわ。さぁ運んでもらいましょ。小夜ちゃん、どこに置くか教えてね」
奥に居た小夜ちゃんが頷いて、先に家に入ってくる。その後ろには太一君が両手に荷物を抱えて順番待ち。
「太一君、それ頂戴。一旦リビングに運ぶから」
「あっロクさんありがとう。結構重いですから気をつけて」
荷物を受け取ると、確かに。何が入ってるんだろう…。いや見ちゃ駄目だ。
玄関を見てると配送のお兄さん達がまずは小さめカーペットを運び入れベッドと机を運び込む。布団一式とカーテン、あとは箪笥とケースの間ぐらいの衣装棚や小さなテーブルなんかも運んでくれた。…やっぱり早苗さんに頼んで正解だな。俺が思いつかない物が大物だけでもたくさんある。
大物は全て運び入れたようで、早苗さんが伝票にサインして爽やかな笑顔で配送のお兄さん達が帰っていった。忘れずに早苗さんから領収書を貰う。実は昨日の夜に全部プレゼントするとか課長と早苗さんが言ってたけど、さすがにそこまで甘える事は出来ないので丁重にお断りをした。若干、課長は残念がっていたのだが。さてと、あとはさっきリビングに置いた手持ちの荷物と、小夜ちゃんが持ってきた荷物を整理するだけか。
「お茶を入れますが、何にします？」
「そうねぇ、久々にロクちゃんのコーヒーが飲みたいわね」
「僕も同じでお願いします」

コーヒー2つ注文が入りました。小夜ちゃんは？と促すと
「ごめんなさい。わたし、紅茶がいいです」
「了解、そんな申し訳なさそうにしなくていいよ。小夜ちゃんって朝は紅茶だけど、紅茶が好きなの？」
よしっ、ついさっき買ってきたティーポットの出番だ。台所でお湯を2つ沸かしながら聞いてみる。
「うん。コーヒーは飲めないから…」
なるほど、それじゃこれから勉強してとびっきりの紅茶を入れてあげないと。
本当ならコーヒーはサイフォンにしたいけど、アルコールを切らしたとこだったので今日はドリップにしよう。まずはコーヒーポットにお湯を入れて、同時にティーポットもお湯を入れて先に暖める。その間にお湯を2つ沸かす、普通の雪平鍋とドリップポット。
ドリップペーパーを用意してコーヒー豆を用意。雪平鍋が先に沸いたのでそれぞれカップに注ぐ。そしてティーポットとコーヒーポットのお湯を捨て、さっき買った紅茶葉を2杯分。ドリップポットが沸騰したのでお湯を注ぐ。少し落ち着いたとこでまずはコーヒーを蒸らす、1分程まってドリップする。3杯分だとドリップし易くて助かる。ゆっくり注いでいるとティーポットの茶葉が沈むのが見える。これがジャンプってやつか。あぁそう言えば、
「小夜ちゃん、紅茶ってフレッシュ入れる？」
ダイニングのテーブルに座って不思議そうに俺を観察してた小夜ちゃんが頷く。
了解、じゃあちょっと長めに蒸らす。ってさっき店員さんが言ってたから、時間を少し伸ばす。と、コーヒーもドリップし終わったので先にコーヒーをそれぞれのカップへ。んで、小夜ちゃんの紅茶はティーポットの茶葉を抜いて、カップのお湯を捨てて裏返しに。
「はい、できましたよ」
小夜ちゃんがカップとティーポットをリビングのテーブルへと運ぶ。俺はフレッシュ3つを冷蔵庫から出して、砂糖を手にリビング

へ。
「ロクちゃんのコーヒーは久々ねぇ。さすがいい香りがする」
「何言ってるんですか、仕込んだのは早苗さんですよ。今でも足元にも及ばないんですから。ねぇ太一君」
そう言いながら小夜ちゃんの紅茶を注いであげる。
「いえ、ロクさんも今じゃほとんど変わらないですよ。母さんがよく言ってるんですが、喫茶店をやりたいけど、手伝ってもらえるとしたらロクさんしか居ないって。やっぱりおいしいですね」
「でもまぁ、お世辞でもやっぱり嬉しいね」
横で小夜ちゃんがカップの香りを楽しんでる。よかった、ちゃんとした紅茶葉を買ってきて。
「そう言えば、小学校へは何時に行くの？」
そう早苗さんに聞かれ、思い出す。
「お昼のあとに連絡したら5時に来て欲しいそうです。なので４時３５分頃に家を出ればいいかと」
３人が時計を見る。今が3時４０分。小夜ちゃんはカップから目を離さない。まだ口をつけてないので猫舌なのかな。
「なら、一服して小夜ちゃんの片づけを手伝ったら丁度いい時間ね」

ですね。ではもう少しゆっくりし・・・あっ！しまった！！
「早苗さん、忘れてた！小夜ちゃんの教科書とか上履きとか！！」
「えっ？そう言えばそうね。今からでも間に合うかしら？」
うっかりし過ぎた。俺には転校の経験なんて無いから買い揃えないといけないなんて感覚が全くなかったんだ。
「小学校指定の服屋とかってどこにあるんです？多分そこで教科書以外は揃うんじゃないですか？」
「そうねぇ。確か小学校の傍にあったわよ。今から行くの？」
小学校の傍。なら今から行ってその後直接学校に行こう。
「はい！小夜ちゃん、行くよ！」
と、まだゆっくり紅茶を飲んでくつろいでいる小夜ちゃん。ちょ

っと、早く行こうよ。
「ある・・・・・・」
小夜ちゃんが何か呟いてる気がする。・・・えっ？なんだって？
「もうある。持ってきた」
「えっ？持ってきたって、前の家から？」
紅茶をすすって頷く。
「前の学校のじゃなくて？」
頷く。
「・・・そっか、よかったぁ。てっきり何もないかと思ってたよ。焦って損したぁ。そう言えば転校手続きの用紙も持ってきてたもんね。でも次の学校のなんて用意がいいと言うか何と言うか」
「そうよね。転校先の準備なんて転校してから用意するものだと思ってたけど」
小夜ちゃんはカップを両手に持って不思議そうにこっちを眺めてる。いや、不思議なのはこっちだから。
「持っていく物は全部用意してあったから。それを持って行くだけでいいからって」
なるほど、ほとんどの準備はしてあった訳か。でも、結果的に俺の家にいるから良いけど、もし・・・。いや、これは考えるだけでも駄目だな。まぁ不思議を不思議のまま受け入れられる人間でよかった。
「さて、ぬか焦りをしたところで片付けに戻りましょうか」
小夜ちゃんも立ち上がり、よし、早苗さんの号令により早速始めよう。ってその前に。
「ねぇ、太一君。ぬか焦りって何？」
「多分ぬか喜びの焦ったバージョンだと思うよ」
「あぁ・・・」
「母さんオリジナルになるのかな？」
「いや、オリジナルとかそう言う話の次元じゃないでしょ」
太一君と2人で声を殺して笑っていると、先行した早苗さんに、

「ちょっとそこの2人！仲が良いのはいいけど、さっさと始めるわよ！！」

ほら、太一君が怒られた。

2日目　2（後書き）

寝勒「ＦＴＧＦＯＰってなんですか？」
店員「フィナー・ティピー・ゴールデン・フラワリー・オレンジ・ペコーです」
寝勒「はい？」
店員「フィナー・ティピー・ゴールデン・フラワリー・オレンジ・ペコーです」
寝勒「えっと・・・・」
店員「フィナー・ティピー・ゴールデン・フラワリー・オレンジ・ペコーです」
寝勒「・・・・・・・」

寝勒「。・・。・（ノД゛）・・。・・。」

2日目　3

男共がリビングにてさっき買ってきた小物の袋を全部開ける。その間に女性2人で服などを片付ける。小夜ちゃんが持ってきた荷物のキャスター付のカバンは相当大きなものだったけど、多分服だけで2週間分ぐらいじゃないかな。これから足りなくなるんだと思うから、早苗さんと加奈ちゃんにお願いして一緒に買い物へ行って貰うか。自慢じゃないけど、自分の服すら太一君と一緒に行って選んでもらってるぐらいだから小夜ちゃんの服なんてもっとわかる訳がない。俺はどれだけ中学生を当てにしてるんだか。

2人がかりで袋を開けたから結構簡単に終わった。向こうも服の収納が終わり、布団のシーツに取り掛かっていたから終わりは見えてきたかな。後はこいつらを運んでしまうだけ。あんまり女の子の部屋を出入りするのは良くないからリビングで待とうか。

「そう言えば太一君は生徒会に入ったんだって？この前、課長に聞いたんだけど」

コーヒーを入れなおしながら太一君に尋ねてみる。確か課長と昼に蕎麦を食べてる時にそんな話を聞いたような聞かないような。その時たぬきそばの天カスがどうして狸なのかを考えてたから課長の話は半分だった。

「はい、一応生徒会長みたいですよ」

みたいですってそんな、

「他人事だねぇ」

「生徒会長なんてあって無い様な物ですよ、実際何が出来るわけでもありませんし。行事のたびに準備や挨拶をさせられる雑用みたいなもんです」

「確かにねぇ、中学じゃそんなもんだよね。でも選ばれるだけの人望はあるって事でしょ？」

コーヒーが入れ終わり、カップを2つ持ってリビングに座る。太

一君ならカリスマ的生徒なんだろうな。同じ学年に居たら憧れの的だったよ。
「ありがとうございます。単に担ぎ出されただけですよ。他に誰もやりたがらなかったってだけです」
「でも、本来は3年生がやるんじゃない？それを2年生が取り仕切るなんてすごいじゃん」
「たぶん、来年もやらされますよ。2年連続やった方が先生達も楽だったからじゃないですかね」
　でも課長は喜んでた、・・・はず。正直覚えてないけど。
「これで内申には相当上乗せされたね。そう言えば来年は受験かぁ、忙しくなるね」
「いえ、すぐに決まると思いますよ。推薦を取りに行くつもりですから」
「あれ？もう行きたい高校は決まってるの？」
　まだ2年生が始まって間もないってのに。
「はい、ロクさんと同じところですよ。一般入試で入るのにはちょっと苦労しそうなので」
　俺の高校・・・。あぁこのすぐ近くの。
「すぐ傍じゃん。そんな俺でも入れたのに太一君なら余裕過ぎるでしょ」
　確か超進学校とか言ってたな。今思い出せば県外からも来てた奴が結構いたねぇ。俺も近いってだけで選んだ高校なんだし、そんな高校受験で勉強した覚えもないんだけど。
「いえ、ロクさんと一緒にしないでくださいよ。元々の出来が違いますし、神懸り的な幸運は持ち合わせてませんからね」
　そう言っていたずらっ子のように笑う太一君。確かにヤマを張って試験に挑んだらそのヤマがジャストミートして更に風に乗って場外ホームランって感じだったからね。ってか、何で知ってるの？あぁ、課長がしゃべったのか。
「終わったわよー。ロクちゃん私にもコーヒーをもらえるかしら。

小夜ちゃんには紅茶ね」
　おっと、終わりましたか。時計を見ると４時２０分前あれから約３０分ちょっとですか。早いなぁ、さすが早苗さん。主婦の鑑だね。
「お疲れ様です。ありがとうございました。ゆっくりしてください。小夜ちゃんもお疲れ様」
「ねぇ、ちょっと部屋を見てきたら？小夜ちゃんの性格が出てるわよ」
「そうですね、ちょっと見てきていい？」
　そろそろかなって既にお湯をわかしてたんだけど、若干早く片づけが終わったみたいだね。小夜ちゃんを見ると、うっすらと頷いた気が。では３人でぞろぞろと部屋を見に行く。
　小夜ちゃんの部屋の印象は、小奇麗さっぱりって感じで、あまり物を置いたりせず必要最小限でとどめてるみたいだ。カーテンと布団カバーが白をベースにした薄い黄緑色と薄い緑の水玉模様で、机や椅子、小さなテーブルの足が白色で、机とテーブルの天板がガラス、机などに乗ってる小物も白色なので部屋全体が明るい。壁紙が白でよかったよ。えっとこれは純粋とか清潔とかってイメージ？確実に親馬鹿が入ってるな。
　後ろでどう？って早苗さんが聞いてくるので、
「バッチリです。本当にありがとうございます」
「全部選んだのは小夜ちゃんだからね。あの子実はまだ何にも染まってないって感じじゃない？」
　って笑いながら一緒にリビングに戻る。ちょっと待って、早苗さん。それって既に染まってるって意味じゃないですか。やめてくださいよ、まったく。
　キッチンに戻ってみると小夜ちゃんが、カップと両方のポットにお湯を入れていつでもコーヒーと紅茶を入れれるように支度をしてくれていた。さすがと言うか何と言うか、相変わらず出来すぎなんだってば。

時間までゆっくりしていると、インターフォンが鳴る。誰だろ、宅配便？それとも配送のお兄さんが忘れ物したかな？モニターを見てみる・・・。加奈ちゃん！？取り合えずドアを開けに行き入ってもらう。そしてリビングへ来ての一声は、
「来ちゃった♪てへっ」
てへっじゃなくて。どこの遠距離恋愛してる恋人だよお前さんは。

「こら加奈！来ちゃ駄目って言っただろ？まったく・・・」
「そうよ、もう終わったからいいけど、結局邪魔になるだけなんだから」
「だってー、家に帰っても誰もいないんだもん。あたしだけ仲間はずれやーだー」
「でも、もう帰るわよ」
「えー、今来たばっかー。ロクちゃん遊ぼうよー」
俺の腕を揺らして不満をあらわにする。そんな中でも小夜ちゃんは紅茶にご執心。
「ごめんね、今から学校に行かないといけないからまた今度」
「そんなー」
「あぁ、そうだ。明日から小夜ちゃんも学校だからよろしくね」
「そうなの？じゃあ朝迎えに来る！」
「うん、よろしくね」
ようやく顔を上げて加奈ちゃんを見つめ無言で頭を下げた小夜ちゃん。と言う事でそろそろ家を出ましょうか。

「本当にありがとうございました」
マンションの入り口で早苗さんと太一君にお礼を。小夜ちゃんもお辞儀する。
「これぐらいで何を言ってるの。何か困った事があったら連絡してくるのよ。わかった？」
「ええ、大丈夫です。既に次のお願いを考えてますから」

次は小夜ちゃんの洋服を見に連れてってもらわなきゃ。
「そう、ならいいわ。それじゃまたね」
「じゃあロクさん。小夜ちゃんも」
「じゃーねー、小夜ちゃんまた明日ー」
そう言いながら3人が坂を上っていく。加奈ちゃんあんまり走ると危ないよ。2人で手を振って見送り、それじゃ小学校に行きますか。確かここの坂を左だったな。
ゆっくり歩いていくと大体20分の道のりの所に小学校と中学校が併設されている。だからここで生まれ育った子は9年間ほとんど変わらない通学路を通る事になって、学年の違う知った顔をよく見かける事になるらしい。俺の地元はこっちじゃないからこれからはもっと近所付き合いもしていかなきゃな。
門の前まで行くと部活帰りの子供達が勢いよく飛び出してくる。周りを見ないと危ないよー。んじゃまぁ行こうか。玄関を入ってスリッパに履き替える。そう言えば学校の玄関って通るのは初めてだな。今まで縁が無かったところだ。そう考えると学校に通っている間でも入った事、通った事の無い場所って意外にあるかもしれないな。そして、大体玄関の先は職員室だったりする。ノックし扉を開ける。えーっと、お電話致しました草野です。岸本先生はいらっしゃいますか？
「あぁ、はいはい。私です、お待ちしておりました。どうぞこちらへ」
と言って隣の部屋に案内される。へぇ、応接室があるんだ。どうぞお座り下さいと勧められたので遠慮なく。
「どうも草野さん、岸本です」
ジャージ姿に短髪の若い男の先生。どう考えても体育教師ですね。
「大変申し訳ないのですが、校長も教頭も不在でして私が対応させていただきます」
「とんでもない。いきなりご連絡をしたのはこちらですから」

「そう言って頂けると助かります。さっそくで申し訳ありませんが、書類はお持ちでしたか？」
忘れずに持ってきておりますよ。
「ええ、こちらでいいかと思いますがご確認ください」
封筒から書類を出して渡す。しばらく岸本先生が書類を眺め、
「娘さんは小夜さんですか・・・。はい、大丈夫です。では頂いていきます」
「よろしくお願いします」
「ところで、さっそく明日からと伺いましたが、よろしいですか？」

はい、そうです。
「ええ、いきなりで申し訳ない話なのですが」
「いえ、構いませんよ。5年生でしたね。2クラスありますが私が担任の2組になると思いますのでよろしくお願いします」
「そうですか、こちらこそよろしくお願い致します」
今度は小夜ちゃんに向かって
「小夜ちゃん。明日からよろしくね」
「よろしくお願いします」
と小夜ちゃんが頭を下げる。っと言わないといけない事が、
「それでですね、先生。ちょっとこの子と私に事情がありまして、実は・・・」
小夜ちゃんとの事を話そうとすると、
「あぁ、はいはい。お聞きしております。草野さんがその・・・引き受けられたとか」
「えぇ、なにぶん独り者でしたから右も左もわからない事だらけで。色々とご迷惑をおかけすると思いますが」
「いえいえ、教科書等はございましたか？」
あぁ、小夜ちゃんが持ってきたから。
「はい、用意はあります。取り敢えず一式あると思いますが足りないものとかある様でしたらご連絡ください」

「わかりました」
今度は小夜ちゃんを向いて
「明日、学校へ来たら職員室に来てね。その後一緒に教室まで行くから」
「はい、わかりました」
「では草野さん、こらからよろしくお願いします」
「こちらこそ、今後ともよろしくお願い致します」
立ち上がって部屋を出る時に一礼。黙っててても小夜ちゃんもするところがすごいよなぁ。それが普通なのかな。
「じゃあ帰ろうか」
そう促して帰る事とする。これから長くても2年間はこの学校にお世話になります、小夜ちゃんが。よろしく。

家に帰って小夜ちゃんが作ってくれたご飯を食べる。冷蔵庫の中身がぱっとしない状況の中、残り物とかで何とかやりくりしてくれたんだけど、いやぁそれがもう美味しいのなんのって。煮物の味付けがホント最高だった。甘くもなく辛くもなく、ジャガイモなんてホクホク。実はすごい料理上手なのに、なにが「ある程度は」なのか。これだから日本人は読めないって言われるんだよ。こりゃ毎日帰ってくるのが楽しみだな。
夕飯も終わり小夜ちゃんが洗い物をやってる時に俺がまどろんでた所、あっ！忘れてた！！最近物忘れが激しいなぁ、歳か？部屋から昼に買った物を持って来て
「小夜ちゃんに渡すものがあったの忘れてた。はい、これ」
渡したものは携帯電話。
「我が家は電話を引いてないからね。一応俺と課長と早苗さんと太一君の番号とアドレスを登録して、向こうにも教えておいたから何かあったら連絡するといいよ。ちなみに加奈ちゃんは持ってないからね。あんまり学校に持っていくのはよくないけど、学校に持っていくならちゃんと電源を切ってカバンに閉まっておくんだよ」

受け取った小夜ちゃんは一瞬ぽかんとしていたが、ありがとうございますってお礼を言ってさっそく携帯をいじりだした。なんだかおもちゃを与えた親の気分だね。さてと、風呂に入って寝ようかな。明日から仕事だぁ。２日分、特に今日の分の仕事を明日の午前中に片付けないと。

2日目　3（後書き）

加奈「ロクちゃんあそぼー」
寝勒「よし！遊びごっこだ！」
加奈「なにそれー？」
寝勒「遊んだふりをする遊びだ！」
加奈「わかった！」
寝勒「いやぁ、はしゃいだなぁ」
加奈「楽しかったねー！」

小夜「おもしろい？」

3日目　1

目覚ましが鳴り・・・後5分。
・・・・・・。
・・・・・。
・・。
また目覚ましが鳴る。・・・・・・わかったよ。起きればいいんでしょ、起きれば。うるさいなぁ。もう、鳴りたいの？なんなの？ばかなの？起こしたいの？はい、ごめんなさい、今起きます。おはようございます。いやぁ、久々のベッドだったからさ、テンションがぬくぬくで。じゃあコーヒーを入れる前に朝の一服を。そして部屋のふすまを開けるとそこに広がった光景はっ！
「おはようございます」
赤い割烹着を着けた小さい女の子が台所に立ってる。んー、小夜ちゃんじゃん！？
「おはよう！」
これで3日目の朝を迎えてるのにいまいち朝は寝ぼけるなぁ。今日の朝はいい感じで頭も覚めたはずなのに。まぁいいや、タバコを吸おう。ソファーに深々と座り込み、タバコを一本取り出し、咥えてライターを手に取る。・・・・・・だから止めるんだって。昨日一昨日と朝寝ぼけて吸っちゃったけど、これから止めるの。小夜ちゃんがいるんだから！だから最後の一本。火を付けて、ぷはぁ～。そうすると小夜ちゃんが困った顔をして近寄ってきた。
「なに？どうしたの？」
「あの、コーヒーの淹れ方がわからないんです」
コーヒー？コーヒーはねぇ、
「インスタントでいいよ。別に気にしないから」
「でも、昨日ちゃんと淹れてたし・・・」
あぁ、そんな事。そっか、昨日小夜ちゃんの前では初めてコーヒ

ーポットとか出してきたからな。今までインスタントしか表に出てなかったから、普通にインスタントを飲んでる人って思ってたんだね。それで正解なんだけどさ。
「違うよ、元々朝はインスタントだから。朝からちゃんと淹れるとめんどくさいでしょ？」
「でも・・・」
食いつくねぇ。
「本当にコーヒーは飲めればいいから。インスタントだろうがちゃんと淹れてようが気にしてないんだよ。朝から豆を炒って、挽いてなんて出来ないでしょ？別にインスタントがなかったら缶コーヒーでも構わないほどね」
「・・・わかりました」
はい。よろしくお願いします。でもしぶしぶなのが気になるなぁ。
さてと、タバコを消して顔を洗って身支度をしよう。今日は仕事か。あーあ、４連休が終わっちゃったよ。
「小夜ちゃん、俺今から支度するから１０分ぐらいかかる」
わかりました。と返事を聞いて動き出す。顔を洗って歯を磨いて髭を剃って、頭をセットして、自分の部屋へ。肌着を着て靴下を履いて、Ｙシャツを着てネクタイを締めて、スラックスを履いてジャケットを持ってテーブルへ。そうすると丁度トーストにマーガリンを塗ってるとこだった。
「あっ、自分でやるからいいよ」
「大丈夫です、慣れてますから。温かいうちに塗らないと綺麗に溶けないし」
いや、その温かいうちに自分で塗るって言ってるんですが・・・。あれ？
「そんな別にいいのに。それに小夜ちゃんの紅茶はティーパック？」
「はい、朝はめんどくさいから。それに葉っぱが勿体無い」
「・・・・・・」

ったく、この子は。それとも今のは嫌味なの？
「あっ、スーツ・・・・・・」
「ん？あぁ、始めて見るんだっけ？どう？似合う？」
ちょっとおどけて言ってみた。１回転してみようかと思ったけど、さすがにそれは大人気ないな。
小夜ちゃんはじっと俺を見てしばらく動かなかったが、
「別人みたい・・・」
おっ！それはいい言葉を頂きました！普段とのギャップがあるって事だよね？って基準点はどっちかな？
しばらく俺を見てた小夜ちゃんだが、時計を見て動き出す。キッチンから目玉焼きとベーコン、簡単なサラダとコーヒーを持ってきてくれた。俺も時計を見ると７時半前。大分余裕があるな。そして小夜ちゃんの分を運び終えるのを待って、いただきます。っと。まずはコーヒーを。いやぁ、この熱いのが喉を通る感じ。いいねぇ。後、小夜ちゃんに伝える事は、っと。
「今晩なんだけどね」
目玉焼きの白身と黄身を綺麗にフォークで区切っている最中に声をかけてしまったので、上目使いでこっちを見る。いや、睨んだ？
「俺が帰ってからスーパーに行こう。んでも帰りは６時半とか７時ぐらいだから、それから帰って作ると遅くなるでしょ？だからスーパーに行った後は適当に食べて帰ってこよ。いい？」
ちょっと考えてる様子で、
「わたしが買いに行ってきます」
そう言うと思ったよ。
「でも小夜ちゃん、スーパーの場所とかわからないでしょ？」
「早苗さんに教えてもらうから」
ちっ、そう来たか。小夜ちゃんが早苗さんに連絡取ったら早苗さんの事だし、一緒に行きましょ？とかになるんだ、絶対。
「いや、俺も一緒に行きたいからね。買いたい物とか出てくると思うし」

しぶしぶ頷いてくれる。何が不満なんだろう。この子が不機嫌になるタイミングが今一掴みかねる。俺と一緒にいる事が嫌なのかな？それなら考え直さないと。ちょっと聞いてみるか。
「ねぇ、小夜ちゃん。もしかして俺と一緒に出かけるのは嫌なのかな？」
紅茶を手に取ろうとしていた小夜ちゃんの動きがいきなり止まり、目を見開いてこっちを見つめる。あぁ、もしかして図星だったか。だったら・・・。っと、突然小夜ちゃんが首を力いっぱい小刻みに横に振る。えーっと、そんなに力強く振ると脳みそプリンになっちゃうよ・・・。
「あっ、うん。変な事聞いてごめん。首が鞭打ちになっちゃうから・・・ね？」
あまりこう言う事はストレートに聞くべきではなかったな。反省。小夜ちゃんもなんか考え込んじゃってるし。
その後も小夜ちゃんは何かを考えてる感じで、無言のまま朝食が終わり、そのまま洗い物をしている。なんか不機嫌って感じでもないけど、話しかけにくい雰囲気をかもし出してるんだよなぁ。テーブルからそんな小夜ちゃんを眺めているとピンポーン！あぁ、加奈ちゃんが来たな。時計を見るとまだ7時５０分。学校行くにはちょっと早いな。家に入ってもらおう。玄関を開けに行く。
「ロクちゃんおはよー！」
「おはようございます」
小夜ちゃんを迎えに来たのは加奈ちゃんだけじゃなくて太一君も一緒だった。向かう所はほとんど一緒だからね。もしかするとこの兄妹は毎朝一緒に学校へ行ってるんじゃないだろうか。
「おはよう、まだ時間はあるね。中にどうぞ」
丁度洗い物も終わったところみたいで、小夜ちゃんがこちら覗く。小夜ちゃんを見つけ、そちらに駆けて行く加奈ちゃん。
「あー！小夜ちゃん、おはよう！ガッコにいくよー！」
加奈ちゃんは朝から元気だ。この子がいるだけで空気が一気に明

るくなった気がするね。
「太一君もわざわざありがとね」
太一君と一緒にリビングへ移動しながらお礼を言う。
「いえ、通り道みたいなものですから。それに小夜ちゃんは荷物があると思うし。ロクさんの事だから一緒に学校まで荷物を持って行こうとしてたでしょ？」
うん。昨日2人で準備してたんだけど、結構な荷物になる。さすがに小夜ちゃん1人に持たせる訳にもいかないから今日は一緒に学校まで行こうとしてた。それを読まれてるとは、さすが太一君。あなどれがたし！
「まぁね。多少の遅刻は課長も目を瞑ってくれるだろうしさ」
「だからその代わりですよ。小夜ちゃんおはよう」
小夜ちゃんはおはようございますって丁寧に挨拶を返してる。
「じゃあごめん、太一君。お願いしても良いかな？」
「はい、いいですよ。荷物はさっきのです？」
既に持っていく荷物は玄関に用意してある。大きい紙袋が2つ。
「うん。ちょっと多いけどよろしくね」
「えぇ、大丈夫ですよ。さぁ加奈、小夜ちゃん。ちょっと早いけどそろそろ行こうか」
「はーい！」
元気に返事する加奈ちゃんと頷いて返事をする小夜ちゃん。対極に位置してるんだけど、この2人はいいコンビになりそうな予感。つか、あまり動かない小夜ちゃんを加奈ちゃんが連れまわすって感じになりそうだな。意外にも小夜ちゃんは嫌な顔をする事も無く、満更じゃない感じだし。
みんなで玄関へ向かい、一度小夜ちゃんが部屋に戻って赤いランドセルを背負ってくる。
「ロクちゃんじゃあねー！いってきまーす！！」
勢いよく玄関を飛び出していく加奈ちゃん。
「それじゃ、ロクさん。・・・ちょっと待って加奈！」

荷物を持って加奈ちゃんを追いかける太一君。
1人残された小夜ちゃんはこちらを向いてうつむいている。しばらくそのままだったから何か声をかけようと口を開きかけた時、突然俺を見上げた。一度口を開けかけたがまた閉じて、俺をみつめて無言。
またしばらく待つ。そして、意を決したように一度だけ軽く深呼吸をして、
「・・・行ってきます」
俺は出来るだけ微笑んで、
「うん、行ってらっしゃい。気をつけてね」
送り出す。小夜ちゃんは頷いて、2人の後を追いかけていく。
小夜ちゃんの初登校は無事に終わりそうだ。毎日の学校が楽しくなるといいね。さてと、小夜ちゃんを送り出したことだし、俺も会社に行こうかな。

3日目　1（後書き）

寝勒「ハンカチ持った？」
小夜「持った」
寝勒「ティッシュは？」
小夜「大丈夫」
寝勒「地図は？」

小夜「・・・一緒にしないで」

3日目　2

会社まで車で２５分ほど。いつも大体８時半過ぎに着くようにしてるので、小夜ちゃんを見送ってから家を出ると丁度いい時間になる。いつもの様に車を走らせ、いつもの様に会社に着く。地下鉄の上を通る一本道。電車で通ってもいいんだけど、人の多い電車で朝から揺られるのはちょっと体力がもったいないって事で車で通ってるわけだ。

会社はオフィスビルの７階にある。とは言っても、ビル全体が系列会社しかない為、実質は会社が７階にあるのではなく働く机が７階にあると言う感じ。その７階の一番端の部屋に第２企画部１課がある。そこが課長の根城、俺のデスクがある場所だ。

第２企画部１課、通称ニカイチと呼ばれる部署は地域開発からノベルティの作成まで様々な仕事をこなす。もともと企画部自体ひとつしかなかったのだが、３年前にちょっとした事件が発生し第２企画部なるものが設立された。未だに１課しかなく、２課や３課がある訳でもないのだが１課の名称は残されたままとなっている。

ニカイチの課員は課長を含め現在７名。元々は課長と俺と竹若さんの３名だけで、俺が企画部に、竹さんが設計やデザイナーに仕事を投げていたのだが、徐々に課内でも受け持つようになり、企画に２名、デザイナーに２名を増やした。

竹さんは今年で３２歳になり、課内で課長の次に年長者だ。頼れば何でも答えてくれるマルチプレイヤーでニカイチ設立以前から課長と親しくしていた。もちろん課長は俺と一緒に迷惑をかけてきた側だが。身長が高く、黒縁メガネをかけて坊主に近い頭をしている。結婚はしているが子供はまだいない。製作リーダでニカイチの大黒柱だ。

次に入ったのは進藤　恵美さん。俺と１つ年下の女性でかなり几帳面な性格をしており、企画と予算を担当してもらっている。いつ

もダーク系のスーツを着て仕事の時は縁無しメガネをかけており、真面目一徹って感じだけど、基本的には物腰が柔らかいのだが、怒ると怖い。

その後には竹さんが制作部から引き抜いてきたデザイナー2人。

高浜さんは今年で３０歳の既婚者で3歳の男の子がいる。普段は何かと万人受けをするデザインを上げてくれるのでいざと言う時に非常に助かる。たまに奇抜さを依頼すると理解に苦しむデザインが上がるので使いどころが更に難しくなるのが玉に瑕だが。金色の短髪でガタイがいい。冬でも会社の中ではTシャツにジーンズのスタイルだ。

もう1人は環ちゃん。進藤さんと同い年で俺の一つ下。なんとも女性らしい可愛いデザインを上げてくれる。キャラクター物もいけるので企画としては有難い。いわゆる芸術家肌で、物事を感覚で捉える節がある。愛想が良く、たまに天然を発揮してくれるので課内のマスコット的な存在になっている。化粧気がほとんどなく、可愛らしい妹って感じのする子だ。

企画にもう1人、企画助手の圭介君。課内で一番若い２４歳で今時の若い感じがそのままのちょっと軽い感じがする人だ。だが、若者向けの企画などでは本領を発揮してくれるのでいいのだが、詰めが甘く進藤さんに小言を言われてる。太いジーンズを腰で履いてシルバーがジャラジャラとちょっとうるさいムードメーカだ。

そして俺は企画リーダにさせれられて、課長が社外クライアントと折衝し、俺は課内と社内の調整役となっている。企画と言ってもいつも企画会議では何も思い浮かばず、決まった企画をまとめる仕事が多い。よく課長の右腕なんて称されるが実は右腕は竹さんで、俺は竹さんの指のような感じである。

そんなニカイチを作り、まとめ上げているのが仕事がすごく出来る課長だ。ただ出来るのであってやる姿は滅多に見られない。まぁこの人が動くと後々面倒を起こす事があるので動かないで欲しい。しかし、仕事は出来るので文句の付け様が無いのは言うまでもない。

もちろん対外的にだが。
　と言う訳でいつも通り7階の一番奥の部屋へ。部屋を入るといつも通り進藤さんと竹さんが既にいる。この2人は朝来るのが早く、竹さんは会社の新聞をどこらから数紙持ってきて読んでるし、進藤さんは既に仕事を始めている。
「おはようございます、急に休みを貰ってすみません」
「おはよう！いいよいいよ、たまにはそんな事もあるさ」
「おはようございます。もうよろしいのですか？」
「うん、おかげさまで。ありがとう」
　2人に挨拶を交わし、まずは席のパソコンを立ち上げる。そして2日間により貯まっているであろう仕事の山を確認する。・・・が、全然増えてない。むしろ減ってる！？しかも今日の午前中に仕上げようと思ってた企画書が出来てるし。
「竹さん、これどういう事です？」
　新聞を読んでいた顔を起こして、すこしニヤニヤしながら
「あぁ、それ。昨日まっつぁんがやってたよ」
　ちなみにまっつぁんは課長ね。
「それ本当ですか？」
「嘘は言わないよ。珍しい事もあるもんだよねぇ。最後には何て言ったと思う？ロクが忙しいと俺と遊んでくれねぇんだよ、だって。愛されてるねぇロクちゃん」
　あの人は遊びに会社へ来てるのかよ。
「止めてください、気持ちが悪い。何考えてるんですかね。ってか、課長が仕事をやったって事は何かトラブルが起きてませんか？」
　絶対何かあるはず。企画部と揉めてないかなぁ、あの人企画の人と仲がすごく悪いし。いい歳して勘弁して欲しいよ、後で尻拭いするのは俺なんだから。
「大丈夫、社内的なのは俺がやったから。今日のロクちゃんはまっつぁんと遊んでなよ」
　そうニヤニヤしながら再び視線を新聞に戻す。じゃあしょうがな

い、この出来上がってる企画書の中身を校正しようかな。
そうこうしているとみんなが続々と出社してくる。
「おはようございます」
「おはよう。草野君、調子はどうだい？」
「いい感じですよ。ご迷惑かけてすみません」
まずは高浜さんだ。今日は青いTシャツを着ているが、前に聞いたらどこか海外の航空会社のTシャツだと言っていた覚えがある。まったく聞いた事ないのだが、そもそも航空会社ってTシャツを販売してるの？
「おっはよーございまーす！」
「環ちゃんおはよう」
「草野さんお久しぃ」
次に環ちゃん。コンビニ袋をぶら下げて登場。この子は朝ごはんを会社に着てから食べ始める、朝いつも時間がないとか。そしてしばらくして
「ざっす！課長まだっすよね？」
息を切らしながら圭介君が入ってくる。
「まだよ。いい加減もうちょっと早く来たら？社会人なんだから」
「うぃーっす。努力はしてまーす」
早速進藤さんに小言を言われてる。多分エレベータがすぐに来ないから階段で上がってきたんだろうな。
最後には課長が「おはよーさーん」と9時ぎりぎりに入ってくる。課長が入ってきたので皆が適当に挨拶を返しそれぞれの席で立ち上がる。
「なんか業務連絡あるかー？ないなー？じゃあ今日もよろしく」
「うぃっす！」「へーい」「お願いします」等々
皆ばらばらな返事を返して非常に簡単な朝礼が終わる。そして俺は軽く目を通した企画書を持って課長の元へ。
「課長、仕事をやって頂いたそうで、ありがとうございます」
課長は体を横に向け、外を眺めてる。ぼけーっとして聞いてない

感じ。この人は毎朝来てすぐはこうして外を眺めてぼけーっとして、その後いきなり動き出す。まぁいつもの事だから適当に済ませて仕事しよっと。んで、返事を待っていると、
「なぁロクよぉ。今日は天気がいいなぁ」
「今日は1日晴れるみたいですよ」
またしばらく返事待ち
「今日は暑そうだなぁ」
「もうすぐ梅雨ですからね。下手すると30度超えるんじゃないですか？」
何も考えてないように、ぼけーっとしてる。またちょっと置いて
「なんかバーベキューしたくね？」
「いいですねぇ、夏に行きましょうか」
ちょっとづつ復活してきたのか会話が続く、
「俺んとこと、ロクんとこ。ニカイチ全員で」
「えぇ、いいですね」
「今週」
「はい？」
何て言ったの？意味分からない。はぁ？
「よしっ！決めた！！」
突然動き出す課長。なんかテンション上がってるし。
「今週バーベキューだ！全員参加！ロク！スケジュール確認しろ！」

ちょっとまて、なんだそれ。
「いや、いきなり今週はきついと思いますよ」
「うるせぇ、とにかく確認しろ！今すぐだ！」
はいはい、わかりましたよ。適当に返事をして席へ戻る。そしてメールを一斉送信。
『Ｓｕｂ：今週末の予定
課長の思い付きです。聞こえてたと思いますが今週ＢＢＱをしたいと申しております。

スケジュールの確認をします。土日のＯＫｏｒＮＧ下さい。以上』

さっそく皆からの返信。うーん、土日ともに３人ＮＧか。竹さんは両方ＮＧだね。んじゃ課長を説得しに行きましょうか。とその前に天気予報を確認してっと。

「課長、今週末やっぱり駄目ですね。両日とも３人ずつ予定があるそうです」

課長は眉間に皺がよっていく。

「んなもん知るか。強制参加だ」

また無茶苦茶な。

「駄目ですよ。後から言い出したこっちが悪いんです。諦めて下さい」

「じゃあ来週だ」

「来週は雨の予報です。ちなみにもうすぐ梅雨入りしますので」

「はぁ？なんだそれは。じゃあどうすりゃいいんだよ！」

「夏にしましょう、８月に。場所は海でどうですか？きっとビールがうまいですよー」

きっと課長の頭の中で情景が広がっているはず。さぁビールを飲め！そうすれば、

「よし！８月だな！全員のスケジュールを今から抑えておけ！頼むぞ！」

ほら落ちた。課長に見えないように皆に向けて親指を立てる。席へ戻ろうと体を向けようとした時、

「あっ、そうだ。おい、みんな！ちょっといいか？」

止められた。皆が課長に注目する。

「一言だけ、連絡がある」

ん？なんかあるの？

「ロクに娘が出来た。以上！」

ちょっと！あんたいきなり何言い出すんだよ！しかもその言い方だと、

「ロクさん出来婚！？」
「とうとうロクちゃんも身を固めるのかい？」
「草野さん彼女いたんですか？」
「草野君もやるねぇ」
ほら、見ろ。めんどくさい言い方しやがって。今それを伝えると皆仕事どころじゃなくなるでしょ。なに考えてんだか。かったるそうな顔してるけど、内心ほくそ微笑んでるんだよ、絶対。
「いえ、違いますよ！色々あって養子に貰ったんです！」
かくかくしかじか。で伝わらないかなぁ・・・。
「へぇ、いくつなの？」
竹さんが聞いてくる。
「小学5年生です」
「名前は？」
「さよです。小さい夜で」
「課長！その子に会ったんすか？可愛いっすか？」
今度は圭介君が課長に聞く。つか圭介君テンション上がり過ぎ。
「ああ、すごく可愛いぞ。うちの加奈には負けるがな」
さりげに喧嘩を売ってくる課長。そんなものは買いませんよ。
「なに言ってんです。確かに加奈ちゃんは可愛いですが、比較するにはベクトルが違い過ぎですよ」
「ねぇねぇ草野さん、どんな子？」
今度は環ちゃん。やっぱり質問責めになったな・・・。
「物静かな大人しい子だよ。って言っても、まだ3日ぐらいしか経ってないけど」
「ふーん。じゃあじゃあ、どんな感じ？」
やっぱり環ちゃんの聞きたい事はイメージみたいなものなんだろう。
「うーん、難しい事を聞くねぇ。ぱっと見は線が細くて華奢で繊細そうなんだけど、うっかり近づくと芯が強くて弾き飛ばされちゃうって感じ？」

けれどその芯も細くて、土台も危ういところで成り立ってるみたいで。
「へー。イマイチわかんないや。今度お披露目会をやろうよ！」
「いいねぇ、草野君どう？僕も興味があるし、みんなだって見てみたいだろうからね」
「ロクさんやりましょうよ！」
環ちゃんの提案に高浜さんと圭介君ものっかり、竹さんも頷いてる。やりたいのは山々なんけどなぁ。だけどなぁ・・・
「私も会ってみたいのですが、しばらく経ってからにしませんか？その子も草野さんのところで慣れない生活を始めたばかりでしょうから、もうちょっと落ち着いてからでも遅くはないと思いますよ」
進藤さんが助け船を出してくれた。そして俺に向かって自分の眉間を指さす。どうやら俺は険しい顔をしてたらしい。
「よしっ！それじゃ、ちょっと先の話だが8月を7月に早めて、バーベキューでお披露目パーティーとしようじゃねぇか！」
「さんせー！」「いいですね」「オッケイっす！」
と言うことで課長の一声で小夜ちゃんのお披露目会が決まった。えーっと、本人の承諾を得てないのに決めちゃっていいのだろうか・・・。

3日目　2（後書き）

環「ＢＢＱって何？」
圭介「バーベキューっす！」
竹若「なんだと思ったの？」
環「てっきり踊るのかなぁって」
高浜「大捜査線？」

環「ポンポコリンの」

3日目　3

お披露目会はこの際せっかくだからと話がどんどん盛り上がり、7月の連休に一泊する計画となった。場所は課長と竹さんが決めるとの事で、お披露目会からちょっとした旅行になってしまった。何でそうなるかねぇ。

取り合えず一旦話も落ち着き、それぞれが仕事に取り掛かる。俺の方は、当初やる予定だった仕事のほとんど片づいており、残りもやり終えてしまったので正直手持ちぶさたになった。他の仕事も大体修正待ちだったり、お客からの返事待ちだったりと午前中は進むものが少ない。しょうがない、雑用でもするかな。

「課長、ゴミください。あと、シュレッダー行きはあります？」

メールを打ってる様子だったが、一旦手を止め目だけでこちらを見る。

「ゴミならここに。シュレッダー行きはそこ座ってるだろ？」

そして顎でその方向を示す。

「うわっ！課長ひでぇっす！誰がニカイチのゴミなんすか！？」

「誰も圭介がゴミだなんて言ってねぇよ、お前がシュレッダーをかけに行けって意味だ」

片側の口元を上げて皮肉そうに笑う。わざとやって遊んでやがる。課長に付き合ってるといくら時間があったとしても足りない。

「はいはい、わかりましたから。さっさと出してください」

「んだよ、つれねぇなぁ」

適当に皆の席からゴミを回収し、シュレッダーをかけて戻ると、

「草野さん、今空いてますか？例のオープン企画ですが金額が出まして、ご相談があります」

「うん、いいよ。あっちでやろうか」

打ち合わせルームで進藤さんから報告を受ける。基本的にイベントやノベルティだったりの予算組み、外注や製造関係との交渉をお

願いしている。なんだかんだ交渉する先が多く、相手業種も多岐に渡ってしまうので誰かに一貫してやってもらった方が効率がいい。特にニカイチの運用は企画組みを1人でやるわけではなく、企画を練るのはニカイチ全員で取り組み、高浜さんと環ちゃんが形を上げて、製造等を外に振るのならば進藤さんがそれを元に金額交渉を行うってパターンが多い。主に俺が全体のスケジュール等を管理し、竹さんは製作チームと外注のデザイン事務所に実質的な指示を出す。最終的に企画書を起こすのは俺や竹さんや課長がやる。圭介君は俺と進藤さんのサポートがメインだ。

ってな訳で、オープン企画の金額が決まったらしい。

「申し訳ありません、私の力不足で今回の予算ではオーバーしてしまいました。何かを削るか質を落とすかしないと難しい状況です」

「うーん、超えたか。超えると思ってなかったんだけどなぁ。そうだねぇ。どうしようかなぁ」

進藤さんから貰った金額を見る。

「ここにある通り１２％オーバーでいいの？」

「はい。ここまで金額を詰めたのですが、どこも材料高などで値上げ交渉をしに来ている状況ですので、これ以上は交渉の場すら成り立たないと思います」

「課長が出ても無理そう？」

「今までの経緯からしても既に底値だと思います。各社相手側の上層に直接交渉はしてみましたが、思っていたよりも価格高の進みが早く、各社とも謀り合わせたかのようなラインを示しています」

「そうかぁ、やり尽くしたんならしょうがない。１２％なら乗せようか」

「えっ？よろしいのですか？粗利が切ってしまうと思いますが」

「いいよ、一応客先に予算アップの交渉を課長に依頼するから。もし駄目でもなんとかギリギリのラインでしょ。それにこの客先は先の需要が見込めるから、今回は何としてでも成功させないとね。進藤さんが手を尽くしてこれならしょうがないでしょ」

「わかりました。では、先行してこの金額にて発注をかけてもよろしいでしょうか。実は既に納期が危険な状況で」
「うん、お願い。予算の件は任せて。むしろ納期を最優先にして貰った方がいいから」
「わかりました。ありがとうございます」
いえいえ、どう致しまして。それじゃ課長へ交渉依頼をしようかな。
「課長、竹さん、ちょっと今いいですか？」
２人を打ち合わせルームに呼ぶ。
竹さんはちょうど環ちゃんに指示を出していたところだったようだが、こちらに来てくれた。
「オープン企画なんですが、予算オーバーしました」
金額表を２人に渡す。
「１２％か、仕入れとしては厳しいな」
「そうだねぇ、ギリギリいけると思ってたんだけどねぇ」
２人とも難色を示す。
「ええ、俺もそう思ってたんですが、価格高が相まってこれ以上は厳しいそうです」
「やっぱりこれ以上は難しいかな？」
「はい。進藤さんが手を尽くしての結果ですから。俺や課長が出ても変わらないと思います」
「そうかぁ、それにしても１２％は厳しいね」
竹さんが苦虫を噛み締めたような顔をしてる。課長は腕を組んで考えてる様子。
「ですが、これで行きます。粗利の問題はありますが、今回だけは無理してでも行った方が得策と判断しました」
２人が無言でそれぞれ考え込む。重たい空気を払拭したのはやっぱり課長だ。
「よしっ！わかった。交渉してこよう。最悪の場合、取れなくてもこの次で取り返せばいいしな。竹はどうだ？」

「しょうがないねぇ。だからと言って質や数を下げるなんて出来るわけないし。ロクちゃん納期は大丈夫なの？」
「実は既に危ないです。さっき進藤さんに発注をお願いしました。進藤さんの事なんで手遅れって事は無いと思いますが」
「なら、余計にこれで行こう。竹もいいな。ロク、納期フォローを頼むぞ。なんとしてでも予算をぶん取って来てやる」
「はい。よろしくお願いします」
　気になっていたのか打ち合わせルームから出るとすぐに進藤さんと目が合った。表情には出てないけど心配してたのかな。微笑みながら手でＯＫを作る。するとほっとしたのか軽く会釈を返してくれた。別に進藤さんの責任じゃないのにね、生真面目な人だ。
　打ち合わせが終わって席で一息付くと、ちょうど１２時になっていた。さてと、お昼はどうしよっかなぁ。いつもなら「おい、ロクも行くぞ！」って強引に連れて行かれるのだが、課長は早速客先へ交渉しに行くみたいで、外出になってる。誰かいないかなぁっと周りを見渡すと既に誰もいない。しょうがない、一人で適当に済ませるか。近くの弁当屋にしようかなぁっと悩みながら部屋を出たところで、
「草野さん、一緒にどうですか？」
　廊下にいた進藤さんが声をかけてきた。
「あれ？みんなと行ったんじゃないの？」
「行こうと思ったのですが、あそこのラーメンに行くとの事で、やめておきました」
　あそこのラーメン。すごく味が濃くて、スープもどろどろしてるラーメン屋。俺もあまり得意じゃないんだけど、竹さんと高浜さんが異常に好きで、環ちゃんと圭介君が一緒なら余計に行きたがるだろうな。
「なるほどね。それじゃ何にする？弁当屋に行こうかと思ってたから当ては無いけど」
「なら、スープカレーなんていかがですか？」

「あぁ、この前出来たところね。いいよ、そうしよっか」
と言うわけで、進藤さんと向かう。店の前まで来てみると若干の待ちがあるみたい。
「どうする？待つ？」
「そうですね、この時間ですとどこもこんな感じでしょうから」
んじゃ、待とうか。
「にしても今日は暑いねぇ。もうすぐ梅雨だからって今朝、自分から言ったばかりだけど」
「そうですね、今年は平年より暑いみたいですよ」
「そうなると夏が悲惨だねぇ。海でバーベキューなんて言い出さなきゃよかった」
進藤さんが横でクスリと笑う。
「仕方ありませんよ。それにしても相変わらず課長と仲が良いですね」
「進藤さんまでやめてよ、気持ち悪い・・・」
そうこうしていると店の中に案内され、適当に注文をする。
「あっ、そうだ。さっきはありがとね」
おしぼりで顔を拭きながらお礼をする。この前、早苗さんにやめた方がいいと注意されてたっけ、顔拭くの。気持ちいいのになぁ。目の前の進藤さんは何の事だかわからないのか、疑問符を浮かべている。
「お披露目会の件、助かったよ」
「いえ、お礼を言われるような事ではありませんよ」
「そんな事無いよ。助かった事は事実だから。自分からは言い出せる話じゃないからね」
あの時の盛り上がりに水を差すような事は出来るだけ避けたかったからね。
「草野さん、困り果てた顔をしてましたからね。そう言えばご兄弟はいらっしゃるのですか？」
「いないよ、一人っ子だから。どうして？」

「なら余計に大変ですね、突然女の子と一緒の生活を送るなんて」
進藤さんの話の途中で注文の品がテーブルに届けられた。
「いただきます。そうなんだよ、でも課長の奥さんが何かと気にかけてくれるから大助かりなんだけどね。男やもめに花が咲いたって感じだけど、花の手入れなんか今までした事ないからさ」
キノコなら生やした奴を知ってるけど。
「娘さん、小夜さんは可愛いですか？」
「そりゃね。贔屓目を抜いても可愛いと思うよ。それに今時あそこまで躾された子も珍しいんじゃないかな。炊事洗濯が出来て、俺に何一つさせてくれないんだもん。まだ小学生なのにさ、嫌に落ち着いてるって言うか大人びてるって言うか。それで色々と気が利くんだよ、ただ気を使いすぎる節があるからちょっと心配だけどね。後はすごい頑固。もうびっくりしちゃってね、この前だって・・・あっ、ごめん」
またしても進藤さんはクスクスと笑う。
「草野さんがそんなになるって事は、相当可愛いんですね。夏が余計楽しみになりました。ちょっと嫉妬しちゃいますよ」
「いやぁ、恥ずかしい・・・。まだ3日目なのにね」
相手が進藤さんでよかった。これが他のメンツなら何を言われていたか・・・、想像するだけで寒気がする。
食事も終えて、お店を出る。もちろん払いは俺。またもや会計戦争が勃発したのだが、今回は俺が上司って事になるので早期集結に終わった。お店を出て会社に戻っている道中、進藤さんに、
「私で力になれる事があれば遠慮せずに言って下さい。私もお手伝いが出来れば嬉しいですから」
と有り難いお言葉を頂戴した。俺の周りはなんて良い人ばかりなんだろう。恵まれすぎて怖くなるよ。

3日目　3（後書き）

寝勒「ラーメン自体は嫌い？」
進藤「嫌いでは無いですよ」
寝勒「じゃあ照り焼きは？」
進藤「？。強いて言うなら好きですよ」
寝勒「そっか、中より米か」
進藤「照り焼きとテリーは別物です！」

3日目　4

会社に戻り、いつも通りの午後が始まる。特に目立ったトラブルもなく、平穏な午後を過ごしていた。と思っていたのだが、１６時を廻ったぐらいに課長が帰ってきた。

「戻ったぞー」

「お疲れさまです。いかがでしたか？」

課長は机に荷物を置き、勢い良くどかっとイスに座る。

「俺を誰だと思ってんだ！？恵美ちゃん、１５％まで行けるからな、後頼むぞ！」

はぁ？何ぼったくってきてるの、この人。ほら、進藤さんも目が点になってるし。

「課長、さすがにそれは取り過ぎじゃないです？いえ、無いよりかあった方がマシですが・・・」

「いやな、どうせ値切られると思ったから仕入れ値の１５％ぐらいを提示したらよぉ、話が弾んで気が付いたらそのまま承認って訳だ」

「どうして初めの段階でその予算を貰ってこないのかねぇ」

確かに、竹さんの言う通りだ。その予算で通るならもっと質を上げられた気がする。

「だよなぁ、俺も不思議でしょうがねぇよ。だから第１の奴らは無能なんだよ」

もともとこの案件は第１企画部から受け継いでニカイチでやる事になった。と言うのも、大分前の竹さんが製作部にいた頃、竹さんが担当してえらくその仕事を気に入って貰った為だ。そしてその客先が飲食部門を立ち上げるので、まずは第一号店のオープン企画の依頼を第１企画部で受けて事前交渉まで終わった後、竹さんの指名があったのでその後をニカイチで引き継いだという訳。初回のプレゼンでＯＫを貰い、いざ諸々の手配をしたら予算オーバーして課長

に追加予算の交渉を依頼したのだが、ぼったくって帰ってきた結果となった。
「おい、ロク。第1の奴らに伝えておいてくれ。特にいかに自分達が無能かを強調してな」
相変わらず企画部の人たちが嫌いらしい。元々課長のこれも原因で第2企画部が立ち上がった訳なんだけどね。
「別に強調はしませんが、振り元なので結果だけ報告しておきます」

「相変わらずの平和主義者め」
「相変わらずの好戦主義者に言われたくありません」
課長はケッ！っと横を向いて携帯をいじり始めた。あーあ、へそを曲げちゃったかな。まぁいいや。そのうち戻ってくるでしょ。さてと、仕事をしましょうか。再び机に向かうと、
「おい、ロク。ちょっと来い」
なんだよ、せっかく人が仕事をしようとしてる時に。あんたは人の邪魔ばかりするなぁ！なんて言えるわけないけど。んじゃ、呼ばれたので課長の元へ
「ちょっとこれを見てみろ」
若干、顔がニヤニヤしながら俺に携帯の画面を向けてくる。
『Ｓｕｂ：断られた。
ロクちゃんが夕食の買い物の事忘れてるかもしれないから、さっき小夜ちゃんをスーパーに誘ったの。そうしたら断られちゃった。もしかして私、嫌われてる？』
「えーっと、これは？」
「早苗からだ」
あぁ、うん。俺が原因だな。小夜ちゃんは理由を言ってないのかなぁ・・・。にしてもあんたはニヤニヤ気持ち悪いな。しょうがない、課長に伝えてもらうか。
「実は今日帰ったら小夜ちゃんと一緒にスーパーに行く約束をしてるんです。だから決して早苗さんを嫌ってる訳じゃありません。き

っと小夜ちゃんは俺との約束を忠実に守ってるだけで、悪気は無いんですよ。小夜ちゃんが理由を言ってないみたいだから早苗さんに伝えてもらえませんか？むしろ朝の段階では早苗さんにスーパーの場所を聞こうとしてました。とも」

課長はまだニヤニヤしてる。

「お前はデートを断られた中学生の子供かってな」

いや、その例えは全然わかりません。まぁでも、早苗さんには後で俺からもメールを送っておこう。お気遣いありがとうございます。言葉足らずな小夜ちゃんですが、よろしくお願いしますって。さてと、仕事をしましょうかね。

その後は営業から正直めんどくさい仕事が舞い込んできたりしたのだが、時計を見れば既に１８時に。ニカイチの約束事その３に１９時までには全員帰れって項目がある。それは課長が「残業をしてまでやらなければ終わらない仕事は人が足りてない証拠だ」って事で、当初は定時の１７時半だったのだが、さすがにそれは仕事に差し支えがあるって事で１９時までになった。んじゃ、小夜ちゃんとお出かけしなきゃ行けないから帰ろうかね。

「それじゃ、お先！」

ってまずは課長が出ていった。それを皮切りに、

「ちーっす」「お先に失礼します」「おっつかれさっまでーす！」

「じゃあね、ロクちゃん」「草野君、また明日」

みんなぞろぞろ出ていく。やべぇ、みんなに置いてかれた。つっても実は最後までいるのはいつも俺なんだけどね。

戸締まりを確認して、みんなのパソコンやらプリンタやらが消えてるかどうか確認して、エアコンを消して、電気を消してっと。さてと、それじゃ帰ろうかね。

エレベータでＢ２へ。このビルの地下２階と３階が駐車場になってて、ニカイチ用はＢ２のエレベータのすぐ近くにある。車通勤は俺と課長しかいないけど。たまに飲みに行くときは車をそのまま置いていけるからありがたい。

オンボロカーに乗り込み出発する前に小夜ちゃんに電話を掛ける。1コール、2コール、3コール、『・・・・・・はい』
「もしもし？小夜ちゃん？今から帰るんだけどね」
『・・・はい』
「後、４０分もしないうちに家に着くんだ。だからそれぐらいに降りてきて。上に行くのめんどくさいからさ」
『・・・はい』
「それじゃ、よろしくねぇ」
『・・・・・・はい』
電話を切る。小夜ちゃん、はいしか言ってないよ。まぁいいや、そっちの方が小夜ちゃんらしいっちゃらしいかな？
小夜ちゃんに連絡をしたから後は車を走らせるだけ。夕方になると道も混み始めるから大体４０分を見ておけば帰れる。ビルのスロープを上がり幹線道路へ。うーん、今日はいつもより混んでるなぁ。信号を2回やり過ごす場面がちらほらと。まぁでもぎりぎり間に合うかな？でもしまったなぁ、小夜ちゃんには４０分過ぎてからって言っておけばよかった。
結局、道が混んでいたのも初めだけで、後半からはスムーズに流れて、マンションの傍に着いたのは結局３５分ぐらいだった。予定よりも若干早かったがマンションのロビーを見ると既に小夜ちゃんは待っている。俺のオンボロはすぐに見つかるようで、マンションの下につける前に表に出てきて、横につけたらすぐに助手席へと座る。潜入捜査の時はこの車は使えないな。そんな事はしないけど。
「お待たせ。もしかして結構待ってた？」
隣でシートベルトをしながら、
「いえ、そこまで。待つのは嫌いじゃないから」
そう言えば、ファミレスでも待つって言ってたな。辛抱強い子なのかな。んー、あれ？スカート？？確か今朝はチェックのシャツにジーンズだったような・・・。あれ？それは昨日だったか？まぁいいや。人の記憶なんて曖昧なもんだからね。

「よしっ！じゃあ行こうか」
隣で頷いたのを確認して車を走らせる。むしろ歩かせるって言葉が似合うかもね。
スーパーは結構近くにあって、坂を下った大きな通りにある。歩くと１０分ぐらい、車だとちょちょいのちょいの距離。ただ、両手に荷物を抱えてこの坂を１０分上るのはちょっと辛い。近くでも車で行ってしまう。だから今朝は一緒に行こうって話をしたんだけどね。そしてあっと言う間のドライブによって到着。
「着いたよー。さぁて、何を買おうかなぁ」
小夜ちゃんは黙って車を降りて、車の横で俺が降りるのを待ってる。はいはい、ごめんね、すぐ降りて２人で自動ドアをくぐる。俺がカートを引っ張り出して小夜ちゃんがカゴをカートに乗せる。そして俺を見上げて傍に立ってる。
「どうしたの？行かないの？」
何のリアクションも無く、俺を見つめてるだけ。
「じゃあ、行こうか。小夜ちゃんが選んでカゴに入れてね」
そう促して店内へと進む。そうすると小夜ちゃんは俺に付いてきた。うーん、何がしたかったんだろう・・・。まぁいいや。
なんで、スーパーのレイアウトってどこも似たような感じなんだろう。入ってすぐに果物売り場があるから、ついついリンゴを買ってしまいそうになる。適当に果物を見てると、小夜ちゃんに置いて行かれそうになる。待ってよ、小夜ちゃん。
ってかね、小夜ちゃんすごい。なにがすごいって買うときにちゃんと選ぶの。キュウリは手に持って痛いぐらいの奴、レタスは俺に二つ持たせて「どっちが軽い？」って。それで「いいトマトが無い」とか言って結局買わなかったり、すごい泥付きの里芋とか、ネギだけで３種類買うの。キャベツは一玉買うから、「そんなに使う？」って聞いたら、「剥いて使う」だって。魚は「目がだめ」とか言ってるし、イカとか触ってるし。肉は「合い挽き肉が高い」って。卵なんて賞味期限を見て一日でも長いのを選んでるし。いやぁ、お見

逸れしました。俺なんてどれも腹に入れば一緒とか言って、適当に買ってたからなぁ。結構買い込んだんだけど、小夜ちゃんに聞いたら、一週間分ぐらい買った、との事。我が家の冷蔵庫が無駄に大きくてよかったよ。

2人で両手いっぱいに買い物袋を提げて車に戻る。さてと、どこで食べて帰ろうかな。

「小夜ちゃん、何食べたい？」

「なんでもいい」

「なんでもいいかぁ。パスタでいい？」

頷く小夜ちゃん。なんか今日はいつにも増して無口だなぁ。まぁいいや、晩御飯を食べに行きましょうか。

ちょっと離れた絵の具みたいな名前のお店へ。この店はプリンとかのデザートが有名で、よく手土産なんかにプリンを貰う。そう言えば先週も課長が貰ってきて、みんなで食べたな。環ちゃんがはしゃいで竹さんの分も食べてた気がする。もちろん竹さんは席を離れていてプリンの存在自体知らなかったんだけど。

店に入るとすぐに案内され、メニューを広げる。一通り眺めて小夜ちゃんも見終わった頃に確認をする。

「小夜ちゃんは決まった？」

メニューに目を落としながら首を振る。あれ？めずらしい。まだ決まってないんだ。んじゃ、もうちょっと待とうかな。

・・・・・・。しばらく待ってみたけど、ずっとメニューを見比べて悩んでるように見える。

「どうしたの？迷ってるの？」

今度は目だけを俺に向けて、ちょっと戸惑いながら素直に頷く。ほぉ、これはこれは・・・めちゃめちゃ可愛い。普段は勝気そうなのに、ちょっと弱い感じで上目遣いに頷くなんて・・・。意識してないだろうから余計に可愛く見えるんだよねぇ。

「どれで悩んでるの？」

メニューを指差して教えてくれた。ベーコンとブロッコリーのチ

ーズクリームソースとペスカトーレ。なるほど、クリーム系とトマト系か。じゃあねぇ、
「なら、このペアデザートセットにしよ。小夜ちゃんは後、サラダと飲み物とデザートを選んでね。ちなみに俺はクリーム系なら何でも良かったから、気にしなくていいよ。一緒に半分づつにしようね」

そのまま目線を俺に残したまましばらく悩んでるみたいだったけど、納得してくれたのか諦めたのか、サラダを選び始めて、生ハムサラダを指し、
「これでいい？」
「うん、いいよ。デザートと飲み物は何にする？」
すぐに決まったみたいで、店員さんを呼ぶ。すいませーん。
「はい、お待たせしました。ご注文はお決まりですか？」
いえいえ、全然待ってませんよ。
さくっとパスタとサラダを伝え、小夜ちゃんはプリンの上にフルーツが乗ったのと、アッサムティ。俺は北海道ティラミスとホットコーヒーを注文する。
いやぁ、それにしてもいいものが見れたなぁ。この先もこんな表情してくれるんだろうか。これで見納めだったらちょっと悲しいな。

3日目　4（後書き）

寝勒「パスタとスパゲティの違いって何？」
小夜「スパゲティはパスタの種類」
寝勒「へぇ、じゃあマカロニは？」
小夜「それも仲間」
寝勒「なるほどね、じゃあうどんは？」
小夜「日本のパスタって言われてる」
寝勒「なるほど、なるほど」
小夜「あと、餃子の皮も」
寝勒「まじで！？餃子って日本のパスタなの！？」

小夜「わたしの説明がおかしいの？」

3日目　5

忙しそうに動き回っている店員さんを眺めながら注文の品が届くのを待つ。相変わらず2人の間には会話がないんだよねぇ。って言っても小夜ちゃんから話題を振られる事が今まで無いってだけだけど。別に俺も無言が嫌いって訳じゃないからいいんだけどさ。それじゃ早速話題を振りますか。

「小夜ちゃん、学校はどうだった？」

厨房の方を眺めてた視線を俺に向ける。きっと答えは普通って返ってくるよ。

「普通だった。みんなに囲まれて大変だったけど」

おお！一言で終わらなかった！奇跡だ！奇跡が起きたぞー！！

「そうかぁ。転校生は人気者だからね。みんなに何を聞かれたの？」

「どこから来たの？とか、部活は何をしてた？とか、好きな芸能人はだれ？とか」

あぁ、小学生らしいなぁ。

「それで、なんて答えたの？」

指を順に折りながら、

「隣の県。やってない。テレビ見ない。聞かない。好きじゃない。そんな事無い。・・・後は憶えてない」

えーっと、質問がわからない答えがあるんですが、気づいてるのかなぁ。それともわざと？それにそのまま答えたのかなぁ。すごいぶっきらぼうなんだけど・・・。

「そのあと、クラスの人が学校を案内してくれた。でも一回で憶えれなかった」

そうそう、あれって絶対に憶えられないよね。それをわかってて案内してるのかなぁ。たぶん、してないね。見取り図を渡されてもわかる訳ないよ。

「そうだよねぇ。俺なんか大学生になっても教室の場所とかわからなかったからね」
それ故に何度講義に遅れたことか・・・。代返を常に頼んでたから何とかなったけど。ねぇ、小夜ちゃん。その目は何？
相変わらずの無言で俺を見てる小夜ちゃんを横目に、まずはサラダとガーリックトーストが届けられた。小夜ちゃんはそのサラダを小皿に取り分けて、俺に差し出してくれる。
「ありがと。小夜ちゃんもいっぱい食べてね。はい、フォーク」
小夜ちゃんの分が取り分けられたのを待ってフォークを渡す。生ハムかぁ、こいつをメロンに乗せた人は何を考えて一緒に食べたんだろう。と言うより前菜にメロンを持ってきたシェフは何を考えて生ハムを食べようと思ったんだろうか・・・。プリンに醤油をかけた人とかね。しかし生ハムってなかなかフォークに刺さらない。小夜ちゃんは器用に生ハムとレタスとをフォークで刺してる。すごいなぁ、俺も見習わなくては。・・・・・やっぱり無理。横からすくってそのまま口へ。うん、塩気とハムでグニュグニュがするねぇ。そんな感じでサラダを頂いたところで丁度パスタも出てくる。
「よし、メインディッシュのご登場です。スプーンはいる？」
「いい」
「すごいねぇ小夜ちゃん。俺はスプーンが無いと上手に食べられないよ。行儀が悪くてごめんね」
首を振る。なんか俺の方が子供だよなぁ。まぁいいや。
「では、好きなだけどうぞ。俺も適当に頂くからさ」
フォークを上に向けて頷く小夜ちゃん。取り皿に両方を2口分ぐらい取り分けてちょっとご満悦。でもなんか今日は硬いんだよねぇ、表情が。どうしたものか、取り合えず俺もまずはペスカトーレから頂く。目の前の誘惑には勝てません。うん、魚介類。アサリとイカとエビ。トマトソース。ペスカトーレだね。それじゃクリームの方も頂きますか。うん、ブロッコリー。
それぞれ俺が半分ずつぐらい食べたあたりで小夜ちゃんはフォー

クを置いた。
「ごちそうさまでした」
ありゃ、そんなに食べてない気がするけど小食だったか？・・・・・・・そうだったね。
「満足した？」
「うん」
頷きながら返事を返してくれた。よし、それじゃ残りをさらえましょうか。1口、2口、3口。はい、ごちそうさま。
俺が食べ終わったところで飲み物とデザートが届く。紅茶は2杯分ぐらいあるんだね。小夜ちゃんは紅茶ポットから茶漉しを通して注ぎ、まずはストレートで一口飲む。そしてプリンの上のフルーツを順に食べて頬が微妙に緩んでいく。やっぱり甘いものは好きなんだねぇ。俺もティラミスを1口。すげぇ、牛乳だ。2口目で若干の飽きが・・・。もともとそこまで甘いものが好きって訳でもないんだよね。コーヒーで口を整えて顔を上げると、小夜ちゃんは既にプリンも食べて器が空っぽ。それじゃ、
「食べ掛けでよければこれもどう？お腹いっぱいになっちゃたからさ」
俺をしばらく眺め、そして目線はティラミスへ。小夜ちゃんが長考に入った。無表情のまま全く目線すら動かさずに約30秒。そして目線を俺に戻して頷く。太る事と葛藤してたんだろうな。そんなに細いのに気にしなくてもいいと思うんだけど。
ティラミスを小夜ちゃんの前に差し出す。ちょうど紅茶も空になったみたいで、2杯目を注ぎ今度はミルクティーにしてる。へー、そういう楽しみ方も出来るんだね。ずっと茶葉が浸ってるから濃くなってるんじゃないか心配だったけど。
ゆっくり一口ずつ味わってるみたいで、でも早々にティラミスが消えた。うん、今度小夜ちゃんを連れてパフェを食べに行こう。それを眺めてるのはなんか俺も幸せだ。遠くのデザートで有名な店にドライブがてら行ってもいいよなぁ。あっ、そうだ。ニカイチの話

をするのを忘れてる。
「小夜ちゃん、7月なんだけどね」
「うん」
不思議そうな顔をして、先を促してくれる。
「職場の人たちと海でバーベキューをしようって話になったんだ。言い出したのは課長だけど、その後に小夜ちゃんの話が出てね。みんなが小夜ちゃんに会いたいって事で7月の連休にバーベキューをする事になったんだ。それもなぜか1泊の小旅行になっちゃって。課長んとこもみんな来ると思うんだけど、俺の会社の人と顔を合わせなきゃいけなくて、もちろんみんな良い人なんだよ。でも知らない人達と出かけるのは嫌じゃない？」
頷く。やっぱりかぁ、ちょっと人見知りするのかもって思ってたけど、嫌なんだね。しょうがない、明日不参加を伝えないと。
「・・・・・・嫌じゃない」
あーあ、みんなに色々言われるんだろうなぁ・・・。え？
「いいの？」
再び頷く。
「嫌じゃないし嫌いじゃない」
うつむいて、ミルクティーを眺めながらを答える。
「そっかぁ、よかったぁ」
「・・・得意じゃないけど」
「いいよ、別に愛想を振りまかなくても。気を使う相手でもないし、向こうも気を使ってこないだろから」
特に・・・進藤さん以外ね。
「でも本当によかったぁ、小夜ちゃんそういうの嫌いそうだったから心配したよ。もちろん嫌なら嫌って言ってね。小夜ちゃんが嫌ならちゃんと断って来るからさ」
「でも海は初めて・・・・・・」
「あっ、そうなの？行ったことないの？」
小夜ちゃんは頷いて、最後の紅茶を飲む。

「そうかぁ、それじゃ水着やなんかも買いに行かないといけないね。俺は全然わかんないから早苗さんにお願いしようか。きっと可愛いのを選んでくれるよ。さてと、そろそろ行こうか」
そう促して会計を済ませてお店を出る。小夜ちゃんは海に行った事がないんだって。初めて見る海はどんな感じに映るんだろうか。楽しんでくれるといいなぁ。うん、きっとニカイチのメンバーを見てるだけで楽しいと思うんだよね。きっと竹さんと圭介君がはしゃぐと思うし。それに加奈ちゃんも一緒だろうから、飽きることは無いと思うんだよね。

車に乗り込んで無言の時間が流れる。車は幹線道路をゆっくりと走り、外の電飾がまぶしい。今日一日を振りかえって、ちょっと気になった事があるんだよね。違和感というか何と言うか。丁度信号待ちで止まったので、直接確認してみる。
「小夜ちゃん」
前を向いていた顔をこちらに向ける。
「無理しなくていいんだよ。いつも通りの小夜ちゃんでいいからね。無理に話そうとか、無理して俺の気を使わなくてもいいんだよ。新しい学校も始まったし、せめて俺の前では普通でいてね」
話し終わると信号が変わり、俺は前を向いて車を走らせる。
俺の話を聞き終わってしばらく俺を見ていたと思ったのだが、気が付けば反対側を向いて外を眺めてる。表情が伺えないから、お門違いだったかな。まぁいいや。俺の勘違いだったらそれはそれは問題ないからね。
なかなか回転数の上がらない、軽いエンジン音を聞きながら街中を走る。家に着くまでの短いドライブ。2人の間には沈黙しかないけど、でも俺はこの子と一緒にいるだけで心地良いと思い始めている。小夜ちゃんも居心地が悪くなければいいな。小夜ちゃんの学校も始まり、こうして2人の不思議な、本当に不思議なところから始まった生活が幕を完全に開けた。

3日目　5（後書き）

寝勒「スプーンが無いと巻けません」
小夜「・・・・・・」
寝勒「でも、頑張ってフォークだけを使います」
小夜「・・・・・・・」
寝勒「この際なので、巻かずに食べます」

小夜「・・・目的はなに？」

梅雨　1

気象庁からの梅雨入り宣言からはや一ヶ月。もうすぐ梅雨明け宣言があってもおかしくないのだが、外では小雨が降っており、野球部と思われる元気な少年たちが元気に校庭を走っているかけ声が聞こえる。背の低い木のイスと背の低い木の机に座り、教室を見渡す。後ろには習字が張られ、その文字は『大空』。紙からはみ出して大胆に書かれたものや、綺麗にまとまっているもの、『大』の文字だけ異常に大きく『空』の文字が追いやられているもの、全体的に右に偏っているものと様々だ。

俺は今、教室で俺を呼びだした本人を待っている。女の子にこの時間に、この教室に来いと言われた。その女の子は華奢な子で、大人しい無口な子だ。一体、どんな話なんだろうと、期待半分、不安半分で待っている。すでに１０分程、約束の時間を超えているだろうか。手持ちぶさたで、なにか時間を潰せるものを持ってくればよかったと後悔し始めた頃、教室の扉が勢いよく開き、

「いやぁ、どうもどうも、本当にすみません、草野さん」

短髪でやっぱりジャージ姿の推定体育教師と思われる先生が入ってきた。

「教育委員会からでして、わざわざ来ていただいたのに、申し訳ありません」

そう頭の後ろを掻きながら目の前の席に座る。

「いえ、構いませんよ。お電話はよろしいのですか？」

「ええ、ただの確認の電話です。大した用事ではありませんよ。私でなくてもよかった内容でしたから」

そう言って、資料を開く岸本先生。

「では、早速。小夜ちゃんなんですが・・・」

半月程前、家に帰って小夜ちゃんの晩ご飯を食べ終わって、いつ

もの様に俺がリビングでゲームをやってて、後ろでそれをいつもの様に見ていた小夜ちゃんがおもむろに一枚の用紙を渡してきた。内容は保護者面談のお知らせ。希望する日時に〇をつけて提出するものだった。

すべて平日の昼から夕方にかけての日時だったので、いつでもいいから夕方に〇を付けて小夜ちゃんに渡した。夕方だったら課長に言って早退する事が出来るからだ。

だが、今週はプレゼンが3件、報告書が2件と多忙を迎え、来週早々には地域開発のコンペが1件入っていた。竹さんも進藤さんも、今回は課長までもがスケジュールに追われる形となったのだが、それでも残業規制は変わらず、一日のスケジュールが下手をすると分刻みで行動しないとすべてに間に合わないぐらいパズルを組んでしまった俺の責任でもあったのだが、そんな中で抜け出すことなんて不可能に近かった。

岸本先生も俺に気を使ってくれたのか、決まった予定は金曜日の一番最後。直前になって日付を延ばしてもらおうかと思ったのだが、どこからか課長が保護者面談の情報を仕入れおり、なんとしてでも行って来いと怒鳴り声で命令を受けた。進藤さんも竹さんも快く送り出してくれたので、少しだけ家に仕事を持ち帰るぐらいで済んだのは不幸中の幸いと言うべきか。家に持ち帰ったなんて課長が知ったら殴られるだろうな。

「・・・と言うわけで、運動面は平均より少し下なのですが、学習面ですばらしい結果を残しております。ただ、以前の学校で既に終わった内容でも無いみたいで所々基礎が抜けていると言うか、教科書の内容は網羅している様なんですけど、大事な所を教わってない感じでしたね」

「そうなんですか？」

どうも転校してすぐに小テストがあったみたいで結果は人並だったのだが、その後の授業から巻き返しがあり、ついこの前のテスト

の結果は全ての教科において満点近くを叩き出したらしい。ってか、小夜ちゃんからテスト結果を聞いてなかった。むしろ、テストがあった事すら知らなかったんですが・・・。

「えぇ、私も短いながらも色々な子供を教えてきたのですが、あそこまで理解力と応用力の優れた子は初めてですね。１を教えれば１０を理解してくれると言いますか、全ての生徒がそうならすごく教えがいがあるんですけどね」

そう言って、自傷気味に笑う岸本先生。確かにスポンジの様にこちらの言いたい事を理解してくれると教える側も楽しいからね。・・・圭介君にその事を教えてあげたいよ。

「前の学校の件も気にはなるのですが、それよりもっと気になる事がありまして」

急に真顔になって佇まいを直し、

「普段の生活、いえ別に草野さんがどうとかって話では無く、ご自宅でもそうではないかと思いますが、ちょっと人を信用していないと言いますか、必要以上に親しくならないと言いますか・・・」

うん、心当たりはある。

「クラスの中で孤立しているって訳では無いのですが、特別に親しい友達がいる訳でも無いって感じがするんです。聞けば答えるし、それなりの反応も返ってくるんですが、何と言いますか、周りの子たちもあの容姿ですし勉強面では頼りにしている所もあるみたいで話しかけたりしてお喋りしている所を見かけても一度も本人が笑っている姿を見た事がないんですよ」

それは親である俺でもそうですよ。一度だけ、たった一度だけ笑ってくれただけで。

「初めは転校してきたばかりで馴染めていないだけかと思ったのですが、すでに１ヶ月以上過ぎています。ほとんどの子は半月もあれば順応して、親しい友達が出来るものなんですけどね。子供たちはそう思わないと思いますが、本心では人嫌いなのではないかと疑ってしまいます」

やっぱりそうだったか。薄々気が付いてはいたんだ。その日、学校で何があったか聞いても、勉強した内容だったり、授業の内容ばかりで、加奈ちゃん以外の友達の話題が出てこなかった。もしかするとと思っていたけど、いざ状況を聞いてしまうと軽くショックを受けるな。

「それでも、6年生の松山さんがよく小夜ちゃんを帰りなんかに呼びに来て一緒に帰っているみたいですよ」

松山さん？えーっと、誰？あぁ加奈ちゃんか。

「そうですか、その加奈ちゃん・・・松山さんですが、実は私の上司の娘さんなんです」

岸本先生は驚いた様子で、そうだったんですかって呟いている。一番俺が気に掛けている事を先生に聞いてみる。

「やはり家庭環境の影響が大きいのではないですか？私1人しかおりませんので、母親となる人がやっぱり必要なのかもしれません」

今の正直な悩みを訪ねてみた。

「いえ、ほとんどの子供はそう言った家庭環境が一番影響を受けますが、今回の小夜ちゃんの場合はそのケースに当てはまらないと思いますね。どちらかと言うと、今までそうだったから、今でも変わらないという感じが見受けられます。草野さんのお宅での事情がどうであれ、あの子はあのまま、我々が考えるこうなって欲しいと言う理想に近くなることはないと思います。以前の状況がわかりませんので推測の域を出ておりませんが、学校には来ておりますし、悪化していないだけ草野さんとの生活は悪くないと言う事ではないでしょか。厳しい言い方になってしまいますが、ベストではなくベターと言った所だと思います。かといって草野さんがご結婚するとなるとまたしても状況が変わりますので、草野さんが無理をするだけ、小夜ちゃんにも無理が出てきます。まぁ、小夜ちゃんが求める方がお見えでしたらその限りではありませんが。つまりは小夜ちゃんが求めていない環境ならば変化を求めるのは非常に難しいと考えます。ある意味あの子は出来上がってますからね。・・・すみません、教

師としても半人前の奴が偉そうに話をしてしまいました。ただ単純に人より慣れるのに時間がかかっていて、私は無駄な心配をしているだけで、時間が解決してくれる問題なのかもしれません。勘違いも含まれていますので聞き流して頂けると助かります」
「いえ、とんでもありません。よいお話が聞けました。私としては子供を持った事がございませんので、目から鱗ばかりが落ちてしまいます」
　いい話が聞けたな。そう言った見方はやっぱり色々な子供を見てきた人だから出来る事なんだろう。多分、この先生の言う通りなのかもしれない。あそこまで色々と物事を考えられる子が、人見知りの一言で片づけられるとは思えない。
「申し訳ございません、長々と話をしてしまいました。私からは以上ですが、何かございますか？」
「いえ、私からもありません。先生、どうかあの子をよろしくお願いします」
「いえいえ、こちらこそ。草野さんの様な方が小夜ちゃんを引き取られてよかったと私は思いますよ」
「お世辞でもそう言って頂けると嬉しいですね」
「お世辞ではありませんよ。私なんかが言っても気休め程度にしかならないと思いますが」
　そう言いながら先生は席を立つ。俺も教室の出口に向かいながら、
「とんでもない。先生のような方が小夜ちゃんの担任でよかったです。私だけではジタバタと足掻くだけで状況は一向に良くならない。色々とご迷惑をおかけすると思いますが、小夜ちゃんをこれからもよろしくお願いします」
　教室の出口で深々とお辞儀をする。
「こちらこそよろしくお願いします。一緒に小夜ちゃんが素直に笑える環境を作っていきましょう」
「ええ、そうですね。それでは失礼いたします」

そう言って教室から出て、玄関へ向かう。初めは体育教師みたいで大雑把な人かと思っていたけど、実は子供の事をしっかり見てくれるいい先生だった。最近の先生にあまり良い噂がないので安心した。やっぱり情報が1方向からしかないと偏った認識になる事を改めて実感と反省を。

梅雨　1（後書き）

寝勒「クラスの中ではどんな感じです？」
岸本「小夜ちゃんは可愛いですからね」
寝勒「はぁ・・・」
岸本「クラスのマドンナって感じですよ」
寝勒「先生、若いのに古いですね」

梅雨　2

玄関を通り校門まで行くと黄色い傘を差した子供が一人、小雨の中で立っている。見たことのある傘だなぁなんて思って近くまで来るとその子はやっぱり小夜ちゃんだった。
「どうしたの？もしかして俺を待ってた？」
まだ俺に気が付いていなかった小夜ちゃんに後ろから声をかける。ゆっくりとこちらを振り返り、俺をいつもの様に見上げた後、しばらく見つめて頷く。
「そっか、ありがとね。それじゃ帰ろっか」
歩きだした俺の横を傘がぶつからない距離を保ち、一緒に歩く。
「でもかなり待ってたんじゃない？授業が終わってから時間があったでしょ？」
スーツの男とランドセルを背負った女の子が2人、小雨の中を歩く。地面の水たまりを避けながら小夜ちゃんの歩幅に合わせてゆっくりと歩く。
「図書室で時間を潰した」
俺の質問から大分時間が経ってから返事が返ってくる。この間はいつもと変わらない、小夜ちゃんの間だ。すぐに答えが返ってくる時もあるんだけど、この間が余計に心地よさを醸し出してくれている。
「そっか。小夜ちゃんは本は読むの？」
またしばらく経って、今度は俺を見上げて頷く。
「どんな本が好き？小説？マンガ？」
そう言えば小夜ちゃんの部屋に本やマンガは置いてなかったな。思い出しながら歩いていると信号に捕まった。
「マンガは苦手。小説ならなんでも」
そっか、ジャンルを問わないんだね。
「もしよかったら俺の部屋にもいくつかあるから、好きなのがあれ

ば勝手に持っていっていいよ」
　信号が青になり、また2人で歩き出す。ちょっと歩くとまた小夜ちゃんが俺を見上げて頷く。そこでちょっと立ち止まってみると雨が止んでいた。曇り空だけど、薄く雲が赤色に染まっているな。傘を畳んで、また歩き出す。一緒に歩いていると、傘を差している時よりちょっとだけ俺の近くを歩く小夜ちゃん。
「今日もご飯が楽しみだね。今晩のメニューは何？」
　すでに献立は決まっていたみたいで、
「麻婆豆腐」
　と一言だけ返事があった。
「そっかぁ、それは楽しみだね。小夜ちゃんって料理が上手だもんねぇ。そのうち俺が食べすぎでぶくぶくに太っちゃったらごめんね」

「大丈夫。いっぱい作らないから」
　なるほどね、ちゃんと量とかも考えて作ってるんだ。相変わらず抜かりない子だ。いつ嫁に出しても恥ずかしくないよ。まだ送り出すつもりは無いけど。つっても俺が教えた訳じゃないし、もし嫁に行くのなら今度は俺がうだつの上がらない恥ずかしい父親になるな。なんて考えているとマンションに着いた。
「我が家に到着っと。さぁおいしい小夜ちゃんのご飯の為に、早く家に入らないとね」
　俺がスタスタとマンションに入っていく後ろで、
「ご飯は逃げないのに」
　って小声で突っ込みが入った気がするけど気にしなぁい。
「早く来ないと置いてっちゃうよ！」
　マンションのロビーまで先に行った俺がまだ敷地にすら入っていない小夜ちゃんを大声で呼ぶ。すると小走りにこちらに駆けてきた。こうやって見るとかわいいなぁ、もう。

　夕食も終わり、小夜ちゃんが洗い物を終えてテレビを見ていた俺

のそばに来る。時計を見ると7時か。土日は休みだけど、さっさと仕事を終わらせよう。
「小夜ちゃん。俺、仕事が残ってるんだ。今日中に終わらせたいから、ちょっと部屋に籠もるね。ごめん」
いつもならこのまま一緒にテレビを見たり、俺がゲームをやって、それを小夜ちゃんが見てて、9時とか10時ぐらいにお互いがお風呂に入って小夜ちゃんは部屋に行き、俺はリビングに居たり、部屋に居たりとそれぞれ別になる。
俺がずっとリビングにいるから単に部屋に行き辛いだけなのかと思っていたけど、宿題は？って聞くと「もうやった」って。勉強しておいでって部屋に促しても「大丈夫」って頑なに拒まれた。強く言っても本人のやる気次第だから口を出さなかったのだが、結果は今日知っての通りだった。する必要が無かったか、俺が帰ってくるまでに済ませてるんだね。それから俺がゲームを始めた時も一緒にやろうと言ったら、見てるだけでいいって言うから最近はシミュレーションとかの変化を楽しむゲームを始めるようになった。路線のダイヤを悩んで組んでいると後ろからアドバイスをくれたりする。そんな生活が毎日続いていたのだが、今日だけは仕事がある。
「もし何かあったら部屋においで。別に邪魔しないでって事はないからさ。あと、絶対に仕事を家でしたって課長に言わないでね。怒鳴られるだけじゃ済まないからさ」
いつもと変わらない表情で小夜ちゃんは頷く。俺がごめんねって言って部屋に入ろうとしたら小夜ちゃんはテレビを消して自分の部屋に向かう。さてと、さっさと終わらせて土日を満喫しないとな。
部屋に戻りパソコンの前に座る。持って帰ってきたデータを読み込み、続きを作成する。本来は今日中に終わらせないといけないって仕事じゃないけど、今週の仕事量だと先行して終わらせておかないと別の仕事が入れられない。ニカイチはすでにパンク状態。そんな中で臨機応変に動けるのは俺しかいないし、仕事のスケジュールを組んでいるのは俺なので、他の人のフォローをするにしても俺に

余裕が無ければ対応できない。って事で黙々とプレゼン資料を作成する。すでに制作チームから図面やデザイン資料などを上げてもらっているから、あとはプレゼン内容の構成と当日ＰＲする内容の原稿と資料を作成する。しばらく没頭していると部屋をノックする音が。

「はーい」

すると申し訳なさそうに小夜ちゃんが入ってくる、その手にはお盆に湯呑みを乗せて。

「お茶を入れました」

「ありがとう。ちょっと待って」

切りの良いところまで来ていたので保存だけする。ちょうどいいし、休憩にするか。お茶を受け取って時計を見るとすでに9時だった。小夜ちゃんを見ると既にお風呂に入った後で顔が上気している。

「もうこんな時間か。いやぁ時間が経つのが早いなぁ。あっ、お茶がおいしい。さすが小夜ちゃんだね」

俺の部屋の真ん中でお盆を抱えて突っ立ってるから座ってもらう。物珍しそうに俺の部屋を見渡す小夜ちゃん。そっか、俺の部屋に入るのは初めてか。俺がお茶をすすってしばらく楽しんでいると意を決したように聞かれる。

「お風呂はどうしますか？」

うーん、どうしようかなぁ。このままのペースだと3、4時間ってとこだから、それから風呂に入ってって考えるとちょっと辛い。

「そうだねぇ、明日の朝に沸かし直して入るよ。今日は遅くなりそうだし」

そうですか・・・。ってなんか残念そう。さてと、お茶も飲んだことだし、続きを始めようかな。

「お茶ありがとね」

湯呑みを小夜ちゃんに返して、またパソコンに向き直そうとしたところで、

「あっあの！」
って、小夜ちゃんに止められた。
「ん？なに？どうした？」
しばらく、あの・・・とか、えっと・・・とか言い辛そうにしてる。このまま沈黙で待っていても良いんだけど、さすがに小夜ちゃんが可哀想だからイスからおりて小夜ちゃんと同じ目線に合わせて、
「どうしたの？」
って促してみる。またしばらく言い辛そうだったけど、意を決したように。
「ここに居ていいですか？絶対に邪魔はしないので」
って真剣な目で聞いてくる。なんだそんな事。聞くまでも無いのに。
「そんな事ぐらい全然構わないよ。ただ相手できないけどいい？」
力一杯頷く小夜ちゃん。何を一生懸命になってるんだか。
「暇だろうから適当に本でも読んでていいよ。気に入ったものがあればいいんだけどさ。それじゃ仕事をさっさと済ませちゃうね」
またパソコンに向かい、さっきの続きをはじめる。小夜ちゃんはしばらく俺を見ていたのだが、暇になったらしく本を読み始めた。よしっ！目標は2時間だ。それまでには何としてでも終わらせよう。どうせプレゼンをするのは課長なんだし、俺がここで頑張って原稿を作っても、どうせ原稿通りには進めてくれないんだしさ。いつも行き当たりばったりでこちらが用意した資料を全て使ってくれるような人じゃない。だけど、その場の乗りで臨機応変にＰＲするので、毎度毎度受けがいいんだよね。よく課長を感覚で生きている人と間違われがちだが、それは全然違う。あの人は観察力が長けている理論派で、観察された事象から一瞬にして理論展開をして攻めていくので、初対面や普通の人は直感に頼った感覚派と勘違いしやすい。親しくなれば親しくなる程、理論的思考が目立ってくるのですぐにはわかり辛いのかもしれないけど。その為、こちらとしてはどんな

ケースでも対応できるように資料を作成しておかなくてはならない。ニカイチのプレゼン勝率の５０％は課長、４５％は企画立案および製作内容、そして残りの５％で資料作成力となる。おかけで俺と竹さんはプレゼンやコンペの度に資料作成に追われる事となるのだが。

ある程度まで完成して、後は細かな校正を入れる段階で一旦休憩を挟む事とする。ちょっとは小夜ちゃんの事も気にかけてあげないとね。時計を見ればもう１１時。目標をすこし超えてしまったな。でもまぁ後３０分程で終わるか。さてと、小夜ちゃんはっと後ろを振り返ると・・・。

俺のベッドにもたれ掛かって、本を開いたまま寝息を立てている。さすがに１１時は遅い時間だったか。もうちょっと早くに切り上げられればよかったな。布団をかけてあげてしばらく寝顔を見てると何か寝言を言う。何を言ったのか分からなかった。聞き取れなかったから近づいて良く見てみると・・・・・。俺は心を鷲づかみされ、時が止まった。

小夜ちゃんの寝顔に１粒だけつたう跡が。

その瞬間、今日の言葉がよみがえる。

――本心では人嫌いなのではないかと疑ってしまいます――

いや、この子は人嫌いなんかじゃない。ただ必要以上に人と接しようとしていないだけなんだ。きっと本心は人一倍寂しがり屋なんだよ。

あの日、俺の家のドアの前に１人で立っていた時。あんな顔をする子が人嫌いな訳が無い。

一生懸命、無理をしてコミュニケーションを取ろうとしていた子が人嫌いな訳が無い。

毎晩、時間ぎりぎりまで俺と一緒に遊んでくれる子が人嫌いな訳

が無い。
半日、時間を潰してまで俺を学校で待っててくれる子が人嫌いな訳が無い。
今ここで眠っている子が人嫌いな訳が無い。

時間が解決してくれる様な代物でもない。
きっと、この子の中で何かがある筈なんだ。
心を閉じ込めようとする、笑顔を抑える何かが。
俺はこの子をわかってあげられるのだろうか。
この子に満面の笑みを与えてあげられるのだろうか。

俺、生まれて初めて後悔した。自分の非力さと無力さを。

梅雨　2（後書き）

寝勒「なるほどってこう言う事か」
小夜「？」
寝勒「最高にハイって奴だね」
小夜「？？」
寝勒「ザ・ワールド！」
小夜「いつから人間をやめたの？」

1年目　夏1

「忘れ物は無い？水着はある？浮き輪も持った？あと必要な物で忘れちゃ駄目なのは・・・」
ボストンバックの中身を開けて、中身をチェックする。
「多分、荷物も大丈夫だね。よしっ！それじゃ下で課長を待とうか」

夏の爽やかなワンピースの下にジーンズを履いてつばの大きな麦藁帽子をかぶった少女と、Tシャツにハーフパンツでサンダルを履いた優男が荷物を持って玄関を出る。
今日は7月3連休の初めの日、小夜ちゃん達は夏休み初日。今から小夜ちゃんのお披露目会と言う名の旅行に行くから、もうすぐ課長が迎えに来てくれる時間だ。
お披露目会はその後、異様な盛り上がりを見せ社員旅行も兼ねよう等と訳のわからない話になって行き、沖縄旅行に行く事となった。しかも予算のほとんどを会社持ちで。どうやったらそんな無茶が通るのかわからないが、課長が予算を分捕って来た結果だ。ニカイチのみんなも、設立以来はじめての嵐のような仕事を全て捌ききって、地域開発コンペにも勝利し、グループ会社にその仕事を移管した後だったので、妙な高揚感があって「細けぇ事はいいんだよ」の課長の一言で終わってしまった。
と言うことで、空港まで車で行くと言う課長一家に便乗するため、マンションのロビーで待っていると早苗さんのワゴン車が車付けにやってきた。早苗さんの車は確かヒーローとかそう言った名前だったと思う。
「小夜ちゃーん！ロクちゃーん！おはよー！！」
後ろのスライドドアが勢い良く開き、中から加奈ちゃんが飛び出してきて、小夜ちゃんの元へ猛ダッシュ。朝の7時前から元気だなぁ。その後ろから太一君と運転席から早苗さんが出てきて、車のト

ランクを開けてくれる。俺はロビーから車まで荷物を運んでいると太一君が受け取ってくれた。
「おはようございます。わざわざ迎えに来てもらってすみません」
「いいのよそんな事。すぐそばなんだし」
「ロクさんちの荷物はこれだけです？」
「うん、後は小夜ちゃんの手荷物だけだよ。あれ？課長は？」
「助手席で寝てるわよ」
「親父は朝一番って弱いからね。いつもの時間までは動かないと思うよ。何かするにしても切り替えに時間がかかるし」
あぁ、そう言えばいつも会社に来るときは普通だけど、会社に来た時はしばらく動かないな。あれは頭を切り替えているのか。
「それじゃ、行きましょうか。加奈、行くわよ」
「はーい！小夜ちゃん隣ね！」
３列目に加奈ちゃんと小夜ちゃん。２列目に俺と太一君。助手席に課長が口を開けて寝ている。ここから空港までは高速に乗って約１時間。最近出来たばかりの国際空港でテレビでもオープン前から連日賑やかだった。なんか滑走路を見渡せる温泉があるとかないとか。
「ねー、小夜ちゃん！夏休みだよ！どうする？どうする！？かき氷食べないと！スイカ食べないと！毎日遊ばないと！あっ！お祭りがあるよ！綿菓子食べないと！たこ焼き食べないと！チョコバナナ食べないと！あとは、花火！はなび！はなびー！ロクちゃんつれてってねー！」
後ろではテンションが上がりきっておおはしゃぎ。お祭りは家からちょっと離れた河原で盛大な打ち上げ花火が上がる。この地区では最大と言われている程の規模で催されていて、毎年太一君と加奈ちゃんと3人で行ってるんだけど、でも確かお祭りはお盆だったはず。気が早いというか何というか。お盆を過ぎれば夏休みが半分終わるって知ってるのかなぁ。俺は後ろを振り向いて頷いていると、横から、

「でもお祭り行きたいなら宿題をやってからね。また去年みたいに明日からちゃんとやるって約束して、夏休みが終わる直前になって慌てても知らないから」
と、太一君が釘を差す。それを聞いた加奈ちゃんがとぼけた顔をして、
「しゅくだい？何それ、おいしいの？」
なんて言ってるし。さっきから食べる事が中心になってるよ。これだけ元気だと食べてエネルギーを補給しないといけないのかなぁ。でもまぁ、俺もお祭りは楽しみだな。屋台が並んで、花火が上がって。あの雰囲気を味わうだけでも心が躍るよね。でも、小夜ちゃんは人混みとかあの雰囲気とか嫌がるかもなぁ。
「小夜ちゃんもいこーねー！浴衣着て団扇持って！！」
「そうだね。せっかくだから一緒に行こうよ」
加奈ちゃんや太一君に誘われて小夜ちゃんは頷いたんだけど、
「でもお祭りに行った事ない。花火も見たことない」
って、ちょっと不安そうな顔をしてる。
「そうなんだー！すっごい楽しいよ！冷えて固まった焼きそばとか、リンゴ飴のパサパサ感とか、絶対に当たらないくじを引くドキドキとか・・・」
指を一つずつ折ってお祭りの魅力をアピールしてるけど、加奈ちゃん、それ間違った楽しみ方だと思うよ。誰が教えたそんな事。
その後もお祭りネタで和気あいあいと話を弾ませていると、
「おい、お前等」
と助手席から顔だけ覗かせて不機嫌な課長。寝てたのに後ろがうるさくて起きたんだな。さてと、怒鳴り声が来る前に耳を塞がないと。
「的に重りを付けた射的を忘れんじゃねぇよ！」
おい、加奈ちゃんに教えたのはやっぱりあんたか。
「さぁ、そんな偏屈な楽しみよりも、まずは今からの沖縄を満喫しましょう！ほら！」

早苗さんの一言により、みんなが外を見る。海の上に浮かんだ空港と、滑走路から飛び立ったばかりのジャンボ。遠巻きだけどでけぇ！課長、いちいち窓をあけんなよ！高速なんだから風がうるせぇ！

橋を渡り終わり、空港の駐車場へ。沖縄へのはやる気持ちを抑えつつ、車を止めて待ち合わせ場所へ向かう。課長と加奈ちゃんは抑えきれずに走って行っちゃたけど。何してんだよ、課長。俺と太一君ですべての荷物を抱え、搭乗受付前まで行くと既に全員集合していた。

竹さん夫婦と高浜さん家族、環ちゃんと進藤さんに圭介君。おい、奴らどこ行った。

「あれ？課長と加奈ちゃんは？先に来てた筈なんですが・・・」

竹さんに聞くと、

「なんかソフトクリームが食べたいって、どっか行ったよ」

だから何してんだって、いい歳して。

「ところでロクちゃん、その子？」

俺の脇に立っていた小夜ちゃんが持っていた麦わら帽子を胸の前に抱え、

「初めまして、草野小夜です。よろしくお願いします」

丁寧にお辞儀をする。やっぱりこの子は礼儀正しい。小夜ちゃんが顔を上げると真っ先に、

「きゃー！かわいいっ！！」

って環ちゃんが小夜ちゃんに抱きつき、小夜ちゃんが苦しそうにもがいてる。そして俺の肘を小突く人が、

「ロクちゃん。こりゃ、まっつぁんにリモコン投げられるよ」

なんてにやけた顔をして小声で言う竹さん。意味分かんない事言わないでください。額が痛みます。

「やべぇ！１０年、いや５年！」

圭介君も訳の分からないこと口走って、そして真面目な顔をしながら俺に、

「お父さん！」
若干斜め上から体重を乗せて、おもいっきり太股へローキック。
「ーっ！！」
床に転がって言葉も無しに悶絶してる。ごめん、つい条件反射で。
悪気はないよ、本当だよ。
「確かにベクトルが違うね。加奈ちゃんと並べばほとんどカバー出来るんじゃないか？なぁ？」
なんて、自分の顎をなでながら奥さんに同意を求めてる高浜さん。何をカバーするの？奥さんも頷いてるし。
しばらく騒いだ後、苦しそうにもがいていた環ちゃんの束縛から解放され、ふぅって一息ついた小夜ちゃんに進藤さんが傍に寄り、
「小夜ちゃんね。私、進藤恵美です。よろしくね」
って、笑顔で握手を求める。小夜ちゃんが進藤さんと差し出された手と2往復ぐらいさせて、しばらく戸惑っていたけど、握手をし、

「よろしくお願いします」
若干上目遣いに頭だけ下げる。よかったぁ、まともな人がいて。
そんな初顔合わせが終わった頃、2人してふてくされた顔で戻ってきた課長と加奈ちゃん。
「親父、どうしたの？」
って、太一君が聞く。聞くまでもないでしょ。
「ソフトクリーム10時からだってよ！ふざけてやがる！サービスがなってねぇんだよ！今すぐぱぱっと作りゃいいじゃねーか！なぁ？」
同意を求められた加奈ちゃんもうんうんって頷く。いや、ふざけてんのはあんただ。どこにこんな朝の8時からソフトクリームを食べたがる奇特な人がいるんだよ。あっ、目の前に居た。2人も。
「おい、ロク！店に行って作ってこい！」
また、無理を言いだしたよ。
「はいはい、無理ですよそんな事。諦めましょう。すぐになんでも

俺に振るのを止めてください。ところで進藤さん。時間は大丈夫なの？」
進藤さんは左腕を見て、時間を確認する。課長が何か吠えているが、高浜さんが課長を羽交い締めにして食い止めてくれているので俺は安全だ。高浜さんに感謝。でもあれは羽交い締めじゃなくてチョークスリーパー？？首に入ってるよ、そのまま落としちゃって下さい。貨物として輸送しますから。
「えぇ、ちょっと早いですがそろそろ行きましょうか。はーい！みなさん！そろそろ飛行機に乗りますよ！はぐれないようにしてください！チケット配るので無くさないで下さいね！」
ここは幼稚園か。
今回の沖縄旅行の内容を企画したのは竹さんだが、スケジュールの管理はすべて進藤さんが行うことになってる。なんでかって？ニカイチで任せられるのは進藤さんしか居ないから。まだまともな高浜さんでも課長や竹さんのわがままに流されちゃうし、他の人は論外。そして最大の理由は、みんな進藤仕切には逆らわない。だって、怒ると本気で怖いもん。
搭乗手続きをしてみんなでぞろぞろと歩き出す。若干1名は金属探知機で引っかかったままだが。圭介君、貴金属は控えめにね。
「見て見てロクちゃん！芸能人！！」
動く歩道に乗って顔をうつむかせ、手で顔を隠しながらスタスタと一人先に行く加奈ちゃん。今は何も答えられません、とか言ってるし。そして、
「これで俺も世界新だあああああ！うひょー！ちょーはえええええ！！」
動く歩道をすごい勢いで走って来た圭介君。
「あっ！こら圭介てめー！！俺より早いのは許さんっ！！」
荷物を放り投げて追いかけ始めた課長。しかし圭介君、君がそれで遊ぶと、
「こらっ！」

動く歩道の出口で先行していた進藤さんに首根っこを捕まれ、隅まで引きずられて正座をさせられる。
「あなたいくつなの？いい加減にしなさい！子供が真似をして怪我したらどうするのよ！返事は！？」
「はい、すみませんでし・・・ぷっ！」
「何笑ってるのよ！反省してるの！？」
説教をしている進藤さんの後ろで、竹さんが進藤さんに見つからないようにしながら変な顔をして圭介君をからかってる。あんたらまだ沖縄行きの飛行機にも乗ってないんだけど、テンション上がり過ぎだろ。
俺は課長が投げた荷物を拾い、みんなの後を離れて歩く。他人の振り、他人の振り。俺、知りませんよ、こんな人たち。俺の横で小夜ちゃんが強ばった表情でみんなを見てる。
「ほんと、やかましい人たちだよ」
小夜ちゃんはみんなを見てたけど、いつもの様に俺を見上げて、
「・・・たのしいね」
表情を変えずにそう感想を頂く。まぁ確かに見てて飽きないんだけど、小夜ちゃんも見た目から楽しそうにしたらいいと思うんだ、俺。そんなに険しい顔で言われてもね。やっぱりお気に召さなかったのかなぁ・・・。

1年目　夏1（後書き）

早苗「2人は初登場ね」
竹若妻「・・・・・・」
高浜妻「・・・・・・」
早苗「どうしたの？」

竹若妻&高浜妻「台詞がない・・・」

1年目　夏2

「お客様の中でお医者様はいらっしゃいませんか！？」
機内に響きわたる女性の声。
「お客様の中にお医者様は・・・」
「環ちゃん、他の人に迷惑」
「えー、一度やってみたかったのにぃ。草野さん、のりがわるいー。そこは医者は医者だけど、歯科医でもいい？って来るところぉ」
飛行機の中。ちなみにまだ搭乗したばかりで離陸すらしていない。

「タマちゃん、そこは歯医者よりも耳鼻咽喉科とかどう？響きとかいいよねぇ。いてっ！」
竹さん、あんた下ネタかよ。奥さんに頭を叩かれてるし。グーで。

「おい、竹！席がせめぇ！もっとでかくしろよ！」
あぁ、また課長が何か言い出したよ。
「無理無理。恨むなら自分の予算取りを恨むんだねぇ」
叩かれた頭を撫でながらニヤニヤしながら答える。竹さん、あなたがそんな返しをすると、
「んだと！おい、ロク！！」
ほら来た、なんだよ。
「前のシート外せ！」
それはどう考えても無理でしょ。
「俺には言っている意味がわかりません。ご自分でどうぞ。そのかわり課長は沖縄不参加になります」
「あぁ？てめぇ、なんて言った！？」
あー、めんどくさい人だなぁ。ここは一発で終わらせよう。太一君に目配せ。頷いて答えてくれる。そして、
「親父うるさい！おとなしく座ってて！！」

「お、おう・・・」
はい、終了。お互い親指を立ててサインの交換。ここぞって時の太一君だよな。
「あい、あむ、ちきん！」
「そうそう！そうやって頼むんだよ」
今度は・・・また竹さんか。またしても顔をニヤニヤさせて加奈ちゃんに何かを教えてるけど、多分機内食はどっちがいいかってやつだよな。色々突っ込み所が・・・。
「竹さん、間違ったことを教えないで下さい。加奈ちゃん、今のは忘れていいからね」
「あい、あむ、ちきん！」
あぁ、なんか気に入ってるし。
「うん、それは大声で言わない方がいいよ。特にこのハゲの人から聞いたことはすぐに忘れてね」
「ハゲてないもん、ボウズだもん。ロクちゃん酷いよぉ」
変な甘い声を出して泣き真似をしてる竹さん。３０を越えたボウズ頭のおっさんがそんなオカマみたいな事されると、
「竹さん、本気で気持ち悪いです。もうこれ以上変な事をしないで下さい。小夜ちゃんにハゲって呼ばせますよ。しかも変な英語を教えないで下さい。これは国内線なので英語で聞かれませんし、機内食も出ません」
「えっ！？出ないの！？」
次に食いついたのは圭介君。ったく、次から次へと。
「やべぇ、俺食べれると思って朝飯抜いてきたのに。ロクさん、それマジっすか！？」
「マジ。向こうに着いたら何か買ったら？」
「えーっ！腹減ったー！！誰か食べるもの持ってないっすか？ひもじい思いをしてる子がここにいますよー！」
あー、うるさいのが一人増えた。さてどうしよっかなーって考えてると急に進藤さんが立ち上がり、

「たった2時間ちょっとのフライトで出る訳ないでしょ！あなたも大人しく座ってる！もう！みんなも大人しくしてる事！周りに迷惑をかけない！！わかった！？」
一同沈黙。
「返事！」
「「「「はーい」」」」
今まで黙って聞いてた進藤さんが、とうとう怒鳴った。ふぅ、これで俺も落ち着く事が出来る。怒ると体力を使うから嫌だって言ってるけど、出来ればもっと早めに彼らを押さえつけて欲しかったな。まぁいいや、ようやく席でくつろげる。それにしても隣に座ってる小夜ちゃんがいつもと様子がおかしい。
「どうしたの？」
すでに座席でシートベルトをし、顔を強ばらせて、拳を堅く握ってる。もしかして、
「小夜ちゃん、飛行機が怖いの？」
反応無し。ひたすら足下を見て堪えてる感じ。離陸のアナウンスがあり、飛行機のエンジンが唸りをあげ始めると体をもっと強ばらせる。こういう時はどうすればいいんだろう・・・。とりあえず安心してもらうには・・・。
小夜ちゃんの堅く握りしめられた拳を両手で包み込む。すると俺が横にいる事に初めて気が付いたみたいに、俺を見て一瞬だけ驚いた顔をするが、その後は不安そうな顔をする。
「小夜ちゃん、大丈夫。俺が隣にいるから安心してね」
俺がいるから何か出来る訳じゃないんだけど、出来るだけ優しく声をかける。そうすると徐々に手の力が抜けてきた。少しは効果があったかな。そして片方の手を繋いで、
「ほら体の力を抜いて深呼吸」
俺も一緒に吸ってー、吐いてー。吸ってー、吐いてー。体が強ばってた事にやっと気が付いてくれたのか、ちょっとだけ体の力が抜けた様子。

「ほら、怖くないよ。大丈夫」
小夜ちゃんに微笑んであげると、ちょっとはましになったのか、さっきよりも表情の堅さが取れてきた。ふぅ、これで一安心かな？だけど、飛行機が動き出し、滑走路へと向かい一度停止すると、今度は小夜ちゃんのもう片方の手も動員し両手で俺の手が強く握られる。また緊張し始めたみたいだけど、この一瞬はしょうがない。機体が安定するまでしっかりと手を握ってあげて、出来るだけ余裕のある顔を心がけよう。
エンジンがさっきよりも大きな唸りをあげて機体が進み出す。座席に押さえつけられる感覚と共に一層音がうるさくなるが、その直後音が急に静かになり更に座席へ押さえつける力が強くなる。外を見れば景色が斜めになって、建物が下に動いていく。大きく旋回している様子だったが空港の全景が下の方に見える頃になって、加速感がなくなった。機体が水平になって安定したかな。
「ほら、もう大丈夫だよ」
俺の方を向いて頷いてはくれたんだけど、まだ緊張してるみたいだね。
「ごめんね、飛行機嫌だった？高いところ駄目？気が付かなくてごめん」
今更気がついても遅いんだよなぁ。今思い返せば搭乗手続きをした後あたりから小夜ちゃんの様子がおかしかったのに。父親失格。減点はカウントストップクラスだ。
前を向いたまま俯いて、ちょっとしたらまた俺を向いて首を振る。
「はじめてだから、ちょっと怖くて・・・」
そう目線だけ下にやって、ちょっと恥ずかしそう。うん、ちょっとはリラックス出来てきたかな。
「そっか。ごめんね。もっと早くに気づくべきだったよ。大丈夫？」
「大丈夫。けど・・・・・・」

再び目線だけ動き、繋いでいる手を見てる。そしてちょっとだけ手に力が入った。ん？・・・あぁ、

「うん、いいよ。これぐらい、いつでもお安いご用ってね」

これぐらいで多少なりとも安心してくれるなら、手ぐらいいくらでも繋いであげるよ。

それから約2時間。気流も安定していたのか、揺れもなく無事に沖縄上空へと飛来した。その間、環ちゃんと進藤さんはいつもの様にお菓子を食べながら和気あいあいとし、課長は爆睡。太一君と加奈ちゃんが窓の外を見て楽しんでいたし、それを早苗さんが写真を撮ったりしてた。高浜さんは息子さんと機内販売パンフレットや飛行機のおもちゃを買ったりして親子で楽しんでいる様子で微笑ましかったのだが、圭介君と竹さんが何やらコソコソと不穏な動きを見せていたのが非常に気になる。またよからぬ事を企んでるんだろうな。俺に被害が無ければいいけど。

俺たち親子は相も変わらず無口で、初めの内は緊張を少しでも紛らわせようと何の話をしたか覚えていないぐらい他愛のない話をしていたのだが、元々話し上手な訳でもないので、そのうち話のネタも尽き、やはり無言になってしまった。小夜ちゃんも極度の緊張が続く訳もないので、まぁ結果としてはいつも通りと言った雰囲気に近いものではあったのだが。

「青い空！青い海！！！招いてくれてありがとぉ！沖縄よ！！！」

「邪魔だ！どけっ！」

課長に蹴り飛ばされ、座席の間に転がる圭介君。みんながそれぞれ通り過ぎるときに圭介君を見下してからゾロゾロと飛行機を降りる。

「みんな酷いっすよぉー」

半泣きになりながら後ろから追いかけてきた。こういう時の団結力についてはニカイチの右に出るものはいない、ただの悪のりだが。

やっぱり着陸時に小夜ちゃんが再び緊張していたのだが、学習能力が高いのか離陸を一度味わっている分、多少ましになった様子で無事に地面へ降りたつ事が出来た。握られた手がちょっとだけ痛かったけど。

コンベアで流れてきた荷物を受け取り、一旦ロビーに集合する。すると、

「ヨウコソ！オキナワへ！！」

と叫びながら札を持った黒人さん。胸元には『ボブ』って名札が付いてる。たぶん、俺らを出迎えてくれたんだと思うんだけど札が『カンゲイスル！ニコイチ！』って・・・。

「進藤さん、これは？」

進藤さんは首を傾げている。って事は・・・。みんなで一斉に竹さんを見る。

「いやぁ、せっかく飛行機に乗ったんだし、外人さんの方が雰囲気が出ると思ってねぇ。旅行会社の人に頼んでおいたんだよ」

またしてもニヤニヤしながら答える。それにしても竹さんはいつもニヤニヤ笑ってるなぁ。そんな事にいちいち力を入れなくてもいいのに。よくわからない人だ。

「あい、あむ、ちきん！！」

急いで振り返ると加奈ちゃんがボブさんに大声で叫んでる。

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ａ　ｃｈｉｃｋｅｎ？」

「あい、あむ、ちきん！！」

「ＩＹＡ！　Ｙｏｕ'ｒｅ　ａ　ｃｏｗａｒｄ.　Ｉ　ｓｅｅ.」

ちょっと！なに理解してんの！？太一君が急いで加奈ちゃんを抱きかかえ回収。俺がボブさんに、Ｎｏ，Ｎｏ，Ｎｏ！って誤解を解く。大声で叫ぶ方もどうかと思うけど、わからないのをいい事に自分は臆病者ですって教える人もどうかと思うんだよね。ったく、竹さんは余計な事をしてくれる。

「腹減ったっす！何か買ってきまーす！」

「ちょっと！待ちなさい！」

進藤さんの制止を聞いてか聞かずか、荷物を俺のそばに置いて走り出した圭介君。ボブさんが人数を確認して「Ｇｏ　ｔｈｅｒｅ．」ってバスへ向かう。いやいや今１人走って行ったじゃん、足りてないでしょ。

「へい！ミスターボブ。ウェイトアミニット」

ボブさんを一旦止めると、横で進藤さんが電話をしてる。

「もしもし！？早く戻って来なさい！出発するわよ！・・・それはいいから、この後お昼を食べに行くの！いいからさっさと戻って来る！！早く戻ってこないとお昼抜きだけじゃ済まないわよ！！わかった！？」

もー。って呟きながら電話を切った直後、遠くのほうから猛ダッシュで「うおー！めしー！！」って叫び声が近づいてくる。公衆の面前で叫ぶのは止めて、恥ずかしい。

すぐに帰ってきた圭介君は最後の気力を振り絞ったのか、その後はへたり込んでしまった。さて、じゃあボブさんに出発をお願いしないと・・・。えーっと、英語は・・・。って考えてるとボブさんが、

「皆様お揃いですね、それでは行きましょうか」

おい！すげぇ綺麗な日本語が出来るんじゃねぇか！さっきまでの英語はなんだったんだよ！！って心の中で突っ込むと同時に課長もボブさんに同じ事を言ってる。・・・よかった、俺は口にしないで。ステレオでハモるとか、しかも課長とだと後でみんなに何を言われるか・・・。

ボブさんはしまった！って顔をしてから申し訳なさそうに、

「すみません、極力日本語を話すなと言われておりましたが、つい話してしまいました」

またもや一斉に竹さんを見る。

「だからぁ、そっちの方が雰囲気が出るでしょ？さぁお昼お昼っと♪」

荷物を持ってさっさと行ってしまった。竹さん、あなたの拘りが

今一つわかりません・・・。

1年目　夏2（後書き）

寝勒「日本語お上手ですね」
ボブ「えぇ、生まれも育ちも日本です」
寝勒「はぁ。フルネームは？」
ボブ「小久保茂信です」
寝勒「もしかして・・・」
ボブ「こく　ボ　しげの　ブ　です」

小夜「騙された気分なのはなぜ？」

1年目　夏3

バスに乗り込み約１０分。ちょっと早い昼食はアメリカンバーみたいな所で、雰囲気は８０，ｓアメリカンといった感じ。古ぼけて使えるかどうかすら怪しいジュークボックスや錆びて塗装が禿げかけているペプシコーラの看板など、映画で出てくる様な雰囲気そのままだったのでそれはそれで楽しむ事が出来た。好きな人は相当好きなんだろうな。

そこでハンバーガーを食べたのだが、これがまた本場を再現したとかで異常にデカイ。本来ならかぶりついて食べたいところだが、さすがに高さもあるので無理。というわけでナイフとフォークが用意してあるのでそれで食べる事にした。待ちきれなかったのか圭介君は手でそのままいき、それに触発された人が、課長、竹さんになんと高浜さんまで参戦してた。何故か俺と太一君もやれよと変な空気が流れたのだが、そこは敢えて無視の方向で。俺はそう言った事には流されません。

ハンバーガーをナイフとフォークで食べる経験なんて無かったので面白い体験が出来た。もちろん味もちょっと濃い目だったが肉の質がよかったのか、くどくもなく、また野菜類が多くて他に何もいらないってぐらい、一つの食事として成立していたので驚いたんだけど。ジャンキーって感じでも無いのでこれなら全国でお店を出してもいい気がするんだけどねぇ。こっちでやるからいいのかも知れないが。小夜ちゃんも満足してる様子だし。

おいしかったので文句は無いのだが、竹さんのプランニングの方向性がわからない。沖縄色を敢えて消して行ったのかなぁ。小夜ちゃんにはさすがに多いので半分を頂きながら、素朴な疑問を投げかけてみる。

「竹さん、どうして沖縄でハンバーガーなんです？」

そうすると当たり前の様な顔をして、

「何言ってるの？ロクちゃん。これも沖縄だよ。ちなみに高浜君のリクエストだけどね」
と真面目に返答された。え？ハンバーガーが沖縄？俺が首を傾げていると、
「草野君。確かに沖縄の伝統文化って訳じゃないよ。だけど、沖縄にはこういったお店を多く見かけるのは何故か？個人的な趣向としては戦闘機を観に行きたかったけどね」
高浜さんが答えを教えてくれた。なるほどね。ニカイチの約束事その5、お客の立場になりお客の為に。って事だ。その人の為になる企画を提案する、その為にはその人を少しでも理解をしなければならない。
「現状を味わっておかないと、伝統文化の価値が半減するからねぇ。俺達はどうやってその伝統文化を伝えてきたか、どうやって守ってきたかを理解しないといけないからさぁ。そして守りたいと思う人達がいればそれに力を貸すのが仕事だからねぇ」
いつも通りの職場で見せる微笑んだ顔で今一度念押しをする竹さん。ん？ちょっと待って、それって・・・、
「もしかして竹さん、今回の沖縄旅行って仕事も兼ねてます？」
ニヤリと口元を上げて、
「さっすがロクちゃん。長いこと一緒のチーム組んでないねぇ」
やっぱりか。そして課長に続きを促す。
「正式に決まった訳じゃねぇが、第1の奴らと社内プレゼンの話が水面下であってな。風の噂レベルだからまだロクのところには話がいってねぇだろ？」
「えぇ、まだです。社内プレゼンって事は相当大きい案件ですね」
なるほど、これがあったから会社の経費で落とす名目が出来たわけか。つってもどちらにしろ普通は無理だけど。
「じゃあ今回はその事前下見って事なんですね」
さて、仕事が絡んでるなら本腰を入れて見方を変えていかないと。

「何言ってんだお前。んな訳ねぇだろ、バーベキューしに来たんだっつーの。目的を忘れんなバーカ」
「は？だって今・・・」
「ロクちゃーん、駄目だよぉ公私混同は。楽しまなきゃねぇ。ちなみにここのお店、今日は定休日なんだけど無理言って開けてもらったんだよ。普段並ぶ程の人気店なんだから。せっかく沖縄に来たんだから食べないとねぇ」
コーラにストローで息を吐いてブクブクさせながらニヤついてる竹さん。ねぇ、なんか俺が間違ってる？進藤さんを見れば呆れた顔で肩をすくめてるし。あぁ、ちなみに竹さんは行儀が悪いってまたしても奥さんに叩かれてた、グーで。

ボブさんの運転でその後はホテルに向かう。大体２０分ぐらいと結構な近場だったのだがホテルに着いてまず驚いた。チェックイン手続きをしに行った進藤さんをホテルの中庭みたいな天井まで吹き抜けの広い屋内テラスで待っていたのだが、それがホテルの構造が大きな円になっていて回りを見上げると全部客室の扉。外と中が反転した巨大マンションにいるみたいで圧倒って言葉しか出てこないぐらいすごい。こういった演出もありだなぁなんて関心していると
「うひゃー圧巻だねぇ！天井のガラスを突き破って特殊部隊とかがロープで突入してくるんじゃない？ねぇねぇ高浜さんと圭介君でやってみてよぉ！」
環ちゃん、それ無理でしょ。高浜さんなら・・・まさかね。
「環さん、それ無理っす」
「えー、圭介君ひんじゃくー。高浜さんはぁ？」
腕を組んで上を見上げてしばらく考え込んでる様子の高浜さん。目線を徐々に下に下ろしてきて環ちゃんまで戻ってくると、
「降りるのはいいけど、登るとなるとちょっと辛いな。狙われ放題だし。退路は入り口でもいいの？」
「え？・・・う、うん」

「そうか、幸い中庭には花壇が沢山あるし遮蔽物には困らないけど、降下中が危ないな。上から援護してもらってもいいけど、各階から狙われ放題だし無事に降下出来ても途中階から狙われるな。ここは一気に1階よりも各階づつ制圧して降りてきた方が無難だね。そうすれば大隊じゃなくても何とかなりそうだよ。最上階にはスナイパーを置いておきたいけどね。これなら圭介君も行けるんじゃない？」

「は、はぁ・・・。制圧っすか・・・」

えーっと、高浜さん。真面目に何をする気ですか？

「はーい！ニカイチ集合！！」

進藤さんの声が響き渡る。広い範囲でばらけていたニカイチメンバーが集まってきたのだが、だからここは幼稚園か。

「それでは部屋のカードキーを渡します。ツインルームしかありませんので2人一組でお願いします、高浜さんのご家族は3名です。それでは配ります・・・」

部屋割りは順番に、課長・太一君、早苗さん・加奈ちゃん、俺・小夜ちゃん、竹さん夫婦、高浜さん家族、進藤さん・環ちゃん、そして圭介君1人。あぁ、それは彼の性格上、

「えー！まじっすか！！1人って寂しいじゃないっすか！？」

やっぱり不満を漏らす。

「恵美さんと環さんのとこに混ぜてくださいよ！」

「「却下」」

同時に即答。

「ならロクさんのとこは！？小夜ちゃんと一緒に！」

いや、聞くまでもないでしょ。

「無理無理。1人気楽でいいんじゃない？」

「寂しくて死んじゃうっす！しょうがない。この際、課長でもいいので！」

「しょうがないとはなんだ馬鹿野郎。おめぇなんていらねぇよ邪魔だ」

「そんなぁ、みんな酷くないっすか！？」
小学生のようにごねてると竹さんが、
「圭ちゃん馬鹿だねぇ。ちょっと耳貸してごらん」
そしてニヤニヤしながら圭介君に耳打ちすると、
「うっす！よし！さっそく海行きますよ、海！！」
なんか急に目を輝かせて生き生きし始めたんだけど、何この豹変振りは。どうせ竹さんがくだらない入れ知恵をしたんだろうけど。
「はいはい、うるさいのが更に活発になったけど、この後を説明します。海へはこのホテルを降りたところにホテル専用ビーチがあります。案内看板が出てるのでそれに沿って向かってください。夕食はビーチにバーベキューの施設がありますのでそちらで17時から始めます。ビーチにいらっしゃれば結構ですがホテルに残られた場合は遅れないようにしてください。浮き輪やビーチボールなどの空気はフロント横の売店で入れる事が出来るそうなので活用してください。あとビーチにはちょっとした売店もあるそうです。
朝食ですが、明日の朝7時から9時まで飲食テナントで用意がされています。和洋中と揃ってるみたいなのでお好きなのをどうぞ。出発ですがロビーに10時集合ですので覚えておいて下さい。遅れますと置いていきます。
それで注意事項ですが、ドアはオートロックですのでインロックをしないように。また海に向かう際はカードキーをフロントに預ける事も忘れないで下さい。以上です。何か質問はありますか？」
・・・・・・。みんな無言で先を促す。
「はい、それでは行きましょう」
進藤さんを先頭に荷物を持ってぞろぞろとみんなで歩き出す。6階の一角がニカイチで取った部屋らしい。一度にエレベーターに乗れなかったので後から上に上がる。
部屋に入るとベッドが2つにテレビ、簡単なテーブルセットとユニットバスの普通のツインルームだったのでちょっと拍子抜けしたのは過度の期待からだろう。ちょっと反省。沖縄だからってホテル

の客室が変わるわけでもあるまいし。
荷物をおいてベッドに腰掛ける。ふぅー、ここまで来るだけなのに疲れたなぁ。ちょっと寝転がって休憩していると、小夜ちゃんがお茶を入れてくれた。せっかくだから起きあがってイスに腰掛ける。

「パックのお茶しか無くて、持ってくればよかったですが・・・」
って申し訳なさそうにしてる。いやいや、
「ここまで来てちゃんとしたお茶じゃなくてもいいよ。煎れてくれてありがとね、頂きます」
小夜ちゃんも向かいに座り、お茶を頂く。暑いときに熱いお茶を飲むのがいいんだよねぇ。冬でも熱いお茶だけど。
「なんかようやく落ち着けたって感じだね。飛行機は大丈夫だった？」
持っていた湯呑みを置いてから頷きながら、
「もう大丈夫。ごめんなさい」
って再び申し訳なさそうにする。
「いやいや、こっちこそごめん。帰りも我慢しないで怖かったら怖いって言ってね。我慢するのが一番よくないからさ。とは言え、俺が何を出来るって訳じゃないけど」
飛行機の操縦が出来るわけでもないしね。俺が出来るのは隣に居る事だけだけど。って、しまった、
「あっ！今更だけど、俺と一緒の部屋でよかった？加奈ちゃんとか早苗さんと一緒の方がよかったんじゃない！？今からでも話をしてくるよ！」
小夜ちゃんと同じ家で過ごしているとは言え、さすがに寝たりするのは別々の部屋だし。親子とは言え、相手は女の子なんだから。
腰を上げようとすると小夜ちゃんは慌てたように手を振りながら、
「ぜ、全然！わたしは大丈夫です！」
「そっか、ならいいんだけど」

「むしろ・・・・・・」
「ん？なに？」
「え？あっ、えーっと、なんでもない・・・です・・・・・・」
かなり動揺してるみたいで慌ててる。そっか、無理もないよねぇ。初めて同じ部屋で寝るんだもん、そりゃ動揺するよねぇ。頭では理解出来るけど気持ち的には難しいだろうな、かといって俺が気にすると小夜ちゃんも、もっと気にするだろうから俺は普通にしてよっと。
お茶も飲み終わり、さてと海に行く支度をしようかなって重い腰を上げたところで扉がノックされ、
「さーよーちゃーん！いくよー！！！」
はいはい、待ってドアを開けるから大声で叫ばないで。
「いーくーよー！！」
扉を開けると勢いよく加奈ちゃんが飛び込んできた。そしてまだ湯呑みを持ったままの小夜ちゃんを見て、驚いた顔をして
「えー？小夜ちゃんまだ着替えてないの！？水着はー？」
そう言う加奈ちゃんも着替えて無いんだけど、めずらしいなぁ、
「加奈ちゃんは着替えないの？てっきりもう着替えてると思ってたけど」
ごそごそと自分の荷物から水着を出してる小夜ちゃんを後ろからせっついている加奈ちゃんに聞いてみた。すると一瞬不思議そうな顔をしてから、
「だいじょーぶ！もう着てきたもん！」
って胸を張って自慢げ。えーっと既に下に着てるから後は脱ぐだけって事か。ちょっと待って、着てきた？
「もしかして加奈ちゃん、家からずっと着てるの？」
なにを今更って顔して
「そーだよ！小夜ちゃんはやくー！」
ようやく水着を探し出した小夜ちゃんを確認するなり、
「じゃあ行くよー！バイバーイ、ロクちゃん！！」

って手を引っ張って部屋を出て行っちゃった。あーあ、小夜ちゃんが誘拐されたー。

1年目　夏3（後書き）

寝勒「部屋割りの見取り図はいいの？」
小夜「？」
寝勒「ほら、ちゃんと提示しないと」
小夜「？？」
寝勒「トリックに使うんでしょ？部屋の配置」
小夜「いつから本格ミステリーになった？」

1年目　夏4

人さらいが嵐のように去っていった後、一人残された俺は海に行こうか、このまま部屋で一眠りしようか悩んでいたのだが、結局海に行くことにした。本音を言えばこのまま部屋にいたかったのだが・・・。

適当に海パンとTシャツに着替え、小夜ちゃんが忘れて行った菱んだ浮き輪を持って部屋を出る。浮き輪を売店へ膨らませに行こうとするが、その前に隣の扉をノックする。たぶんまだいるよなぁ・・・。

「はーい、どなた？」

この声は早苗さんだな。

「草野です。小夜ちゃんはまだいます？」

「ちょっと待って」

扉をほんの少しだけ開けて隙間から覗かれる。

「なに？どうしたの？」

部屋の中が見えませんが中はどうなっているのでしょうか。覗いてもいいですか？

「いえ、このカードキーを渡してください」

隙間からカードキーを渡す。

「俺は先に海に行きますから、忘れ物があるといけませんので渡しておきます。あっ、浮き輪は持って行きます」

「そう、伝えておくわ。じゃあ後でね」

そう言ってすぐに扉を閉めてしまった早苗さん。呆然と立ち尽くす俺。何これ、すっごく寂しい。ちょっとした疎外感を感じつつ売店へと向かう。効果音はトボトボでお願いします。

売店に着くと既に高浜さんがでっかいワニを膨らませているところだった。それにしても高浜さんは体つきがいいなぁ、これが実用的な筋肉だからびっくりだよ。確かアメフトだったかラグビーをや

ってたんだよな。一緒に歩きたくないなぁ。
「おや？草野君、元気がないけどどうしたの？小夜ちゃんは？」
「隣に誘拐されました」
「えっ？」
頭の上に大きな疑問符を浮かべる高浜さん。
「身代金要求が無いのが気になります」
「あっ・・・そう・・・大変だね」
大体の事情はわかってくれたみたい。ただ誰に誘拐されたかまではわからないみたいで、
「犯人はやっかいそう？」
一応心配をしてくれる。
「いえ、誘拐犯らしからぬ幼さでしたので大丈夫だと思います。その保護者らしき仲間もいました」
人質の安全は守られている事は確実だ。もう一方の隣だった場合は・・・想像もしたくない。
「なるほど、愛する娘を取られて意気消沈中なんだね。まぁそんな事はいくらでもあるさ。はい、僕は終わったよ。それやってあげようか？」
俺が持っていた浮き輪を顎で指す。
「すみません、お願いします。奥さんと息子さんは？」
浮き輪を渡して空気を入れてもらう。にしてもコンプレッサーの音がうるさい、綿菓子屋を思い出すね。
「女は色々と時間がかかるんだってさ。聡はお母さんにべったりだし。そう考えると草野君と一緒だね」
なるほど、高浜さんは追い出されたって事か。ちなみに聡君は高浜さんの3歳になる息子さんね。
「よしっ、終わったよ。さて、海に行こうか」
空気を入れてもらった浮き輪を受け取り、でっかいワニを脇に抱えて先に歩き出す高浜さん。遅れて俺も歩きだしたのだが、後ろから見るとワニを素手で捕獲した人に見えるのが面白い。今晩はワニ

の唐揚げですね。
「あ！草野さんと高浜さんだ！おーい！！」
ホテルから出るところで環ちゃんと進藤さんも向かうところだったらしく、すぐそばにいるのに環ちゃんに呼ばれた。
「環ちゃん、そんな大声じゃなくても十分聞こえてるよ」
「二人とも今から行くの？」
進藤さんはTシャツにホットパンツ姿で、環ちゃんはビキニのまま片手に荷物を抱えてる。それにしても環ちゃんはもっとぽっちゃりしてるかと思ってたけど、出るところは出て締まるところは締まってる。こりゃ・・・竹さんが訴えられるな。
「はい、みんなはもう？」
「他の男連中は先に行ってるよ、後は出遅れ組ってわけだ」
厳しい日差しの中、案内通りに下っていく。こりゃ日焼けに気をつけないと後が大変な事になりそうだ。アスファルトからの照り返しも辛い。それにしても湿気が無いだけでこうも体感温度が変わってくるんだな。
「うわー！南国だぁー！！」
しばらく歩くと急にビーチが開けてきた。真っ白い砂浜に椰子の木みたいなのが等間隔に並んで、ビーチパラソルが所々開いている。ホテルのビーチだからプライベートとまではいかなくても、もっと人が少ないと思ってたんだけど結構人がいるなぁ。まぁ7月中旬の連休だからしょうがないか。さてと、課長たちはっと。周りを見渡していると、
「おーい！ロクっ！！こっちだ！！！」
呼ばれた方をみるとパラソルの下に課長と竹さんがいた。陣取られた場所へ近づいてみると圭介君と太一君がいない。
「ロクちゃん遅かったねぇ」
「ええ、ちょっとゆっくりしてから来ました。2人は？」
噂をすればなんとやら。クーラーボックスをを下げた圭介君が汗だくになって帰ってきた。その後ろからは買い物袋を下げて涼しい

顔をしてる太一君。
「やばいっす！超重たいっす！」
「おつかれ、ありがとな」
早速届けられたビールを開けて飲み始める課長。ゴクゴクと喉が鳴り・・・なげぇな。
「ぷはっ！やっぱ海でのビールはまた違うなぁ！」
と３５０ｍｌの缶をつぶす。いきなり飲み干すのはどうかと・・・。そして２本目を開ける。まぁこの人はいつもの事だから放って置こう。
「さてと、ひと泳ぎしてこようかな。どうだい太一君、沖まで体を慣らしに行かないかい？」
「そうですね。いいですよ」
２人は準備運動を始める。こうやってみると体つきがいい。高浜さんはボリュームがあるって感じだけど、太一君は細いながらも引き締まった体をしている。なるほど、だから俺の家の片付けやなんかも軽々と出来るわけだ。それにしても高浜さん、今更ですが海でブーメランは気合が入り過ぎではないでしょうか。
「草野君もどうだい？」
「いえ、俺はやめておきます」
「そう。たまには体を動かした方がいいよ」
きっとこの２人の事だからハードなんだろうなぁ。運動があまり得意でない俺としては観てるだけでお腹いっぱいです。そう言えば二人とも草野球チームの一員だったな。あと圭介君も。圭介君を見ると竹さんと共に何かに目を奪われている。もしかして・・・、
「それにしてもタマちゃん・・・」
「これはやばいっすね！」
特に竹さんの目の色が変わってる。これはまずいな。
「竹さんと圭ちゃん、きもちわるいー。こっち見ないでください！」
腕を組んで、胸元を隠す環ちゃん。本気で気色悪がってるし。

「えー、目の保養だよ。ここは日頃の感謝を込めて、揉ませろと言わないからさぁ、指でつつかせて。小指でいいからさぁ」
とうとう退職の時が来たか。胸元を隠したまま俺の後ろに回る環ちゃん。そして、目の前には目が血走ったゾンビが2体。
「環さーん何カップっすかぁ??」
「いいじゃーん減るもんでもないんだしさぁ」
駄目だこの二人、早くなんとかしないと。さて、何か道具は無いかと周りを探し始めた瞬間、
「「いてっ!!」」
2人して頭を抱え、屈み込んで苦悶してる。その後ろに仁王立ちで見下してる竹さんの奥さんと進藤さんが。見てるこっちまで萎縮するほど怖い・・・。
「ロクちゃーん!おまたせー!!」
砂浜を元気に走って来る加奈ちゃん。その後ろには早苗さんと小夜ちゃん、高浜さんの奥さんと息子さんがゆっくりこっちに向かってる。
「走ると危ないよ!」
そのまま目の前で豪快にヘッドスライディングを。ほらいわんこっちゃない。しかしすぐに起きあがって俺に体当たりをしてくる。地味に痛い。
「おっまたせー!うみー!!」
体当たりを反動にして方向転換し、そのまま海へ走っていく。いやぁ、元気だ。
「ロクちゃんおまたせ。はい、どうぞ」
って、早苗さんが俺の前に小夜ちゃんを差し出す。どうぞと言われても・・・。大きめのパーカーを来た小夜ちゃんは俺を見上げる。いつも通りの無言です。さて、どうしたものかと見つめ合ってると、
「もしかしてロクさんロリコン?」
耳元でささやく声が。

「け・い・す・け・く・ん？」
「やべぇ！ロクさんが怒った！！にげろー！！」
俺が振り返った時にはすでに走り出していた。追いかけようと思ったのだが向かった先に海に入ろうとしている高浜さんがいる。
「高浜さん！！お願いします！！！」
俺を見てから向かってくる圭介君を確認し、一度だけ大きく頷く。そして高浜さんを避けようと斜めに方向転換した圭介君に対して腰を落とし、ものすごい勢いで走り出す。圭介君もそれに気づいたのか更に加速したのだが砂地では思うより速度が出ないらしくすぐに高浜さんに追いつかれる。そして高浜さんは勢いを殺さずにそのままダイブ。「ぐえっ！」って声と共に体がくの字に曲がりそのまま動かなくなる。あー、少しは手加減してあげてもよかったかな。まさか肩から行くとは・・・。ご愁傷様です。
余計なことを口走った悲惨な男の末路を確認した後、またしても俺の横で見上げる女の子。再び無言なんだけど。何かしゃべらないとなぁ。
「どうだい？初めての海は」
無難に感想を聞いてみる。小夜ちゃんは見上げていた視線を海へと動かして、
「・・・青い」
なるほど。わかりやすい感想ですね。
「あれって水平線？」
遠くの方を指差して俺に聞いてくる。飛行機の中からでも見えてたけど、そんな余裕が無かったからな。
「そうだよ、面白いよね。昔の人はあそこの向こうは大きな滝になってるって思ってたんだから」
あと、天動説を唱えた人達はすごい自己中心的なんだと子供ながらに嫌悪した覚えがある。どれだけ自分に自信がある人達なんだと。
「・・・あそこまでどれぐらい？」

どれくらいって？距離の事かな？えーっと、円だから三平方が使えるか。地球の半径ってどれくらいだっけ。たしか一周が４万ｋｍで、小夜ちゃんは小さい方だから目線だと１ｍぐらいかな。そうすると・・・、電卓が欲しいな。文明の利は人を堕落させるとはよく言ったものだ。
「だいだい３ｋｍ半ぐらいかな？」
俺だと４ｋｍ半ってとこだね。
「・・・近い」
確かに。今まで考えた事もなかったな。
「そうだね。歩いて１時間かぁ、すぐだね」
現実って意外にも箱庭だったんだね。小夜ちゃんに聞かれるまで気が付かなかったな。
「さーよーちゃーん！ロークーちゃーん！！」
元気な声が再び近づいてくる。
「ねぇねぇ！まだぁ？小夜ちゃん行くよ！！はーやーくー！！」
加奈ちゃんが小夜ちゃんの裾を引っ張り急かす。困った顔で俺を見上げてる小夜ちゃんだが、
「行って来なよ。目一杯遊んでおいで」
そう声をかけたんだけど、なぜかちょっと不満気な顔。海が嫌なのかな？そうでも無いみたいだけど・・・。すると着ていたパーカーを脱いで俺に渡し、浮き輪を持って行ってしまった。わからない、何が不満なんだろう。ちょっと怒ってるみたいだったし・・・。
「機嫌を損ねてしまいましたね」
俺の横で急に声がしてびっくり。振り向けば進藤さんが目を細めて小夜ちゃんと加奈ちゃんを見ている。
「うん、なんで怒ったのかわからないけど・・・」
怒るような事があったか？
「小夜ちゃんも女の子なんですね」
ん？女の子？？
「それは知ってるんだけどねぇ」

見たままなんですが・・・。
「やっぱりわかっていませんね。だから小夜ちゃんは拗ねたんですよ。さて、私も行こうかな」
進藤さんが俺の目の前で着ていた服を脱ぎ始める。下には水着を着ているとは言え、こんな目の前で脱がれると・・・心臓に悪いです。あまりしっかり見たわけじゃないけど、進藤さんもスタイルが良い。白のビキニなんだけど、肌も白くて全体的にほっそりとして見ていて綺麗だなぁ。こんな日差しの下で透き通るような白さが眩しい。
「さっ、環。聡君も行こうか。では草野さん、お姫様のご機嫌を取ってきますね」
そう歩き出してから振り向いていたずらっ子の様に微笑む。そしてすぐ傍で一緒に砂遊びをしていた高浜さんの息子さんと環ちゃんの3人で海へと向かった。
俺は一瞬ドキッとしてしまい、何も言い返せなかった・・・。してやられたな。波打ち際で5人が戯れている姿を見ながら小夜ちゃんが怒った理由を考えた。考えてたんだけど、急に耳元で、
「聡君いいなぁ、ハーレムだなぁ、俺と代わって欲しいなぁ、いいなぁ」
ってうわ言が聞こえてくる。
「竹さんは駄目です。あなたが行くと犯罪になります」
「えー、だってぇ、羨ましいなぁ、いいなぁ」
ずっと耳元でぼやかれたら考えられるものも考えられないよ・・・。

1年目　夏４（後書き）

小夜「とうとう２０話です」
寝勒「ごめんなさい」
小夜「？」
寝勒「当初の予定ならもっと月日が経ってたんです」
小夜「・・・」
寝勒「なんでこんなに長いの？」
小夜「ある人が詰め込み過ぎって怒ってたよ」

1年目　夏5

「おい、ロク！肉がねぇぞ！！」
「肉ばかり食べないで下さい。魚介類だっていっぱいあるじゃないですか。野菜も食べてください！！」
「俺の体は肉以外は受けつけねぇ、さっさと焼けよ！」
「ならまっつぁんのビールは頂くよぉ」
「あっ！？竹！てめー！俺のを取るんじゃねぇ！！」
「課長！暴れないで下さい！！ほらっ、圭介君！そっち焦げてる」
「あちー、なんでこんな暑いのに熱い事しないと駄目なんすか？」
「しょうがないよ負けたんだから。ほら、こっち焼けたよ！ごめん、圭介君。そこの皿を取って」
・・・・・・。

あの後、みんなではしゃぎにはしゃいだ。
竹さんがどこから調達してきたのか、スイカを2個抱えて登場しスイカ割りが始まった。
トップバッターの圭介君が課長のすぐ脇に振り下ろして血祭りに上げられたり、振り下ろした加奈ちゃんの手から棒がすり抜けて向こう側にいた竹さんにクリーンヒットするところだったり、ふらふらになりながらも1個目を割った高浜さんがスイカを粉々にしたり、目隠しをしている事をいい事に環ちゃんの傍についてまわり胸元を眺めていた竹さんと圭介君が学習能力の無さでまたしても悶絶したり、しっかりと目を回したはずの小夜ちゃんがスタスタとスイカの前まで来て何事も無かったかのように割ったりと大いに盛り上がった。
その後は何故か男連中でビーチフラッグ大会。女性陣が始めに持ち点を割り振り、その点数により距離のハンデを付ける。もちろん俺が一番近い。そしてトーナメント戦で女性陣が1戦づつ賭けてい

く。結局優勝したのは1番遠くからスタートしたはずの高浜さんで、賭けでは常に全額を賭けて全ての試合で勝ちを収めた進藤さんだった。そして決勝で高浜さんに負けて悔しかった課長はバーベキューの焼き係を賭けてビーチバレーを強制参加で始めた。

ビーチフラッグの1・3・6位チームと2・4・5位のチームに別れ、高浜さんと圭介君と俺のチームと課長と竹さんと太一君チームでスタートしたビーチバレーなのだが、課長チームは卑怯過ぎた。身長のみ高い竹さんのブロックっと太一君がレシーブをしながらも見事なトスを上げて課長が叩き込む連携が打ち崩せず、俺や圭介君のスパイクでは竹さんに止められてしまい、頼みの綱の高浜さんもいい線は行くのだが太一君に拾われてしまうシーンが何度とあり、結局課長の力任せのスパイクを全て拾いきれなかったこちらチームの負け。しかし、高浜さんはビーチフラッグ優勝者の為、今回の罰ゲームは免除。つまり俺と圭介君の2人で焼く事となった。そしてみんなで一度ホテルに戻り、外の簡単なシャワーを浴びて着替えて浜辺に集合した。

「飽きた！ロクさん後よろしくっす！！」

「ちょっと！圭介君！ったく、しょうがないなぁ」

たまにつまみ食いをしながら2人でひたすら焼いていたのだが、ある程度焼き終わったところで圭介君がビール片手にみんなの元へ行ってしまった。まぁ焼くものは一通り焼いた後だから別にいいんだけどねぇ。それじゃ、今度は自分の為に焼きますか。圭介君がほとんど焼いてくれなかった野菜や魚介類を中心に適当に網に乗せる。さて、汗もかいたことだし、俺もビールが欲しいな。クーラーボックスはどこかなってキョロキョロしていると、

「・・・はい」

ビールの缶が胸の前に差し出される。

「ありがと。丁度探してたところだったよ」

小夜ちゃんがタイミング良く持ってきてくれた。プルトップを上げるとプシュっと空気が抜ける音と共に泡があふれ出す。おっとっと、もったいない。急いで口を付けて泡をこぼさないようにしてから、一気にあおる。

・・・・・・。

「っあ～！！」

ひと仕事した後だから特にうめぇ！！喉がシュワシュワする！！

「ふぅ、なんか生き返った感じ。ありがとね」

ビールを飲む姿を不思議そうに見ていたのだが、俺が焼けた野菜をつまんでいると椅子を持ってきて隣に座る。おっ、エビが焼けてきたな。殻を剥きたいけど熱いからちょっと皿にどけておこう。ビールをもうひと口飲んでから、

「いっぱい食べた？食べる？」

横目で小夜ちゃんを見て、タマネギをひっくり返しながら聞いてみる。あっ、中心の欠片が網の目から落ちた。なんか悔しいなぁ。

「・・・うん、おいしかった。お腹いっぱい」

「そう、それはよかった。何がおいしかった？」

やべっ、ピーマンが焦げた。でもまぁ食べられ無くはないな。・・・うーん、やっぱりにげぇ。生でも焼いても苦いとはこれいかに。

「・・・・・・ホタテ」

「しぶいねぇ」

サザエが噴いて来たな。醤油、醤油っと。

「・・・あと、しいたけ」

醤油かけたら縮こまった！すげぇ！ってさっきも感動してたな、俺。

「いいねぇ、しいたけ。俺も好きだよ」

さてと、そろそろエビの殻を剥こっと。エビの殻って生だとなんであんなに剥きにくくなるんだろうね。

「やっぱりわたしが焼く」

「だーめ」

やべぇエビ、プリップリ！
「さっきも言ったでしょ？」
そろそろ肉を焼こうかな。どれにしようかなぁ。
「こういう時に普段家事をしている人は働いたら駄目なの。それがニカイチのルール」
牛肉はちょっとくどいよなぁ。スペアリブかぁ・・・、骨が邪魔なんだよなぁ。
「だから、小夜ちゃんは何もしちゃ駄目なの」
よしっ、ここは鶏肉だ！もも肉もも肉っと。うおっ！セセリを発見！
「わかったかい？」
小夜ちゃんがふてくされた顔で上目遣いに俺を見てくる。相変わらずの頑固者だなぁ。ここで小夜ちゃんが働くと怒られるのは俺なんだってば。セセリを網に乗せてから、サザエを串でほじくり出す。よしっ、最後まできれいに抜けた。俺すげぇ。この最後の黒いところがビールに合うんだよなぁ。あっ、さっき飲み干しちゃったからもう一本持ってこないと。
「小夜ちゃんは飲み物何が欲しい？」
ついでに持って来ようとするが、
「わたしが行く」
ってイスから降りて歩きだそうとする。
「ちょっと待って！だから小夜ちゃんは座ってないと駄目なんだって。俺が欲しいんだから自分で取ってくるよ」
必要最小限に振り向いて目線の端で俺を捉える。うわっ、めっちゃ怒ってる。若干のつり目を細めるから怒ると怖いんだって。だからさぁ、なんでわかってくれないのかなぁ・・・。セセリをひっくり返しながらなんて説得しようか悩んでいると、
「さーよーちゃーん！花火するよー！！」
ちょっと離れたところから加奈ちゃんの呼ぶ声が。砂浜の方を見てみるとほとんどのみんなが集まってた。

「ほら、呼んでる。行っておいでよ」
顔を砂浜から俺へと戻す。今度はちゃんと向いてくれたな。まだ怒ってる感じだけどさ。しばらく俺を見つめてから、
「・・・・・・行かないの？」
うーん、そうだなぁ。
「俺はいいや。ここから見てるよ」
セセリがまだ焼けてない。
「・・・ならわた」
「小夜ちゃん、ほら行くよ！！」
「えっ？あっ、まって・・・」
加奈ちゃんが強引に割り込んで、腕を掴んで連れていった。ふぅ、やっぱり小夜ちゃんは頑固者だ。加奈ちゃんグッジョブ。
砂浜で始まった花火をしばらく見ていたのだが、ふと思い出してビールを持ってこようとクーラーボックスを探していると、
「おい、ロク！」
突然課長に呼ばれて声のした方に振り向く。すると目の前には宙に浮かんだビールの缶。うおっ！危ね！！
「おっ、ナイスキャッチ。お前もやれば出来るじゃねーか」
何がナイスキャッチなのか。何をやれば出来るんだか。
「危ないじゃないですか！また額にヒットするとこでしたよ」
「ちゃんとゆっくり投げてやったんだ、ありがたく思え」
こんなもの本気で投げられたらガラスの灰皿と同じ効果があるって。現実は2時間なんかじゃ済みませんよ。
「その件については一切感謝はしませんが、ビールはありがたく頂戴します」
本日2本目のビールです。さっそく頂きましょう。夏の海でまずいビールなんてこの世にはありません。一口飲むと同時に網の上も綺麗になった。
その後は課長が黙り込んじゃうから月明かりの下、かすかな波が認識できる海を背景にみんなの花火をビールを飲みながら眺めてい

た。圭介君が火のついた花火を振り回して進藤さんに怒られていたり、暗い中を一生懸命落下傘を追いかける加奈ちゃんや、噴出花火の導火線に火をつけて急いで離れようとしたとたんに転んで火花を浴びた竹さんを遠巻きながらも見て楽しんでいたのだが、突然

「どうだ、ちゃんと父親やってるか？」

なんてこちらを向かずにしんみり言い出すもんだから、当てられちゃって、

「さぁ、どうなんですかね」

真面目に返してしまった。

「一端に悩みがあるって顔してるが、お前は父親役には向いてねぇよな」

それは自分自身がよくわかってますよ、言われなくても。父親の背中なんて物心ついた時からほとんど拝んでいませんからね。

「目指すべきお手本が無いんですよ、俺には」

理想の父親とは一体どんなものなんだろう。課長を見習えばいいってものでもないだろうし。

「普通なら虚勢張って、無理してでも頑張るんだがな」

クックックって意地汚く笑う。

「でもまぁなんだ。お前はお前らしく居た方がお前らしいからな」

そんなわかり難い表現をされても。結局言いたい事は俺の思った通りにしろって事なんだろうけど。

またしばらく花火を黙って見ていたのだが、またしても唐突に

「ところで、生きる気になったか？」

ったく、何を言い出すかと思えば。それにしても久々だな。

昔、俺が２０歳になった時、課長から言われた「もうちょっとだけ生きてみないか？」。あの時はそれ以上何も言わずに会話は終わった。この人はいつもそうだ、言いたい事を言ってそれでお終い。

「何を言ってるんですか。俺は自殺志願者じゃないですってば」

「だからと言って、無理して生きる気もねぇくせに」

うん。でもきっとそれは俺だけじゃない。突然交通事故にあって

死んだとしても受け入れられる人は大勢いると思う。人よりちょっと生きる事に対して固執してないってだけで。
「あの子を引き取るって言うからちょっとはマシになったと思ったんだが・・・。相変わらずだったか。引き取った責任を果たせなんて言いたいが、お前の責任ってなんだろうな。生きてさえいればなんて綺麗事、虫唾が走るしな」
今度は自称気味に笑う。確かに場合によってはお互い得るものは無いですからね。でも、それはあまり人前で言わないほうが良いですよ。反感を買いますから。
「課長が心配するほど死に急いでいませんよ」
「同じ結果ならお前の場合はもう少しは生き急いでもいいと思うがな。物事に執着心の無い奴め」
そう言い終ると同時にビールを飲み干して缶を潰し、
「おい！俺にロケット花火を寄こせ！！」
みんなもとに走って行った。
課長、それは誤解です。俺は執着心が無いんじゃなくて物事の成りようをただ受け入れてるだけです。その結果があの世行きだったらしょうがない、納得はいかないけどきっと諦めは付くだろうから。
課長が去ったあと、特に何かをしたい訳でも無く浜辺への階段に座りみんなを眺める。あちらではロケット花火を人に向けて飛ばしまくってる人影が。あの影からすると課長だな。狙われるのは圭介君か・・・。にしてもあぶねぇ、何て事してんだあの人は。太一君、そろそろ止めてあげないと・・・。

1年目　夏5（後書き）

小夜「スイカ割りって面白い？」
寝勒「なんで？」
小夜「割れたスイカって食べ辛い」
寝勒「なら割らずに食べる？」
小夜「割らずに？」
寝勒「皮ごとこうやってさ」
小夜「・・・やって見せて」

1年目　夏6

それにしても課長に変な当てられ方をしちゃったな。みんなのところで花火をする気分じゃなくなっちゃったよ。課長が言ってた俺の父親としての責任、ねぇ・・・。あの子を立派に育てる！なんて、何を以って立派とするのか。そんな曖昧な事じゃないんだよね。責任かぁ、俺がしないといけない事ってなんだろう。日々の生活を守る。でもそんな当たり前の事じゃなくて、きっと俺があの子にしてあげたい事。・・・言わずもがな、俺がずっと悩んでいる事、笑顔。めいっぱい笑った顔を見てみたい。２ヶ月一緒に生活してるけど、あの時の一度だけだった。だから、そんなちょっとした笑顔を一度だけじゃなくて、毎日笑って過ごせるように。これは俺のしてあげたい事でもあり、あの子が俺にして欲しい事。小夜ちゃんはなんで笑ってくれないんだろう。毎日がつまらないのかなぁ・・・。そんな風には見えないけど、でも、やっぱり無理してるんだよな。気を張ってるって言うか、我慢してるって言うか。つっかえ棒をしてる感じがする。今に始まったって訳じゃなさそうだから前に何かあったのかなぁ。

以前の生活。実は気になる事がたくさんある。炊事洗濯掃除が１０歳の少女なのにほとんど完璧に毎日こなしている。手を出すと怒られるからいつも見てるだけなんだけど、相当慣れた手つきで１年やそこらで出来る手際じゃない。それに食材を選ぶのも知識があり過ぎる。俺と比べるのもおかしいのだが、あれは立派な主婦の感覚だ。独学なんかで得られるものでもない。

そして次に学校の先生が言ってた『肝心な基礎が出来ていない』。その時確か『学校には来ているのでベターな生活をしている』とも言ってた。きっと小夜ちゃんは学校に行ってなかったのではないか、だから勉強に抜けがある。それに帰り際に言われた『俺に引き取られて良かったと思う』なんて俺の事を良く知らない筈だからどう考

えても何かを知っていて、今の生活と以前の生活が比べられないと出てくる言葉じゃない。
更に小夜ちゃんが始めてだと言ったものは『海』『祭り』『花火』『飛行機』。飛行機は初めてでもおかしく無いが、海と祭りと花火は小学5年生で行った事が無いってのは素直に飲み込める話じゃないと思う。まぁ人によってはそう言った事があるかもしれない。だけど項目として挙げると、
知識があるので『家事を誰かから学んだ』
手際を見ていれば『家事をしていた』
転校してからの成績から『学校には行っていなかった』
現状が以前と変わらないのならば『友達は少なかった、もしくはいない』
海や祭りに行った事がないので誇張すると『遊びに連れて行って貰えなかった』
他にもおかしな点は多々ある。養子縁組届出も家裁の許可が下りていた。俺の腹違いの妹にしては似ていなさ過ぎる。小夜ちゃんのお母さんの叔母さんが妹とは言えピンポイントで俺のところを選んだのは何故？その叔母さんが俺の知っている人って可能性は低い。知人ならばその事を手紙で触れていたはずだ。
他にもまだあるけど全て可能性の域からでていないが、総合的に見ると不審点が多すぎる。気になるんだよなぁ、小夜ちゃんには申し訳ないけど、少し調べてみるか。とは言え、どうやって調べればいいの？
浜辺では課長と思しき人影が怒られている。怒っているのはやっぱり太一君なんだろうな。そして右の方からみんなのもとへ歩いていく人影がひとつ。あれは誰だろう。1人だけでどこか行ってたのかな？トイレ？等と邪推をしていると急に隣に立つ人影が。近づいてくる気配を全く感じてなかった俺は驚いて見上げると、外灯が照らすのは浜辺を眺めるノースリーブのクリーム色したワンピース姿の女の子。小夜ちゃんだった。

「びっくりした！！どうしたの？」
脳裏には忍者かよ！って突込みがよぎったけどまぁいいや。何も言わずに俺の隣に座って浜辺を眺めてる。
「どこ行ってたの？」
浜辺から来た訳じゃないよね。さすがに俺も正面から来る人影を見逃すなんて事しないと思う。多分、自信がないけど。
「・・・・・・恵美さんと一緒だった」
進藤さんと？それは何と言うか、気付かなかったけど言われてみれば2人は気が合いそうだな。それで？どこ行ってたの？・・・いくら待っても続きがないんですが、それで終わり？まぁいいけど。進藤さんと一緒なら下手な事はないだろうし。つか、小夜ちゃんが浜辺にいなかったのに気付かなかった俺って・・・。
「花火はもういいの？ってこれは・・・、線香花火？？」
小夜ちゃんの差し出された手には紙縒りの束が。
「・・・花火を始めてやったって言ったら、これを持って行きなさいって」
「へぇ、進藤さんが？それにしても懐かしいなぁ」
小夜ちゃんが器用に紙の帯を外して一本づつばらばらにする。このシールの紙が綺麗に剥がせれないんだよねぇ。
「今やるの？」
線香花火を俺と小夜ちゃんの間に綺麗に並べて合計は8本。今の小夜ちゃんの手にはライターが握られている。一本を手に持って、火をつけようとしているが、あー、やっぱりそうなるよね。
「小夜ちゃん、それ反対だよ。紙の方を手に持つんだよ、こうやってね」
俺も一つ手にとって見せて、ライターを貰うために手を出す。小夜ちゃんはちょっと恥ずかしそうに、
「・・・やった事ないから」
って繕ってライターを俺に渡してくれた。俺も久々だなぁ、手持ち花火なんていつも見ているだけだから何年ぶりだろ。ライターに

火を付けて2人で線香花火を近づけると、ほとんど同時に火がついた。
一度大きく炎をあげたかと思いきや、すぐに消えてオレンジ色の綺麗な玉が出来る。その玉の周りにはかすかに飛び散る火花が。
「どっちが長く持つか競争だよ」
なんてお約束を口にしてプルプルと震えている火の玉を眺めていると、柔らかなパチパチとした小さな音とともに徐々に火花が大きく散っていく。火の玉を取り囲むように一瞬で枝分かれする火花を見ていると、
「・・・きれい」
って小夜ちゃんがつぶやく。徐々に火花も勢いを無くし、今度は音もなく火の玉から放物線を描いた弱々しい光の線が飛び出す。すると、
「・・・ごめんなさい」
って火の玉に視線を落としたまま呟くようにささやいて何かを謝る。
「どうしたの？」
何か謝られる事があったかな？うーん、思い当たる節がない。全く記憶にございません。なんて誰かの謝罪会見みたいだけど、記憶に無いって事は未来系の謝罪かな。もしくは俺に対してじゃないかも。さて、どんな言葉が飛び出してくるのか。
「・・・なんでもない。謝りたかっただけ」
あらそう。何にもないの？まぁいいけど。
「あっ」
ポトリと俺の玉が落ちた。小夜ちゃんのはまだ小さくなりながらもプルプル震えて頑張ってる。もう少し耐えるかなって思ったけどしばらくしたら小夜ちゃんのも落ちた。
「1回戦は俺の負けだね。じゃあ次いくよ」
並んでいる線香花火を手に取り、火をつける。またしても勢い良く燃え上がった後、オレンジ色の火の玉が出来た。黙って線香花火

を見つめてる。とくに会話も無く、2人で静かに線香花火の火花を見つめて夏の風物詩を味わっていた。
最後の線香花火に火をつけた頃、
「初めての海はどうだった？」
今日の感想を聞いてないことを思い出す。パチパチと散っていく火花を見つめながら、しばらく沈黙があって、
「・・・本当にしょっぱかった」
なるほど、海水も初体験か。
「舐めたの？」
相変わらず目線は線香花火のままでかすかに頷く。
「どう？楽しかった？」
激しく散っていた火花が少なくなっていき、今度は勢いの無い一筋の火花が飛び出してきた。しばらく火花を眺めてて、そして、
「・・・面白かった。スイカ割りも、ビーチフラッグも、ビーチバレーも、バーベキューも」
ゆっくりと一つ一つ思い出してるみたい。ニカイチのメンバー、特に圭介君と竹さんは騒ぎ過ぎだよなぁ。そして小夜ちゃんは加奈ちゃんに色々と連れまわされてたし。
「ごめんね、うるさい連中で」
言い終わるか終わらないかといったタイミングで小夜ちゃんの火の玉が落ちる。それでも目線は線香花火の先を向いたまま、しばらくそのままで、
「・・・いっぱいの人と出かけたこと無くて」
今度は俺の玉が落ちて、最後の線香花火が終わってもそのままで、
「どうしていいかわかんないけど、でも・・・」
俺が小夜ちゃんの方を向いても、まだ線香花火の先を見つめてて、次の言葉が気になって、
「・・・でも？」
って先を促すと急に顔を上げて、穏やかなやさしい目が俺を見ていて、

「すごく楽しかった」

なんてちょっと嬉しそうに言うもんだから、

「そう、それはよかった」

なんてありきたりな言葉しか出なくて、顔を浜辺へとそらしてしまった。何をしてるんだか、俺は。

浜辺では花火の片づけが終わったみたいで、ぞろぞろとみんながこちらに帰ってくる。ある程度近くまで来ると、加奈ちゃんがこちらに向かって、

「小夜ちゃーん！温泉いくよー！！」

って、元気に駆けて来る。横に座っていた小夜ちゃんも立ち上がって加奈ちゃんと一緒に歩いてホテルへ向かってしまった。俺は半分放心状態でそのまま座っていたから、目の前に立ってる太一君に気が付かなくて、

「ほら、ロクさんも行こうよ」

と言う言葉でようやく現実に戻ってこれた。

まったく、何をしてるんだか俺は。

1年目　夏6（後書き）

小夜「・・・花火きれい」
寝勒「ハッハッハッ！」
小夜「なんで笑うの？」
寝勒「綺麗って涙目で言うからわらっ」
小夜「！？」

小夜「それ以上はダメっ！！」

1年目　お盆1

んー、あー、朝？今何時だ？携帯、携帯っと・・・。目を閉じたまま手探りで携帯を探すと、いつも通り枕元で発見。なるべく目を開けないように片方の瞼をほんの少しだけ開けて隙間から時間を確認すると、

”ＡＭ８：３８”

えーっと、なにこれ？・・・・・・。

やべぇ！！一気に目が覚めて、急いでリビングに飛び出すといつも通り台所に立ってる小夜ちゃんがびっくりしてる。

「やべぇ！寝坊したっ！！」

急いで洗面へ走っていって歯磨きをして顔を洗い、部屋に戻って着替えながら課長へ遅刻の連絡をしようと携帯を開いてリダイヤルから課長を探していると、ん？まてよ。今日は・・・。携帯の日付を見る、

”８月１５日”

えーっと、お盆？って事は・・・、会社休み？

なぁーんだ、休みかぁ。よかったぁ、焦って損したよ。今日から３日間はお盆休みなんだから目覚ましをセットしなかったんだもん、そりゃ寝坊の２つや３つするさ。

「無駄に慌てちゃったよ。いやぁ、心臓に悪いねぇ」

なんてちょっと照れ隠しをしながら再びリビングに登場。テーブルの上にはそんな事はお構い無しのように朝食の支度が整ってる。

「そう言えば、今日はお祭りだったね。お昼過ぎに課長の家に行くんだっけ？」

そう言いながらテーブルに座る。沖縄旅行から帰って来て次の日に早苗さんと加奈ちゃんと小夜ちゃんの3人が夏祭り用の浴衣を買いに行った。そして今日の昼に早苗さんが着付けてくれる事になっていた、と思う。

小夜ちゃんがキッチンから俺のコーヒーを持って来て、軽く頷く。ん？なんとなく違和感が。なんでこんな真夏に長袖のシャツ？冷房が苦手だったかな？？

それにしても沖縄旅行の疲れ無しによく買い物に行ったよなぁ。あんだけ海で大はしゃぎした後、2日目には水族館に行ってでっかい水槽にサメやらエイやらとてつもなくデカい魚にはしゃいで、国際通りでお土産を選ぶのもあーでも無いこーでも無いと店を渡り歩いていたのに、それも無かったかのように次の日もいつものテンションだったからなぁ、加奈ちゃんが。さすがに早苗さんは少し疲れが残ってたみたいだったけど、それでも俺なんかと比べても体力があるよなぁ。ちなみにどんな浴衣なのか極秘扱いで未だに知らない。一緒に連れていってくれなくて、太一君と家出ゲームやってた。先月から始めたシュミレーションゲームの手直しをやってくれたんだけどね。

「お昼ご飯はどうする？どこかに食べに行こうか」

せっかくお祭りなんだもん、小夜ちゃんに作って貰うのも、ねぇ。でもきっと小夜ちゃんは意地を張るだろうなぁ。・・・作る。って言うよ、ほら見ててごらん、せーの、

「・・・・・・」

あれ？紅茶を手にうつむいてぼけーっとしてる。めずらしい。リアクションが無くても聞いてない事なんてなかったのに。まぁいいや、とりあえず朝ご飯をいただきましょう。コーヒーから・・・ん？コーヒー？？

「小夜ちゃん、あのぉ・・・」

これはコーヒーじゃなくてお湯なのですが・・・。

「小夜ちゃん？ん？？」

ぼけーっとして話を聞いてない。どうしたんだろ。
「ねぇ！小夜ちゃんってば！！」
ちょっと大きな声で呼ぶとようやく耳に届いたのか一瞬ビクッと反応して、
「えっ？あっ、ごめんさい」
おかえりなさい。
「どうしたの？」
さっきからご飯にも手を付けてないし、ぼけーっとしてるし、コーヒーはお湯だし、よく見ればサラダの千切りキャベツがやけに太いし、
「な、なんでもないです。大丈夫」
なんか慌ててるし。それに顔が赤い？？もしかして、
「ちょっとごめんね」
一応断ってからおでこに手を当てようとするが、
「だ、大丈夫！なんでもない！」
俺から逃げようとする。あからさまに怪しいでしょ。
「こらっ！逃げない。じっとしててよ」
とは言ってみたものの言う事を聞いてくれるはずも無く、手を当てようとすると逃げるし頭を背けてしまう。しばらく攻防戦が繰り広げられたのだが、強引に小夜ちゃんを捕まえて両手で顔を挟み込み、ちょっとだけ真剣な顔を作り見つめる。はい、小夜ちゃんサンドの完成です。ようやく観念したのか大人しくなってくれたので額を合わせてみましょうか。うーん、えーっと、合わせてみた物の全然わかんねぇ。
「うーん、ちょっと熱っぽくない？ちょっと待ってて」
小夜ちゃんには悪いけど、少し嘘を付かせてもらった。じゃないとちゃんと計らせてくれないだろうからさ。それじゃ体温計はっと、確か薬箱に入ってたよな。薬箱、薬箱っと、あったあった。よしよし、小夜ちゃんは大人しく待っててくれてたね。
「はい、体温計。この先を耳に入れるんだよ」

ちょっと前に物珍しくて買ってきた体温計。耳に入れるだけで一瞬で体温が測れるって書いてあったから面白そうだし買ってしまった。物珍しさは今回は効果的に作用してるみたいで、不思議そうに卵型をした体温計を眺めてしぶしぶ耳に入れてる。そしてすぐにピッっと電子音がなり、測定完了の合図があった。おおっ！すげぇな。

「どれどれ、貸して」

温度を見ようとするが、なかなか俺に手渡してくれない。あきらかに渡すのを嫌がってる感じ。こりゃ自覚症状があるみたいだな。

「こら。早く頂戴」

眉間に皺を作り、そろそろ怒りますよってわざとアピールする。するとちょっとだけ泣きそうな不安そうな顔をしてしぶしぶ渡してくれた。さっきから卑怯な手を使ってごめんね。

受け取った体温計の表示を見る。”３８．７度”

「おもいっきり熱あるじゃん。大丈夫？しんどくない？」

これだけ熱があったら体もだるいだろうな。でも咳もくしゃみもしてない。ウイルス性じゃないのか？

「大丈夫。なんともない」

なんとも無いわけないでしょ。

「何やせがまんしてんの。ちゃんと寝てないと。病院行く？」

内科でいいのかな？さすがに小児科じゃなくていいよね。

「平気。もうちょっとしたら直るから」

なるほど、自己治癒能力ってやつか。なら・・・って、

「そんなわけ無いでしょ。病院行くよ」

お盆だからやってるかなぁ。後で調べないと。

「さぁ、ほら行くよ。もうちょっと温かい恰好の方がいいよね」

「大丈夫だから・・・」

相変わらず頑固だなぁ。

「駄目だって、熱があるんだから」

「もうっ！大丈夫なんだってばっ！！」

机をバンっと叩いて勢いよく立ち上がり部屋に行こうとするが、

歩き出した一歩目で体が斜めに傾いていき、
「危ないっ！！」
丁度体温計を受け取る為に傍にいたから、倒れこむ前にぎりぎり抱きかかえる事が出来た。いや、本当に危なかった。そのまま頭からいったら洒落にならない。体調が悪いのにいきなり立ち上がるから立ち眩みだろうな。
「まったくもう、大人しくしてないと駄目でしょ」
一応苦言を。小夜ちゃんは目を瞑って苦しそうに口で息をしている。ったく、どこが大丈夫なんだか。しばらく腕の中にいたが、頭に血が戻ってきたのか俺の肩に手を置き支えにして立ち上がろうとする。こらこら、
「駄目だってば。もう、しょうがない」
言って聞かない子には実力行使です。そのまま膝の裏に腕を回し、もう片方の腕で肩を抱いて一気に両腕を持ち上げる。よっこいしょっと。びっくりした、気合を入れたけどその必要が無い程軽い。これならひ弱な俺でも大丈夫だな。抱きかかえられ暴れるかと思ったけど、突然の事でどうすればいいのか戸惑ってる様子。よし、今のうちに部屋に運ぼう。小夜ちゃんを抱きかかえたまま部屋に連行する。部屋に入るとパジャマが布団の上に畳んであったからどけてベッドに寝かす。
「いいかい。熱があるんだから大人しくしてる事」
無理やり連れてこられて起き上がるんじゃないかと思ったけど大人しくしてる。さっき無理をしたから眉間に皺が少し寄って息も上がって苦しそう。俺が思ってる以上に体調が悪いようだな。一度大きく目を閉じた後、不安そうな顔で俺を見て、
「でもお祭りが・・・」
あぁ、そう言えばお祭りだったな。やっぱり楽しみにしてたんだろう、可哀想だけど、
「残念だけどしょうがないよ。また来年もあるし、今日は寝てようね」

なるべくやさしく、諭すように。だけど首を振って、
「加奈ちゃんが楽しみにしてたから・・・」
あぁ、そうか。だからと言って、
「体調が悪いのに無理して行っても倒れるかもしれないんだからしょうがないよ。加奈ちゃんの事は気にしないでいいよ、大丈夫」
確かに水を差す事になるけど、だけど加奈ちゃんなら大丈夫。そんな事を気にし始めたらきりが無いし。
「でも・・・」
やっぱり気にはなるよね。
「加奈ちゃんは大丈夫。だって加奈ちゃんだよ？それよりも小夜ちゃんは治す事だけど考えないと。まずは病院に行くよ」
近くでやってる病院を探さないとな。どちらにしろ早苗さんに連絡しないといけないからその時に聞こうか。等と考えてると俺の腕が掴まれ、
「・・・病院はやだ」
そんな子供みたいな・・・いや、子供だったな。
「やだって言われても、お医者さんに診て貰わないと駄目でしょ」
掴んでいる手に力を込めて、泣きそうになりながら首を振って、
「・・・やだ」
そんな顔をされると、ねぇ。ただの我侭って感じでも無いしなぁ。しょうがない、
「わかったよ。だけど条件が2つあるんだけど、1つは小夜ちゃんは治すことだけを考えること。2つ目は自分の症状を素直に話す事。いい？これが守れなかったら無理やりでも連れて行くからね」
安心したのか顔を少し緩め頷く。悪化するようならそんな事も言ってられないけど、今はまだ大丈夫だろう。しばらく様子を見るとして、それよりも安心させて安静にする方が優先だ。
「よしっ、それじゃ教えて。頭は痛くない？」
弱々しく頷く。
「お腹は？」

「・・・痛くない」
「他に痛いところは？」
「・・・ない」
「咳もくしゃみも我慢してない？」
「・・・うん」
「喉はイガイガしてない？」
「・・・うん」
「暑い？寒い？」
「・・・少し寒い」
単純に熱があるだけかな。咳も出てないから肺炎とかじゃないと思うけど、とりあえず寒いって事だから、
「わかったよ。それじゃ電気毛布を持ってくるから着替えててね」
さっきどけたパジャマを渡して頷いたのを確認し、部屋を後にする。確か電気毛布は俺の部屋の押入れにあったはず。ずいぶん使ってないけど壊れてないよな。押入れに顔を突っ込んで奥のほうを探すと、あったあった。近くのコンセントに差して電源を入れてみると一応電気は付くみたいだから多分大丈夫だろう。ついでに冬の掛け布団も出す。
電気毛布と布団を抱えて小夜ちゃんの部屋に戻ると着替えを済ませて、ベッドに腰掛けて俺を待っていた。だから寝てようよ、丁度よかったけどさ。
敷布団の上に電気毛布を敷き、小夜ちゃんに寝てもらって持ってきた厚手の布団をかける。電気毛布に電源を入れて温かくなるのを待とうか。
「そう言えば食欲はある？」
朝ごはんを食べる前だった事を思い出して今更確認すると、
「・・・いらない」
だろうね。本当なら何か口にしないと駄目なんだろうけど、寒いって事だからまずは寝て体温を無理やりにでも上げよう。一眠りしてから食べればいいよね。電気毛布を触ると温かくなってきた。よ

かった壊れた無かったよ。さてと、早苗さんに連絡してこないと。
「それじゃゆっくり寝てるんだよ、いいね？」
ベッドに手をついて立ち上がろうとすると、手首を掴まれ不安そうな顔で見つめられる。ん？
「どうしたの？何か欲しいものでもある？」
小さく首を振る。って事は、
「ここにいた方がいい？」
俺を不安そうに見つめるだけで返事はなし。けれど掴んだ腕は放してくれない。色々とやらないといけない事があるけど、しょうがない。再びベッドの脇に腰を下ろす。
「わかったよ、どこにもいかないから安心してね」
掴んでいる手を外して握ってあげる。体をこちらに向けて空いている手も出してきたので両手で握ってあげると安心したのか苦しそうだけど目を閉じて少しだけ表情が緩む。やっぱり風邪を引くと人恋しくなるんだな。

1年目　お盆1（後書き）

小夜「・・・寒いの」
寝勒「何か掛けてあげようか？」
小夜「・・・うん」
寝勒「ふりかけでいい？」
小夜「・・・暖まるなら」

1年目　お盆2

朝食を2人分平らげ後片付けが終わった後、コーヒーでも淹れてから小夜ちゃんの為に蜂蜜レモンでも作ってあげようかな等と材料を探していると、

ピーンポーン！

あぁ、はいはい。モニターを見ると早苗さんが立っていた。

「ドア開いてますよ」

そろそろ来るんじゃないかと思って扉の鍵を開けておいたんだけど、予想は的中したな。

小夜ちゃんはあの後、目は瞑ってはいたが鼻が詰まっているらしく、呼吸が苦しそうで寝付き辛いみたいだったから頭をゆっくりと撫でていると段々落ち着いてきて、気が付けば寝息へと変わっていたので音を立てないようにリビングへと移動してきた。なんとなく子猫をあやしてきた気分だな。

「小夜ちゃーん！」

加奈ちゃんがバタバタとリビングに走りこんできた。

「加奈、静かに。うるさくするなら帰りなさい。小夜ちゃんは？どう？」

後ろから早苗さんが入ってきて加奈ちゃんを静かに叱る。加奈ちゃんは両手で口を押さえて静かにしてますってアピールしてる。そして、早苗さんが持っていた白い紙の箱を俺に手渡す。

「さっき寝たところです。電話で話した通り、風邪の引き始めみたいですね。一眠りして熱が上がりきってくれればいいんですが、もうしばらく様子を観ようと思います。これは？」

受け取った箱を少し持ち上げる。

「プリンよ。熱がある時には水分と糖分を摂らないと。特に脱水症状には気を付けなくちゃね」

「わざわざすみません、あれ？６個ですか？」

重さから結構入ってるだろうなと思ったけど、箱を開けてみると6個も入っていた。
「そう、おいしそうだったからつい。私たちの分も1つづつね」
「確かにおいしそうですね、コーヒー淹れましょうか。加奈ちゃんはアイスオレでいい？」
まだ両手で口を押さえている加奈ちゃんが大きく2回頷く。コーヒーを淹れようと思っていたところだったからちょうど良かったな。3人分の方が淹れやすくてありがたい。
「小夜ちゃんのお見舞いに来たけど慌ててもしょうがないし。それじゃ、出来るまで小夜ちゃんの様子を見てくるわ。加奈」
加奈ちゃんは口に手を当てたまま早苗さんの後を追いかけて行く。あの手が無いと喋ってしまうのだろうか。
さて、久々にサイフォンを出そう。この前アルコールも買ってきたところだし。
アルコールランプでお湯を沸かしている間に豆を挽き、諸々の準備を済ませ、沸騰するのを眺めながら待つ。そう言えば小夜ちゃんが家に来てから一度も使ってなかったな。小夜ちゃんは見たことあるかな？今度やってみよっと。コーヒーは苦手って言ってたけど、カフェオレにすれば大丈夫かな？でもなぁ、小夜ちゃんはいつも紅茶だし。
たまに晩ご飯の後、小夜ちゃんが洗い物をやっている横で俺が自分のコーヒーと小夜ちゃんの紅茶も淹れる。俺が淹れないと小夜ちゃんは朝はティーパックだし自分でもやったら？って言っても「もったいない」って紅茶葉を使おうとしないんだよね。でも俺が淹れると満更でも無い様子だし。よくわからない子だ。
そんな事を考えているとお湯が沸いてくる。一度火をどかして粉をセットし再び火を入れると再びブクブクと泡がたって来たと同時にお湯が上に上がってきた。粉が浮いてるからヘラで馴染ませて1分待ち、火を消して濡れ布巾で冷やしてあげる。最後に少しだけ粉を混ぜてコーヒーが完全に落ちたところで、

「あー、いい香り」
早苗さんと加奈ちゃんが戻ってきた。おお、ナイスタイミング。どっかで見てたのか？
「ちょうど終わったところです。小夜ちゃんはどうでした？」
早苗さんがリビングのテーブルに持ってきたプリンを3つ出しながら、
「ちょっと辛そうだったけど寝てたわ。まだほとんど汗をかいてないみたいだから夜までは熱が上がるかもね。しばらくは手出し無用と言ったところかしら」
俺はコーヒーとアイスオレを持ってリビングのソファーに移動し、残りのプリンを冷蔵庫にしまう。
「そうですか、何度ぐらいまで上がったら病院に連れて行ったほうがいいですか？」
子供だといまいち境界線がわからない。ある程度大きくなれば39度ぐらいで解熱剤を貰ってきたほうがいいかなとは思うんだけど・・・。
「そうねぇ、もうちょっと小さい子なら40度超える事もあるけど。咳もしてないみたいだし、本人が嫌がってるならそれぐらいまでは様子見ても大丈夫じゃないかしら。それにしてもロクちゃん、全然慌ててないのね。優雅にコーヒーまで淹れちゃって。いただきます、・・・・・・うーん！さすがロクちゃんねぇ」
そう言えばそうだなぁ。
「もし、小夜ちゃんから言い出したら今頃大慌てで早苗さんに連絡してたと思いますよ。でも本人はやせ我慢してましたからね、どうやって寝かそうかとか考えてたら意外に冷静になれました。ついでに今日から俺も休みですから仕事を気にせずに看病が出来ます」
久々の無防備な姿が見れて、それに普段鉄壁の小夜ちゃんの世話が出来ると思ったら不謹慎だけど嬉しかったり。
「それにしても残念ねぇ、せっかく浴衣まで買ったのに。来年までお預けかしら」

あまり表には出してなかったけど本人も楽しみにしてたみたいだからなぁ、
「小夜ちゃん次第ですけど、他の祭りがあればそっちに行こうかと思ってます。ところで加奈ちゃん、そろそろ手をどけないとプリン食べれないよ」
あれからずっと口元を押さえ続けてるけど、もしかすると突っ込み待ちだったか？いや、天然だな。
「でもお盆過ぎてからのお祭りってどこかやってるかしら？」
そうなんだよね、普通お祭りってお盆に向けてするものだからなぁ。
「まぁ後で探してみますよ。あっそうだ、加奈ちゃんごめんね、小夜ちゃんが寝込んじゃったから今年は一緒に行けないや」
「だいじょーぶ。あたしもここにいるからっ」
一気にプリンを平らげた加奈ちゃんが当たり前のように返事する。
「加奈は駄目、お母さんと帰るの。今年のお祭りはお母さんと一緒よ」
「小夜ちゃんが行かないならあたしも行かない。小夜ちゃんのかんびょ―するの」
加奈ちゃんがイヤイヤと駄々をこねる。さてと、
「実は加奈ちゃんにお願いがあるんだ」
「なーに？」
目を輝かせて俺を見つめる。きっと俺の手伝いが出来ると思ってるんだろうな。
「加奈ちゃんはお祭りに行って、小夜ちゃんのお土産を買って来て欲しいんだ。小夜ちゃんが熱を出して、そのせいで加奈ちゃんまでお祭りに行けなかったら小夜ちゃんは気にするからね」
「・・・でもぉ」
加奈ちゃんは戸惑ってる様子。
「加奈ちゃんは自分が熱を出して、小夜ちゃんがお祭りを楽しめなかったら嫌でしょ？」

「うん、やだ」
「だから加奈ちゃんは小夜ちゃんの分も楽しんで来て、いっぱいお土産話を聞かせてあげてよ。小夜ちゃんも加奈ちゃんの事を気にしてたんだからさ、自分のせいで楽しめなかったって責任を感じないようにね」
　あの時、加奈ちゃんが楽しみにしてるからって無理しようとしてたから治す為にも安心させないとね。多分、あの子の事だから自分が行けなかった後悔よりも加奈ちゃんに水を差した後悔のほうが先に立つ筈だから。
「うん、わかった！」
「それじゃお小遣い、これで小夜ちゃんのお土産を買ってきてね」
「まっかせて！」
「お願いね」
　よし、これで加奈ちゃんの件は終了っと。説得が終わると早苗さんが腰を上げて、
「さてと、そろそろ行こうかしら。ロクちゃん、一先ず今はいいけど何かあったら必ず連絡してくるのよ、いい？わかってるわよね？」
　実は電話で早苗さんが看病をかってでてくれたのだが丁重にお断りした。俺は小夜ちゃんの親だからそれぐらいは1人でさせて欲しいと我侭を貫いた結果だ。小夜ちゃんの今の症状を説明して、慌てる状態じゃないと判断したのか早苗さんもわかってくれたみたいで、とりあえず様子を見ると見舞いに来てくれたのだった。
「ええ、余計な心配までかけてすみません。わからない事だらけですぐに連絡すると思いますがよろしくお願いします」
　玄関先まで見送りに出る。
「すぐに来れる様にしておくから遠慮せずに電話してくるのよ。いいわね？」
「ええ大丈夫です、まかせてください。ありがとうございます」
「そう、それじゃ行くわね」
「ロクちゃん、またねー」

２人とも別れの挨拶をして離れていくが、心配なのか後ろ髪を引かれさっきから何度も振り返る。俺は大きく手を振って問題ない事をアピールして２人の姿が見えなくなるまで振り続けた。もしここで先に家に入ると戻ってきそうなんだよな。そんな信用が無いのか？俺は。

家に戻ってすぐに小夜ちゃんの様子を見に行く。小夜ちゃんの部屋から出てまだそんなに時間が経っていないが、心配なものは心配なんだよ。

ノックをして部屋に入り、小夜ちゃんが寝ている事を確認してベッド脇に腰を下ろす。まだ若干呼吸が上がっているがさっきより大分落ち着いてきたかな。しばらくそのまま小夜ちゃんの寝顔を見つめる。この子の寝顔をちゃんと見るのは何度目だろう。沖縄の夜は疲れててすぐに眠ってしまったから２度目かな？１度目は俺の部屋で眠ってしまい涙を見せた夜だったな。

結局あの晩の涙の理由はわからないし、きっと小夜ちゃんに聞いても理由がわかっていたとしても教えてくれないだろう。なんだかんだ、この小学生の事が理解出来ないんだよな。大分良くなったとは言え未だに俺に遠慮してるし。まったく、父親として俺はやっていけるのだろうか。自信が無いんだよなぁ、この子に好かれてるのかどうかすらわかんねぇってのは問題だろ、一緒に暮らす娘なのにさ。

1年目　お盆2（後書き）

加奈「お土産何がいいかなぁ」
寝勒「何でもいいよ」
加奈「金魚すくいの網とー」
寝勒「・・・・・・」
加奈「水ヨーヨーの針と射的の玉！」
寝勒「あんたに良く似た娘だな、課長」

1年目　お盆3

「あ、あのね、僕・・・」
見上げると逆光で眩しい中、やさしく見守るように微笑んでくれてる気がする。
「ずっと、ずっと言いたかったんだ！あ、あのね・・・」
俺はずっと言えずに後悔していた事をやっと口にしようとする。
「あ、ありがとう・・・お、お、お、お・・・」
もうちょっと、もうちょっとで言える。
「・・・お、お、えっ！？ちょっと待ってよ！ねぇってば！！」
やさしく微笑んでくれていたのだが急に寂しそうな表情で振り返り、俺に背中を向けて歩き出した。
「僕、まだ言ってないよ！ねぇ！」
一度もこちらを振り向かずに光の中へ。
「だめだよ！行かないでよ！お・・・お・・・」
いやだ！一人にしないで！俺はまだ言ってない！！

「お、おかあさん！！」

体が落ちる感覚に驚いて目が覚める。ここは？まわりを見渡すと、白いカーテンが風に揺られて、白い小さなテーブルに汗をかいたグラス、そして・・・
「・・・起きた？」
ベッドに寝ている小夜ちゃんが心配そうに俺を見ていた。あぁ、小夜ちゃんの部屋か。
「うん、寝ちゃってたみたいだねぇ」
確か昨日から小夜ちゃんが熱を出して、それで看病をしてて・・・ベッドの脇で寝てしまったようだな。

「・・・すごい汗。これ」
「あぁ、ありがと」
小夜ちゃんが枕元にあったタオルを渡してくれる。寝汗をかいたみたいで、体中に汗が吹き出ていた。まぁこんな夏真っ盛りに昼寝をすれば汗もかくわな。
「苦しそうだったけど・・・」
顔の汗を拭きながらゆっくりと思い出す。久々に見たな、最近は見てなかったのに、嫌な夢だ。死んだ母親の夢を見てうなされていたなんて口が裂けても言えた話じゃない、恥ずかしい。
「たぶん、暑かったからだね。それより小夜ちゃんはどう？熱は？」

「・・・うん」
体温計を渡してくれる。表示を見れば”３７．９度”
「だいぶ良くなったね。体の調子はどう？」
「・・・大丈夫」
昨日の夜中に体温が上がりきったらしく、４０度ちょっとの熱と共に汗を大量にかきはじめて熱を下げようとしていた。さすがに夜中は苦しそうにしていたが、今朝からは落ち着き始めて、少しだけだがお粥を口にし再び眠りについていた。
「さてと、喉渇いたでしょ。飲み物を持ってくるよ」
俺の喉が渇いているからだけど。腰を上げて小さなテーブルにのっている土鍋やグラスを持って台所へと向かう。
お湯を沸かし冷蔵庫にあったスポーツ飲料の残りを一気に飲み干して一息つく。さすがに昨日は寝ていないとは言えこんなくそ暑い中で昼寝するもんじゃないな。そのせいで嫌な夢を見る破目になる。それにしても懐かしい夢を見たな、もう思い出すことはないと思っていたんだが・・・。
蝉の大合唱と共にベランダでチリンチリンと風鈴の涼しい音が聞こえてきた、いい風が吹いてきたな。家中の窓という窓が開いていて風が我が家を寄り道して出て行く。こんな風が吹いていれば小夜

ちゃんも寝やすいだろう。暖めておいたティーポットに茶葉を入れ、沸騰したお湯を注ぐ。残ったお湯でガムシロップを作り小さなピッチャーに入れ、大き目のグラスに牛乳を注ぎ、空のマグカップも載せる。こんな暑い日だから冷たい飲み物が欲しいと思うけど、風邪を引いているからしょうがない。

トレーに一式を載せて再び小夜ちゃんの部屋へ。開いている扉をノックして中に入ると体を起こして壁にもたれ掛かっていた。

「お待たせ、だけどもうちょっとだけ待っててね」

小夜ちゃんは軽く頷いて窓の外を眺める。さてと、トレーをテーブルにおいてミルクティーを作る。牛乳は冷たいままだから丁度良い温度になるはず。少し甘めにっと。

「はい、お待たせ」

「・・・ありがとう」

窓の外を見ていた小夜ちゃんがマグカップを受け取って、鼻を近づけまずは香りを楽しみ、口をつける。

「おいしい・・・」

そりゃ、結構。

「でも、冷たいのがいい」

だろうね。けど、

「急に冷たいの物を飲むと胃腸に負担がかかるから。今はそれで我慢してね」

「・・・・・・暑い」

カップに顔を向けたまま目線だけこちらを向けて上目使いに訴える。いや、そんな顔されても、ねぇ。あっそうだ、

「昨日、早苗さんが持って来てくれたプリンがあるけど食べる？」

一瞬目が大きく開き力強く頷く。これは珍しい反応だなぁ、目が輝いてるよ。

「わかったよ。持ってくるからそれを飲み干しちゃってね」

気休め程度だけど牛乳が胃腸に膜を張ってくれるだろうから少しぐらい冷たい物も大丈夫かな。腰を上げてキッチンへ向かい、プリ

ンを取り出す。昨日早苗さんと加奈ちゃんとで3つ食べたから残りは3つ。これは全部小夜ちゃんの分、今日明日はまともな食事が出来ないだろうからね。
　プリンを持って部屋に戻ると言いつけ通りミルクティーを飲み終えていた。もともと人肌ぐらいの温度だったし、喉も渇いていただろうからね。でも喉が乾いたときに牛乳ってちょっと可哀想だったかな。この暑さの中、汗をかいて体がベトベトしてるし気持ちが悪くなりそうだよな。
「はい、どうぞ。冷えてるから少しずつね」
　カップのふたを外してスプーンに1口分をすくい小夜ちゃんの口元へ運ぶ。
「・・・自分でやるから」
　なんて断わられるけど、、
「あっ、こら！落ちちゃうから早く！」
　困ったような恥ずかしがっているような複雑な表情をしながらも口を開けてくれて、そこへスプーンを運び入れる。どうせ嫌がられるだろうと思ったから強硬手段に出てみた。まぁ成功って事でいいよね。
「んー！」
　目を閉じて声にならない様子で、満足そうに若干頬が緩む。冷たいものをようやく口に出来たから余計に嬉しいんだろうな。その後もゆっくり少しずつプリンを食べさせて半分ぐらいまで行ったところで、
「・・・もういい」
　と満足した様子。
「ん？もういらないの？」
　軽く頷く。おっ！これはすごく嬉しい！なんとなく無理してでも全部食べようとするかと思ってたけど、半分でいいって事は気を使わずに自分に素直になった結果って事だよな。
「そう、なら残りは冷蔵庫に閉まっておくね」

プリンを運ぼうと思ったけど、その前にもう一杯分のミルクティーも作ってしまおう。このまま置いておけば常温になって少しぐらいはマシになるだろうし。

再び横になって貰いもう一汗かいてもらうとして、その間にプリンを冷蔵庫へ運び、ミルクティーのマグカップ以外を洗って片付けて再び小夜ちゃんの部屋へ戻る。さてと、時計を見ると4時過ぎたところだな。

「小夜ちゃん、食欲はある？」

そろそろ買い物に行かないとね。

「・・・あんまり食べたくないかも」

そうかぁ、どうしようかなぁ、

「それじゃ、作るだけ作るから食べれるなら少しでも食べようね」

今朝もそれで2口3口ぐらいしか食べなかったけど、まったく食べないよりか良いと思うし、それに残りは俺のご飯になるんだし。しぶしぶだけど小夜ちゃんも頷いてくれて、さぁて何にしようかなぁ。ただのお粥ってのは味気ないし、雑炊を作ってもいいんだけど、ここは、

「ミルク粥なんてどう？」

「ミルク・・・がゆ？」

首をかしげて不思議そうにしてる。あれ？知らないのかな？

「うん、ミルク粥。お粥を牛乳で作るんだけど、どう？」

眉間に皺を寄せて考え事をしている。どんな感じになるのか想像してるのかな？

「・・・うん」

なんか納得がいかない様子で疑いながら返事をする。

「そんなまずいものじゃ無いと思う。自分でも何度か作ってるからさ」

俺の味覚がおかしくなければ、だけど。

「う、うん・・・」

疑っているのか一瞬どもったし。何？俺が信用出来ないって事で

すか？結構おいしいのになぁ。まぁいいや、一度食べてみて口に合わなければ雑炊でも作るとするか。
「それじゃ、買い物に行ってくるよ。その間、小夜ちゃんはもう一眠りぐらいしておいてね」
「・・・うん」
布団を掛けなおしてあげて、部屋から出ようとする。お願いだからそんな寂しそうな顔をしないでよ。なんか悪い気がするじゃん。キッチンへ行きお米を炊いて冷蔵庫の中身を確認する。牛乳は残り少ないから買ってくるとして、後は・・・まぁ出たとこ勝負でいいか。自分の部屋で財布と家と車の鍵を無造作にポケットへ入れて、家を出ようとする前にもう一度小夜ちゃんの部屋を覗き、
「じゃあ行ってくるね。すぐに帰ってくるからさ、少しだけ我慢しててね」
多少は気を張り始めたのか小さく手を振って見送ってくれる。でも寂しそうな顔は隠しきれてないから。よし、じゃあ急いで帰ってくるか。
家を出ようと扉を開けると、
「きゃっ！」
「うおっ！」
なんの気にもせずいつも通り扉を開けると玄関先に人が立っていて、半端なく驚いてしまった。あれだよ、普通は人がいないものとしているから無警戒でびっくりするんだよ。お化け屋敷とは別の原理だよ。それにしても、どこかで見た事ある人だなぁ・・・って、進藤さん！？
「びっくりした、いきなり出てこないで下さいよ」
胸元に手をやり、深く息を吐いて落ち着きを取り戻そうとしている。
「いや、驚いたのはこっちも一緒だから。って、どうしたの？」
すると、持っていた小さなカゴを胸元まで持ち上げて、
「お見舞いに来ました。小夜ちゃんが風邪をひいたって聞いたもの

ですから」
　そうかぁ、ありがたいねぇ。って、え？
「わざわざありがと、だけど誰から聞いたの？課長？？」
　まだ早苗さんにしか連絡してないから進藤さんが知るとしたら課長しかいないんだけど、こんな盆休みに課長と連絡とったのか？
「いえ、本人ですよ。聞いてませんか？」
　本人？ってえーと、小夜ちゃん？何を聞いてないの？少しだけ考えていると、
「実は小夜ちゃんとはメル友なんですよ」
　ほうほう、へー・・・え？
「そうなの？知らなかった・・・。あっ、ごめん、中にどうぞ」
　玄関先で立ち話をしていたのに気がついて家の中に招く。駄目だねぇ、こういう時にすぐに気が付かないと。
「でも、草野さんはどこかに行かれるところでは・・・」
　玄関の扉を大きく開いて進藤さんを招く、
「うん、夕飯の買い物にね。でも小夜ちゃんが一人で暇してるだろうし相手してあげてよ。すぐに戻ってくるつもりだしさ」
　ささ、どうぞどうぞって上がってもらい、すぐ隣の開いているドアをノックする。今更ノックしても玄関での会話はまる聞こえなんだけど、一応ね。
　中を覗くとカーディガンを肩にかけ、体を起こして準備万端のご様子。
「進藤さんがお見舞いに来てくれたよ」
　俺の後に進藤さんが小夜ちゃんの部屋に入ってくる。
「こんにちは、調子はどう？」
　小夜ちゃんの机からイスを持ってきて、ベッド脇に座ってもらう。さてと、買い物に行こうかな。
「草野さんちょっと待って下さい。これ」
　あぁはいはい、忘れてた。部屋から出かけていた体を捻り、進藤さんが持ってきたカゴを受け取る。目の前で失礼ながら中身を見る

と、
「おおっ！小夜ちゃん桃だよ。今いる？剥いてこようか？」
「ううん、後にする」
「そう、なら冷蔵庫に入れておくね。それじゃ買い物に行ってくるよ。進藤さん、後よろしくね」
進藤さんの返事を聞いてから家を出る。それにしても小夜ちゃんと進藤さんが連絡を取っていたなんて全然知らなかったなぁ、なんとなくほんの少しだけ嫉妬が・・・。いや良い事なんだけどね、相手も進藤さんなら安心だし。
よし、それじゃ気を取り直して買い物買い物っと。はやく元気になってもらわないとね。と言う事でいつものスーパーへ。お盆なのに営業中って一昔前は考えられないよなぁ。今じゃ元日でも営業してる店が多い。なんとなく季節感が無くなって来たみたいで少し寂しいよね。正月は店も閉まっちゃって、遊ぼうにも遊ぶ友達がいなくて、せっかく貰ったお年玉もあれこれ何を買おうか前もって計画をしてるんだけど店が開いてなくて三ヶ日はお預けってのが定番だったのになぁ。
みんな帰省中だから人が少ないと思ってたスーパーも普通の家族連れが結構いる。お盆だから田舎に帰省するってのも無くなって来たのかな？テレビでは毎年のように帰省ラッシュを伝えるニュースが流れるけど、こんなに人がいるって事は帰ってない人も多いのかも。まぁ帰省する田舎が無い人なのかもしれないな、俺みたいに。
さて、いつも通り野菜コーナーから攻めて行く。とは言え、このあたりはスルーします、肉とか魚はまだ早いからね。低温殺菌の牛乳やヨーグルト、赤い卵と後はチーズだな。チーズはどれにしようかなぁ、ちょっと奮発してチェダーとゴーダにしよっと。明日は明日の風が吹くって事で、取り敢えずは今日の分と明日の朝用でいいな。こんな買い方したって小夜ちゃんが聞いたら怒るだろうなと思い1人クスクスと笑ってしまう。そして今の俺は周りから見れば変人だなぁってまたクスクス。

さっさとレジを通って家に帰る。駐車場に車を停めてエレベータを待とうと思ったけどまだ上の方にいるみたいで時間がかかりそうだから階段で3階へ。家の前について鍵を取り出して開けようとすると、小夜ちゃんの部屋の窓が開いていて2人の話し声が聞こえてくる。

「気にする事ないのに、そんな事」

「でも・・・・・・やっぱりイヤです」

「そう、でも絶対大丈夫よ」

「・・・・・・」

いや、立ち聞きは良くない。俺はここにいなかった、俺は無いも聞いてない。何を気にしてイヤで大丈夫なのか、俺の何が嫌なのか非常に、すごーく気になるところだけど聞こえてきませんでしたよ、はい。

大げさに音を立てて鍵を開け、

「ただいまー！いやぁ暑いねぇ」

とわざとらしく家に入って突然会話を断ち切ってもいけないのでそのままキッチンへ。買ってきた物を冷蔵庫へ入れてそろそろ小夜ちゃんの部屋へ行こうと振り返ると、進藤さんが小夜ちゃんの部屋からこちらに向かって来るところだった。

「草野さん、私そろそろ帰ります」

「えっもう？もうちょっとゆっくりしていってよ。今からコーヒーでも淹れるからさ」

せっかく来て貰ったのにお構いなしでは申し訳ない。

「草野さんのコーヒーには惹かれますけど、残念ながら急に妹が来る事になりまして迎えに行かないといけないものですから」

「そっか、それならしょうがないね。あっ、ごめんね。俺が帰ってくるまで足止めしちゃったみたいで」

しまった、後の予定も聞かずにお願いして出て行っちゃったからなぁ。反省。だけど、進藤さんは慌てて手を小刻みに振り、

「いえ、大丈夫です。こちらに伺った時には予定は入っていません

でしたから気にしないで下さい。連絡もせずに突然こちらに向かって来る妹が悪いんですよ。少しぐらい待たせてお灸を据えないといけませんね」
と言いながら玄関へ向かう。
「じゃあ駅まで送っていくよ。電車でしょ？」
確か進藤さんは車を持ってなかったはず。本当なら妹さんを迎えに行くのも手伝ってあげたいところなんだけどさ。
「はい、電車ですがここで良いですよ」
ミュールを履いて玄関先で振り返りって申し入れを辞退される。
「でも、そんなの悪いよ」
「何を言ってるんですか草野さん。そんな時間があるなら小夜ちゃんの看病をして下さいよ」
なんて小さく笑われる。
「あぁ、そうだね。言われる通りだ。でも本当にごめん、また来て今度はゆっくりしていってよ。今度は腕に縒りをかけたコーヒーをご馳走させてね」
「えぇ、楽しみにしています。それでは小夜ちゃんにもお大事にと」

そう微笑みお辞儀をして廊下を歩いて行ってしまった。やっぱり悪いことをしたなぁ、今度会った時にでもお菓子でも用意しておこう。さてと、小夜ちゃんの様子をっと。また開いているドアをノックして部屋に入る。
「小夜ちゃん、調子はどう？」
布団に入っていたのだが、俺が入ってきたので体を起こそうとしている小夜ちゃんを止めて、イスを片付けベッド脇に腰を下ろす。
「・・・もう大丈夫」
昨日と今日で既に何度目かの大丈夫の言葉。ここまで使われるとその大丈夫には真実味が無くなるんだって今度教えてあげないとね。枕元にある体温計を小夜ちゃんに手渡して体温を測ってもらう。昨日は体温を測るのを嫌がっていたのだが、ちょっとした説教をして

からは大人しく計ってくれるようになった。ただ表示を見せるのは嫌がっている様子だけど。
一瞬にして計り終わった体温計を渡してもらい表示を見ると”38．1度”。やっぱり夕方から熱が上がり始めてきたな。
「うーん、まだ油断出来ないね。今は暑い？寒い？」
「ちょっと寒いかも・・・」
だよね、また夜中に高温になるだろうな。油断しないようにと。
「飲み物は欲しい？」
「・・・今はいい」
「食欲はどう？」
部屋の窓を閉めて、布団を掛け直す。
「食べたくない・・・けど」
「うん、少しは食べてもらわないとね」
温かい飲み物で済ませてもいいんだけど、夏風邪は体力の消耗が激しいし、これから熱が上がり始めるなら今のうちに少しでも食べてもらった方がいいと思うから。
「・・・うん。頑張る」
なんか頑張って食べるってのも変な感じがするけど、まぁ体調が悪いならそんなもんか。
「よし、なら宣言通りミルク粥を作ってくるから待っててね。ちなみに進藤さんから貰った桃入りにするよ」
布団の中で小さく頷いて承諾を得た。若干小夜ちゃんの眉間に皺がよった理由は敢えて考えないようにして、さぁて頑張って作るぞっと。
キッチンへ行きご飯が炊けている事を確認し、網のボールに半合分移しさっと水洗いをする。小さな土鍋に水をはりコンソメの素とご飯を入れて火にかけている間に桃の真ん中に一周切れ目を入れて捻り種を外して皮を剥き薄くスライスし、しばらく煮込んだ土鍋を弱火にして牛乳を入れて塩胡椒で味を調え再びグツグツ言い出したら桃を加え更に5分程煮込む。卵を黄身だけにしてチーズも両方薄

くスライスして、煮込み終わった土鍋の火を止めて卵黄入れ、真ん中の方へ行くように上から少しお粥をかけてやり、チーズをたっぷり載せて蓋をし3分程寝かせて完成っと。
よし、それじゃトレーに土鍋とトンスイとレンゲを用意して小夜ちゃんの部屋へ。
「お待たせ、出来たよー」
小さなテーブルの上に置いて、小夜ちゃんの体を起こしてカーディガンを肩に掛けてあげる。土鍋の蓋を外し中身を見た感想は、
「なんか不思議・・・」
はい、よくわからない感想です。真ん中にいる半熟になった黄身を崩してチーズが全体と良く混ざるようにかき混ぜてトンスイに移しレンゲで1口分すくいフーフーっと冷ましてあげてから、
「はい、熱いから気をつけて」
小夜ちゃんの口元へレンゲで運ぶ。
「・・・自分でやるから」
俺の口元が自然にニヤリと上がる。さて、今朝とプリンの時と同じ文句じゃバラエティーに欠けるからどんな説得で行こうかと考えていると、俺が口に出すよりも先に観念したのか恥ずかしそうに口を開けて自分からレンゲに近づいて1口食べる。
「どう？」
首をかしげて悩んでいる様子の小夜ちゃん。口に合わなかったかなぁ、ちょっと残念だ。
「・・・不思議」
そりゃ不思議だろうね。もともとは離乳食をアレンジしたものだから表現としてはチーズでコクがあって、でも果物が入って甘いし、牛乳で雰囲気はドリアみたいだしって口の中が不思議空間になるからね。お粥とかドリアとかって思いながら食べると絶対に受け入れられないと思うんだけど、小夜ちゃんは駄目だったか。
「でもおいしい・・・」
「そっか！よかったぁ。いる？」

頷いてくれて、恥ずかしそうに2口目も食べてくれる。ふぅ、一安心した。さすがに拒否されたら落ち込むどころじゃないからなぁ。つか、冒険し過ぎた。思っていたよりも心臓に悪い事が判明したので次回からは無難に行くことにしよう。

小夜ちゃんは見ているこっちが心配になるほど美味しそうに食が進み、結局一人前近くまで食べてくれた。つか、これいつもと変わらない量なんだけど・・・。回復に向かっているって事でいいのか？

その後は、やはり夜中に39度近くまで熱が上がったのだが汗を大量にかいてこまめに水分補給と着替えをしてもらい朝方には37度ちょっとまで下がった。そこから3日間ほど微熱が続いたのだが、俺の休みが終わる頃には全快とまではいかないものの回復し、なんとか夏風邪を乗り切った結果となった。

しかし、腹を出して寝ているとは思えないから風邪を引くような原因も見当たらず原因不明の夏風邪だったなぁ。まぁそのおかげで小夜ちゃんの身の回りの世話が出来たから良しとするか。

1年目　お盆3（後書き）

寝勒「夏風邪ってねぇ」
小夜「・・・？」
寝勒「馬鹿がひくんだって」
小夜「・・・」
寝勒「冬なら馬鹿じゃないんだって」

小夜「冬にひいて夏に気付くって意味なんだけど・・・」

夏休追い込み　1

カランカラーン。うおっ涼しいなぁ。
「いらっしゃいませ。開いている席へどうぞ」
あぁ、はいはい。あんまり目立つ席はイヤだなぁ。おっ、奥が開いてるな。そこにしよっと。一番奥の窓際の壁へ座ると、店員さんが水とおしぼりを持って来る。
「いらっしゃいませ、ご注文はお決まりですか？」
「ホットで」
「ホットコーヒーですね。わかりました、少々お待ち下さい」
そう言って席から離れて行く。
そろそろ8月も終わりを迎えようとしている今日。9月の足音を目前に控え、学生は夏休みの残りをカウントダウンし、更にその一部は残っている時間の少なさに気づき机に向かって悲鳴を上げている頃だろう。相変わらず日差しは自重する事を知らない様子で今日も猛暑と言う記録を叩き出そうと躍起になっている。毎年思うのだが、夏が終わる直前は必ず「猛暑」もしくは「冷夏」だったと、どちらかしか言わない気がする。いつか「今年の暑さは例年並みでした」と聞いてみたいものだ。
「お待たせしました、ホットコーヒーです」
いえいえ、全然待ってませんよ。でもここのコーヒーはいまいちなんだよなぁ。俺は気にしないんだけど風味というか香りが死んでるんだよね。たぶんまとめて淹れて湯煎しているからだと思うんだけど、早苗さんが飲んだら渋い顔するんだろうなぁ。普段は温厚な人なんだけど、ことコーヒーになると途端に厳しくなる。俺も教わっている時に何度怒られた事か。
まぁそんな思い出はいいとして、なんでこの店にいるかと言うと、ここの喫茶店は学校に近くて、
カランカラーン。

「いらっしゃいませ、おひとり様ですか？」
「いえ、待ち合わせが・・・」
入り口付近でTシャツにジャージの男がキョロキョロし、俺と目があってこちらへ向かってきて、
「すみません、遅くなりまして」
俺の向かいに座ってハンドタオルで汗を拭っている。
「いえ、今来たところです。お忙しいところにわざわざすみません」
言わずと知れた推定体育教師の岸本先生と待ち合わせをしていたのだ。
「大丈夫ですよ、子供たちが夏休みでも教師は出て来ないといけないってだけですから。なんたって、私たちも公務員ですからね。あっアイスコーヒーを下さい」
水とおしぼりを持って来た店員さんオーダーを伝えて、おしぼりで顔と首周りを拭く。
「ふぅ、すっきりしました。親父臭いからやめろと言われるんですが、親父と言われてもこの気持ちよさは手放したくありませんね」
「それは同感です。脂ぎった顔をしているのとどちらが良いか比較してもらいたいものです」
「確かにその通りですね。小夜ちゃんはどうですか？宿題は終わっていますか？」
「えぇ、7月中にはほとんど終わっていた様子です。今日は天気が良いから加奈ちゃん・・・いえ、松山さん達とプールに行ってます」
沖縄旅行から帰ってきてから毎日の様に加奈ちゃんが家に来て2人で宿題をやっていたみたい。加奈ちゃんが勉強を教えているのかと思いきや、1学年下の小夜ちゃんが教えていたと言うのだからびっくりした。何と言うかまぁ・・・ね。
「そうですか、それはいけない事を聞きました。夏休みの宿題は毎日コツコツやるものです」
うわっ、しまった。
「あっ、いえ、その・・・」

眉間に皺を寄せて厳しい顔をする岸本先生。やばい、どうしよ。相手は担任の先生だって忘れてた。えーっと、何か良い言い繕いは、やべぇ浮かばねぇ・・・。

「・・・冗談ですよ。言われた通りに毎日やる子供なんて絶滅危惧種です。まとめてやってしまう子供がほとんどですよ。それが早いか遅いかの違いだけで」

にやけた表情を俺を見てる。からかわれたみたいだな。

「いやぁ、心臓に悪いですよ先生。それにしてもその違いは大きいですね、私も後半のラストスパート組でしたが１００メートル９秒を切る勢いでしたよ」

悲鳴を上げたいけど、その悲鳴を上げている時間が惜しいんだよな。結局一部はやりきれずに学校が始まってしまうのだが。

「大きな声では言えませんが、私もその一員です。その癖は今でも抜けません」

クスクスと小声で笑っている。聖職者とは言え、中身は人間だしね。世の中には反面教師で教える先生もいるとかいないとか。

「そんな事はさておきまして、聞きたい事とは何でしょうか」

丁度アイスコーヒーも届き、一口飲んでから本題に入ろうとする。その一口で半分減った事についての突っ込みは今回はやめておこう。

「ええ、お聞きしたい事とは・・・小夜ちゃんの事なんです」

「でしょうね。それ以外の事を聞かれても困りますが」

「はい、やはり気になる事がありまして、先生は何かご存知の様子でしたのでお聞き出来ればと」

その為に会社を早退までして来たんだから。

「以前の学校・・・ですか？」

いや、学校だけじゃなくて、

「正確には以前の生活と言った方がいいと思いますが・・・」

まずは岸本先生に聞くのが早いと踏んだ。核心には迫れないと思うが材料を集めない事には料理が出来ない。

「わかりました。ですが私が知って事なんて少ないですよ」

「ありがとうございます。少しでもあの子の事がわかれば十分です」
本人に聞くのが一番手っ取り早いのだがデリケートな部分もはらんでいそうだし、何より小夜ちゃんは話してくれないだろう。家に来た時から既に試みている訳だし。
「そうですね。私も気になっていたので前の学校に問い合わせてみました。やはりと言いますか、入学当初から休みがちだった様で、3年生では全く学校に行ってなかったみたいです」
やっぱりか。保護者面談の時の思わせぶりはここから来てるんだな。
「学校に行ってなかった理由はなんですか？」
「そこまでは聞けませんでした。以前の担任の先生は既に異動になっていまして」
そうかぁ、そこが一番肝心なのに・・・。
「たまたま私の大学時代の同期がいましたので聞いてみたんですが、草野さんはご存知の通り、前はおばあさんと二人暮らしだったとか」
「えぇ、その方から手紙で小夜ちゃんを託されました」
小夜ちゃんのお母さんの叔母さんだな。
「そしてよく警察沙汰になっていた」
！？
「ちょっ、ちょっと待ってください。警察沙汰？」
「はい、その為に児童相談所が出入りしてたみたいです。ご存知ではありませんでしたか？」
いや、知るも知らないもそんな事は微塵も感じさせなかった。もちろん手紙も書いていないし本人からも聞いていない。
「どういった理由で警察が呼ばれたのかわからないそうです。最近の教育現場では触らぬ神に祟りなしと、家庭環境まで口を出そうとしませんから、全く嘆かわしい事です。同じ教育者としてお恥ずかしい限りで」
そういって俺に頭を下げる。
「いえ、顔を上げてください。何も岸本先生に限った話ではありま

せんし、他の先生の代表で頭を下げて下さるのでしたらそれは私にではありませんから」
「本当に面目ありません。私が知っている事はこれぐらいですね、同期の先生も口が堅くこれ以上の内容は聞けませんでした」
「いえ、十分です。あとは自分で調べてみます。何から調べてよいかわからなかったので、大変助かりました」
　まさか警察沙汰が起きていたとは全然思いもしなかった。まぁでも、そのおかげで調べるきっかけが出来た事に違いない。近いうちに前に住んでいたところへ行って近所の人に話を聞いてみよう。きっと何か出てくるはずだ。
「わかった事でもし差支え無いようでしたら私にも教えていただけませんか？」
「それはもちろん。気に掛けていただいてありがとうございます」
　岸本先生からの情報で引き出せる内容が多岐に渡りそうだ。わかった事でも聞いた内容以上の事がある。
「それでは、私は仕事がありますので失礼します」
「お忙しいところすみませんでした」
「とんでもない。お力になれることがありましたら遠慮なく仰って下さい」
「ええ、ありがとうございます」
　一礼をして店を出て行った。さて、それじゃ多少の進展もあった事だしこれから本腰を入れて情報集めをしないとな。にしてもここのコーヒーは美味しくないなぁ。

夏休追い込み　1（後書き）

寝勒「いつもジャージなんですか？」
岸本「ええ、そうですけど？」
寝勒「学校でもジャージですか？」
岸本「はい。フォーマルですから」
寝勒「まさかプールの授業でも？」
岸本「まさか着替えるとでも？」

1年目　秋1

ピエロのギャロップ。
地獄のギャロップ。
郵便馬車。
トランペット吹きの休日。
剣の舞。
ロシアの踊り。
・・・まぁ定番はこれぐらいかな。
「それにしても晴れたなぁ、見事に天気予報が外れやがったぜ」
「そう言えば時々雨ってなってましたね」
空は雲一つ無い快晴、ピーカンって奴だな。見上げると宙に並んだ万国旗。
「あっロクさん、5年生はお昼からオクラホマがあるよ。いくの？」
手元の冊子を見て俺に確認してくる。
「うーん、どうしようかなぁ。あんまり気が乗らないかも。太一君にお願いしたいなぁ」
「だめよ。せっかくなんだからロクちゃんが行かないと」
「いやぁ、恥ずかしいと言うかなんと言うか・・・」
いい歳してダンスってのもねぇ。
「小夜ちゃんが可哀想よ」
いえ、早苗さん。そんな事言われてもですねぇ、
「俺よりも太一君の方が・・・」
「ロクちゃん！」
「はい。わかりました」
わかりましたからそんな目で威圧しないでください。
「おい、綱引きあるか？」
「ちょっと待って、えーっと。あっ、あるよ。午前の最後だね」
「よしっ、今から腕が鳴るぜ」

「ねぇ、そろそろじゃない？」
「あっホントだ。親父カメラ、カメラ」
「おっおう・・・」

”選手入場！”

９月末。天気は快晴、絶好の運動会日和です。本日は小学校より松山家とともにお送り致します。さて入場門からは子供たちが続々と石灰で引かれたトラックの真ん中へ整列して行きます。まずは低学年の子供達から入場しておりますが解説の太一さん、今年の運動会の見所はなんでしょう。
「ロクさんいきなり口調が変わってどうしたの？まぁいいけど。そうだねぇ、やっぱりここの小学校ならではの事かな？」
何か特色でもございますか？
「僕も一昨年までいたからね。赤組と白組が本気になって勝ちを競うのが毎年恒例になってるよ。ロクさんも知ってるでしょ？」
えぇ、私も赤組と白組の決着を見届けてかれこれ８年目となります。噂によると勝利したクラスの先生に寸志が出るとか出ないとか。どうでしょう、今年はどちらの手に優勝旗が渡ると思われますか？
「難しいねぇ。勝利得点の高いのはクラス対抗リレーと最後の騎馬戦だけど、対抗リレー次第かな？」
今年は松山　加奈さんは６年生ですよね？今年もリレーにエントリーされていますか？
「うん。念願のアンカーをやるって家で騒いでたよ」
やはりですか。今年もクラス対抗リレーは各学年のそれぞれの組で１名が選出され１・２走者はトラック半周、３・４走者は１周、５走者は２周でアンカーだけはトラック３周との事でよろしいですか？
「そのはずだよ」
そう言えば一昨年のアンカーを務められたのは太一さんでしたね。

いかがでしたか？
「プレッシャーがすごかったよ。毎年最後で巻き返される光景を何度も見てきたから心臓が飛び出るかと思ったよ。結構なリードがあったから良かったけど、同着でバトンが回ってきたら負けてたね」
リードと言えば、昨年の松山　加奈さんの活躍でしょう。
「あれは驚いたね。昔から足は速いと思ってたけど、ほとんど半周差を5走者で埋めちゃったんだから」
あれはすごかったですね。今年はアンカーとの事ですから大注目です。リレーは白組勝利予想でよろしいですか？
「去年の事があるからなんとも言えないけど、多分難しいんじゃないかな？」
と言いますと？
「ほら、だって去年のアンカーは・・・」
そうでした、去年は5年生で大抜擢された須藤君がアンカーでしたね。ほぼ並んだ状況から松山さんの健闘空しく白組のアンカーは赤組のアンカーに圧倒的な差を付けられて負けてしまいました。となるとやはり今年も須藤君がアンカーでしょうか。
「そうだと思うよ。今年もアンカー次第かもしれないね」
そうですね。今年も対抗リレーが大注目です。さて、グラウンドでは校長先生の挨拶が終わり、昨年の優勝組の赤組による優勝旗の返還が執り行われ、選手宣誓をしております。秋口とは言え炎天下の中、皆の凛々しい表情に今年も大いに盛り上がることを期待させられます。正々堂々戦い良い汗を流す姿を我々に見せてくれるでしょう。この後準備運動を行い、早速演目へと移っていきます。まず始めは4年生による徒競走です。それでは一旦司会進行をテントへ移します。それでは皆様、また後ほどお目にかかりましょう。
「おい、ロク。さっきから何をやってんだ？」

1年目　秋1（後書き）

寝勒「校長先生って話が長いよね」
小夜「・・・うん」
寝勒「大変だよね」
小夜「・・・何が？」
寝勒「きっと日本人の為なんだよ」
小夜「・・・」
寝勒「共通話題にしないといけないんだよ」
小夜「・・・その為なの？」

1年目　秋2

「あんなの卑怯だろっ！！」
太陽さんが真上から無遠慮に照らす日差しに、ほんの少しだけでも雲さんが登場して太陽さんのあられもない姿の要所々々を隠してあげてもいい気がするんだよね、どこが要所なのかわかんないけど。帽子を持って来れば良かったな。
「はいはい、わかりましたってば。あっ早苗さん、この唐揚おいしい」
「そう？わかる？実はねぇ・・・」
「納得いかねぇ！再戦だ！！」
課長が持っていたおにぎりを握り潰しながら立ち上がり誰も居ない運営テントを睨み付ける。ってか米粒がこっちまで飛んで来たって。
「親父、終わった事なんだからいつまでもグダグダといい加減にしろよ」
太一君が次のおにぎりに手を伸ばしながら目線を上げずに静かに言い放つ。
「そう言うがお前も見ただろ！あいつら・・・」
「それと食べ物を粗末にしない。立ってると邪魔だから座って」
課長の言葉を遮って最後だけ少し上目に睨む太一君。言葉を荒げてないから状況的には更に怖い。案の定、課長も同意見だったのか、
「お、おう・・・」
それでも渋々といった感じで座りなおし、手についている元はおにぎりだった物を直接口に運びながら小さい声で苦言を続けている。
さっきから何をぶつくさ言っているのかと言えば、午前最後の競技である保護者の綱引きが原因だ。いくら保護者と言えど子供たちの競技結果に加算される為に保護者も必死なんだろうけど、両陣営とも入場から睨みあいが続き変な緊張感が会場を包んで綱を手にし

腰を落とし後は合図を待つだけとなった。課長も例外ではなく加奈ちゃんも小夜ちゃんも白組なので当たり前の様に白組の一番後ろで綱に巻かれ今にも射殺さんと体制を整えていた。どこからか生唾を飲み込む音が聞こえそうな静けさの中、運命のピストルが鳴った途端に白組は上半身を持っていかれ、課長も体制を崩してしまいあっという間に決着が付いてしまった。あっけない幕切れにさっさと選手退場と綱が片付けられ午前の部が終わり、こうして松山家持参の昼食を口にしているのだが課長いわく「あいつらフライングしやがった」とさっきから息巻いてる。確かにビデオを見返してみれば若干早かった様な気がするけど、でも白組が出遅れたと言われても納得のいく結果だと思う。まぁどちらにしても運動会自体はつつがなく進行しているんだから納得しなくても受け入れないと。

「それにしても今年は気持ち良いぐらいボロ負けですね」

午前の競技は散々な結果に終わった。なんと白組全敗。しかも徒競走とかは午前中に多くて、午後はレクリエーションが多めだから競技としてはその大半を終えた事になる。

「そうよねぇ。ここまでくると神様の悪戯どころじゃ無いわね。もしかして八百長？」

「八百屋の息子で長兵衛って子がいたらその子だね」

太一君、長兵衛さんは負け続けないでたまに勝ってたらしいよ。それより八百長の対義語がガチンコなのは納得いかないよね。

「それで、午後からの巻き返しはいけるの？もしかしてもう勝敗は決まっちゃったとか？」

素朴な疑問を早苗さんが口にする。確か細かい得点配分はプログラムにのってた筈。そのプログラムは・・・。

「えーっと、ちょっと待ってね」

プログラムを手に太一君が計算を始める。あぁ太一君が持ってたか。まぁここは現役中学生にまかせましょう。

「取りあえず対抗リレーはなんとしてでも取らないと勝ちが見えてこないかも。綱引きを取られたのが痛いね」

「ばっ！ばららふぉれは！！」
「はいはい、反則があったんですよね。課長は飲み込んでからしゃべって下さい。それで結局どうなの？」
おとなしかった課長が騒ぎ出すとまたうるさいから太一君を促す。
「そうだねぇ。一般競技を半分の2勝と対抗リレーと騎馬戦を取れば
ばギリギリ逆転で、もし一般競技を3勝されたらアウト、もちろん午後から全勝すれば文句なし」
学校側も考えてるのかな？一応午前だけでは決着がつかない様になってるみたいだけど、今年のような事が起きれば子供たちのモチベーションが下がってネガティブスパイラルに陥るのに。でもまぁそうそうこんな事が起きるとは思えないけど。
「じゃあ勝負は加奈ちゃんの肩にも重く圧し掛かってる訳だ。プレッシャーとか大丈夫かなぁ」
「あいつなら大丈夫だろ」
隣でお茶を一気飲みし課長がニヤニヤといつもの意地汚い笑いを見せている。
「むしろ勝ち負けを考えて無さ過ぎで心配だけどな」
擬音で表すなら、ガハハ！って感じの笑いで更に自分の言葉でツボに嵌ったのか徐々に苦しそうに引き笑いへと変化していった。なんだこのおっさん、自分の娘をネタに盛大に笑ってやがる。
「そうねぇ、あの子抜けてるから」
「バトンも取らずに走り始めたりしてね」
「そりゃいい！トラックも斜めに横切ったりしてな！」
何が面白いのか今度は3人で大爆笑。ねぇ！誰かマネキンを3体持ってきて！

お昼ごはんを食べ終わり午後の部が始まって1時間。スピーカーから数を数える大きな声と共にグランド中央から赤や白の玉がその声に合わせて上に大きく投げられる。
”じゅうななー。じゅうはちー。じゅうきゅー”

グランドを囲んで生徒とその保護者が固唾を飲んで見守る。この2年生の玉入れが午後の一般競技3つ目。既に白組は2つの白星を取られ後が無くなっていた。
”にじゅうにー。にじゅうさーん。にじゅうよーん”
籠の中身が徐々に無くなっていく。ここから見ただけではどっちが優勢か判断出来ない。グランドに座って並んでいる2年生も真剣な表情で自分たちが入れた玉の行方を目で追っている。
”にじゅうろーく。にじゅうななー。にじゅうはーち”
「・・・そろそろだな」
沈黙に耐え切れなかったのか、横で腕を組みグランドを睨みつけている課長が言葉をこぼす。
”さーんじゅっ。さーんじゅいーち”
ふと会場全体の空気が変わった。
”さーんじゅさーん”
掛け声と共に投げられた玉は1つ。玉が地面に落ちたと同時に歓声とため息が会場が包む。
”さーんじゅよーん、さーんじゅごー”
もう誰も聞いていない掛け声がギリギリ聞こえる中、グランド中央ではしゃいでいる子供達と落ち込む子供達が先生に促され立ち上がり整列をする。
”34対32で、あかっ！”
マジック1を消化した赤組全体とその保護者達から再び歓喜の声があがる。
「あーあ、負けちゃったねぇ。でもストレートだと諦めが付くと言うかなんと言うか」
確かにね。太一君の言うように全敗なら潔く負けを認められそうだ。それにしても素晴らしい負けっぷりだよなぁ。
「かなり落ち込んでる子もいるみたいよ。加奈は気にしないと思うけど、小夜ちゃんは大丈夫？」
さっきまで近くのママさん友達と話をしていた早苗さんが戻って

きて俺に聞いてくる。
「どうですかねぇ、結構な負けず嫌いですから。でも多分・・・」
グランドのほぼ反対側、白組の並びから5年生の集団を探す。確か小夜ちゃんは一番背が低いから前の方にいると思うけど・・・。あぁやっぱり、周りの子達が沈んでいるのに我関せずみたいな顔してる。
「運動会自体には興味が無いみたいですね。もともとそこまで運動が得意と言うわけじゃないみたいですから」
そりゃあれだけ徒競走とかにやる気が見られない子が勝ち負けを気にして落ち込むわけ無いよな。きっと今頃は決着ついたんだから早く帰らせろなんて思っているんじゃないか？いや、言い過ぎか。
「そう、なら安心ね。さぁて負けちゃったけど次は加奈の晴れ姿よ」
「親父、こっちの方がゴールが見やすいよ」
「おう！」
課長がやる気満々にカメラを構え、いつ始まっても良いようにスタンバイを終わらせた。入場門でも準備が出来たのか人の動きが無くなる。
”クラス対抗リレー、選手入場！！”
それぞれのチームカラーの鉢巻をした子供達が入場を始め、最後には去年ゴールテープを切った須藤君と加奈ちゃんが入場する、もちろん2人だけたすきをかけて。すでにチームとしての勝負が決しているが加奈ちゃんの表情に諦めたような色は無く、むしろ須藤君を冷ややかに睨みつけるかのような顔をしている。
「おっ、やる気満々だなぁ」
カメラを構えた課長が口元を吊り上げて呟く。確かにやる気がある感じだけど、どちらかと言うと怒っているように見える。
「どうしたんだろ、めずらしい」
太一君も俺と同じ雰囲気を感じたらしい。
「そうだね、何かあったのかな」
基本的に我侭を言って駄々をこねる事はあっても怒るような顔は

今まで見た事が無い。普段明るくてにこやかな加奈ちゃん。そんな子が相手を睨みつけるなんてよっぽどの事があったに違い無い。相手はやっぱり須藤君なんだろうが、その須藤君は別段相手にしてる様子でもなく、やる気があるのかへらへらとした表情をしている。

「殴り合いにならないといいけど・・・」

さすがにあれだけ体格の良い須藤君を相手にして無事に済むわけがない。

「そうね、須藤君ってあの須藤君よね？」

「うん。あの須藤君だよ」

すぐに太一君が早苗さんに答える。あの須藤君ってどの須藤君？首を傾げてる俺に気づいて太一君が説明をしてくれる。

「去年、空手で地区優勝したらしいよ。友達もやってて小学生の部で圧倒的だったみたい。中学生と組手をしてるって話でしかもフルコンタクトらしい」

へー、どうりであんなに体格がいいんだ。格闘技が出来て足も速いってすごいなぁ。さすが小学生と言った感じだね。それにしても、

「フルコンタクトって何？」

「えーっとねぇ、僕も良くわかってないけどいわゆる極真流ってやつみたい。寸止めとかじゃなくてボクシングみたいにグローブをして殴ったり蹴ったりするらしいよ」

「それの優勝者か・・・。穏やかじゃないね」

加奈ちゃん、お願いだから手をだしちゃ駄目だよ。

1年目　秋2（後書き）

寝勒「外で食べるお弁当はおいしいねぇ」
太一「そうだね」
寝勒「うーん・・・」
太一「どうしたの？」
寝勒「ねぇ、太一君はお弁当で何がすき？」
太一「卵焼きかなぁ」
寝勒「ぼ、僕はお、おにぎりがす、好きなんだなぁ」

小夜「それが言いたかっただけでしょ」

1年目　秋3

バトンを受け取るために2年生がトラック半周のところで準備を終える。丁度1年生もスタートラインに立ち後は合図を待つだけとなった。

松山家御一行は丁度ゴール地点の正面に陣を構え、須藤さん家族が隣に陣取りその間には当の子供以上の緊張が走っている。ここは毎年アンカーをやる子供達の保護者の特等席で松山家としては一昨年ぶりにここに構えることになった。

今年の後陣にて敵対する須藤君のお父さんは、なるほど子供が空手で地区優勝をする訳だ、と納得できるような大柄な人で、また聞きだがどうやら午前中最後の綱引きで紅組の一番後ろだったらしく、さっきから課長と一触即発の不穏な空気が流れており、あちらとは違う種類の緊張状態となっている。いや、加奈ちゃんとは同一のものか。

お隣さんのハンディカムがピッと高い電子音をたててCUEの合図を出した途端、空に向けられた銃の撃鉄から火薬の炸裂音が鳴り響いた。直後、会場が応援と歓声の波に飲み込まれる。

ほぼ同時にスタートを切った第1走者は内を紅組、外を白組で併走しそのままカーブへと突入したので内を取っていた紅組が先行する。がその差は僅かでそのままカーブをなぞり出口で若干膨らんだ白組が軸をずらす形で外をとる。凡そ0．5秒差でバントを第2走者へ。

「よしっ！そのまま行け！」

隣の怒鳴り声に反応してしまい、課長と共に発声元を睨みつける。おっと、しまった。向こうは気づく気配は無さそうだけど俺まで何してんだよ。手を出されたら一発KOどころじゃなくなるのに。課長菌が感染したかな？つか課長、あんたはちゃんとモニターを見てろよ。

「さすがに差が付かないねぇ」
各学年の選抜でメインイベントだけに練習も相当積んでいるのかバトンの受け渡しもスムーズでさっきから付かず離れずのまま第３走者が第１コーナーを抜ける。
「うん。特に今年は力が入ってるみたい」
太一君が険しい表情で各々の走者を見送っている。
もう負けが決まってしまった白組は、残すはプライドを守りきる事に目標を変え、まずは全敗を逃れる為に。そして重要種目の２種だけでも死守する方針だとさっき早苗さんのママさん友達から伝達があった。
さすがにこのまま完全優勝をさせてしまっては後世に合わせる顔が無いのか、当の子供達はもちろん、グランドを囲んでいる子供達からも応援の声を荒げており、赤組・白組と先ほどから応援合戦の様子を見せている。いや、白熱するのはいいんだけど、今にもグランドに雪崩れ込みそうな勢いはちょっと控えたほうがいいと思うよ、みんな。
そんな声援に後押しされてか第４走者も両組ともに付かず離れずの状態で最終コーナーへと差し掛かっていた。
「大丈夫かなぁ・・・」
「え？なに？？」
さっきから腕を組み、ずっと眉間に皺を寄せていた太一君がぼそりと一際大きくなった歓声でかき消されながら何かを呟いた。
「ほら、覚えてない？次の子さ、去年も走ってたよね」
「次の子？去年？？」
えーっと、バトンを受け取る準備を始めた男の子を見てみるが・・・。うーん、正直誰かわからない。特に特徴があるわけでもない子なんだけど覚えてない？と言われてもなぁ・・・。
「あっ！もしかしてあの子！？」
そういえば去年、加奈ちゃんの前の走者でバトンを受け取る際に落としちゃった子がいたな。それで出遅れて、さらに出鼻を挫かれ

それまでの緊張も相まってかずるずると引き離されて最終的にはほぼ半周差までついてしまった。
「そうそう、あの子だよ。よしっ！そのままっ！いけっ！！」
そんな事を思い出していると第４走者が終わりを迎え、次にバトンを引き継ぐところだった。ただでさえクラス対抗リレーに抜擢されただけでも緊張するだろうに、去年の事があれば尚の事プレッシャーが重く圧し掛かっているはずだ。スタート時からほとんど変わらない赤組との差で白組が一歩後ろを走り、例の子も外側で構え、目の前に迫った白いバトンを確認した後、左手を後ろへ差し出したまま完全に前を向いた状態で赤組と鼻差で走り出す。

そのままっ！
気持ちは、相手よりも、一歩でも、少しでも、前でっ！
早く！バトンをっ！
後ろの子の右手が大きく前に引き伸ばされ・・・。
ラインが近づく！
白い棒が振り落とされ・・・、左手に・・・。
・・・・・。
つかんだっ！！！
あとは・・・、あとは・・・。
・・・。
右手に持ち替え・・・。
よしっ！
いっけーーーー！！

エンドライン一杯まで引っ張り外枠を疾走。その時には既に赤組と肩を並べておりコーナー入り口へと差し掛かる。そのままの勢いで体が内へ傾いていき・・・。
「「「「よしっ！！！！」」」」
一際大きな歓声が会場を包み込み、白組が初めて前をとった！！

1年目　秋3（後書き）

寝勒「ふぅ・・・疲れるなぁ」
太一「手に汗握るとはこの事だね」
寝勒「気づいたら息をしてなかったよw」
太一「だね。でも今回の書き方って・・・」
寝勒「え？違うよ、全然ざわ・・・ざわ・・・してないよ？」

小夜「極一部のネタを二つも織り込まないで」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2595h/

長夢。

2010年10月12日05時16分発行